

# 有明町内遺跡

—有明町閉町に伴う未報告発掘調査記録・未公開収蔵資料の報告書—

## 【調査報告】

丸岡A遺跡 - 県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

仕明遺跡（第4次） - 町道宇都鼻志陽1号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

## 【既刊報告書の追録】

仕明遺跡（陶磁器・羽口）

長田遺跡（刀子の分析）

楠原遺跡（石器）

## 【収蔵資料の紹介】

高牧城跡遺跡（縄文時代後期の土器ほか）

いせんぼ遺跡（縄文時代後期の土器・磨石・石皿、鉄滓ほか）

水頭地域の表探資料（羽口・鉄滓ほか、町内製鉄跡関係について）

堂ノ上地点の資料（大型打製石斧）

その他の資料

2005年12月

鹿児島県 曽於郡 有明町教育委員会

## 序 文

埋蔵文化財は、日本の歴史や文化を知ると同時に、自分達の住んでいる有明町の歴史・文化をはじめ、先人達の生活のようすをうかがう貴重な宝物であります。

わたし達の有明町は、近隣の松山町・志布志町と合併することとなり、平成 18 年 1 月 1 日をもって志布志市となります。本報告書は、それに伴い、これまで町内で行われた発掘調査成果及び収蔵資料をできるだけ整理し、公開するために取り組んだものであります。一部、掲載に至らなかった成果・資料もありますが、限られた時間で精いっぱい「ありがとう有明町」の気持ちを込めて作業を進めてまいりました。

今後、これらの出土品を研究や社会教育・学校教育の場などにおいて、手軽に活用できるよう整理保管して、地域の歴史や文化に対する愛着と保護や活用につながるようにして参りたいと思います。そして、自分達の住む有明地域の歴史と文化を知り、果ては郷土への誇りと愛着を持って生活して、未来へと引き継いで参りたいと思っております。

終りに、これまで発掘調査や整理作業・報告書作成に従事していただいた多くの方々をはじめ、ご支援・ご指導をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターならびに関係各位の皆様に対して心より感謝申し上げます。

平成 17 年 12 月吉日

有明町教育委員会

教育長 長重逸郎



町章

有明町のシンボルマークとして、明治 100 年を機に、県下に公募して決めたものです。これは、有明町の「ア」を図案化したもので、町民の明るい和と団結をまるく表し、有明町の飛躍と発展を象徴したものです。

\*上記及び表紙・裏表紙の写真は有明町役場総務課権山弘昭氏の提供による  
\*表紙の田ノ神像は「野井倉開田記念碑」、ヒマワリは有明町花である  
\*表紙題字は長重逸郎教育長による

## 報告書抄録

書名	有明町内遺跡							
副書名	- 有明町の南町に伴う未報告発掘調査記録 - 未公開収蔵資料の報告書 - [調査報告] 丸岡A遺跡 - 岐阜県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 - 仕明遺跡 (第4次) - 町道宇都鼻志陽1号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 - [既刊報告書の追録] 仕明遺跡 長田遺跡 楠原遺跡 [収蔵資料の紹介] 高牧城跡遺跡 いせんば遺跡 水頭地域 堂ノ上地点 その他の資料							
シリーズ名	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	(11)							
編集者名	中水忍、黒川晃、倉元良文、下園昌三、栗林文夫、堂込秀人、和田るみ子、東徹志							
編集機関	有明町教育委員会							
所在地	〒 899-7492 施見島駅曾於郡有明町野井倉 1756番地 Tel. 099-474-1111							
発行年月日	2005年12月28日							
遺跡名	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
丸岡A遺跡	有明町	46467	69	31°	131°	[確認] 1995.07.24 ~ 07.28	[確認]	農道整備事業
	伊崎田	-	-	32°	03°	[全面] 1997.07.14 ~ 08.22	約 53 m <sup>2</sup>	
	宇丸岡		38	18'	42'	[報告書作成] 2005.06.01 ~ 12.28	[全面]	約 810 m <sup>2</sup>
種別	時代	遺構	遺物	特記事項				
散布地 集落跡	縄文時代晚期・前期	竪穴状遺構 1基	黒川式、曾畠式、轟式					
	・ 早前期半	集石遺構 1基	前平式、吉田式ほか					
		柱穴 23基	石鐵、石錐、打製石斧、剥片					
遺跡名	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
仕明遺跡 第4次	有明町	46467	69	31'	131'	[H16. 試掘・立会]	約 60 m <sup>2</sup>	町道拡幅
	蓬原	-	-	28'	02'	2004.07.24 ~ 07.28		
	宇宮ノ前、 仕明		66	11'	32'	[H17. 試掘] 2005.07.14 ~ 08.22		
種別	時代	遺構	遺物	特記事項				
	縄文時代前期	おとし穴状遺構 1基	なし					

\*以下、追録・収蔵資料紹介のため詳細を省略する

遺跡名	所在地	遺跡番号	北緯	東経	時代	遺構・遺物
楠原遺跡	蓬原字楠原	69-116	31°29'46"	131°01'18"	弥生、古墳、中世	石器、鉢
長田遺跡	原田字長田	69-65	31°27'09"	131°00'13"	古墳	鉄製刀子
高牧城跡遺跡	山重字高牧	69-81	31°32'03"	130°59'01"	縄文早・後期、古墳、中世	石板式、綾式ほか
いせんば遺跡	伊崎田字いせんば	69-16	31°32'54"	131°02'06"	縄文後期・中世	綾式、市来式、磨石、石器
堂ノ上地点	伊崎田字牛ヶ道附近	-	31°33'27"	131°02'09"	縄文前期～弥生？	大型打製石斧
水頭地域	野井倉字水頭	-	31°28'37"	131°03'10"	縄文前期、中世～近世	羽口、鉢



1. 丸岡遺跡 2. 仕明遺跡 3. 長田遺跡 4. 楠原遺跡 5. 高牧城跡遺跡  
6. いせんば遺跡 7. 水頭地域 8. 竜ノ上地点 9. 土器V.102出土地 10. 土器V.103出土地

図1 掘載遺跡・地域・地点の位置

## 例　　言

1. 本書は、鹿児島県曾於郡有明町閑院に伴う未報告発掘調査記録・未公開収蔵資料の報告書である。そのため、既に報告書刊行済みの発掘調査に関する追録や町収蔵資料の報告も含んでいる。
2. 発掘調査は、各事業主より依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力・支援のもと有明町教育委員会が実施している。今回の整理作業ならびに報告書作成は有明町教育委員会が経費を負担して行っている。
3. 発掘調査は各事業年度内に実施している。整理作業ならびに報告書作成は平成17年4月1日から12月末日にかけて行い、報告書刊行をもって完了している。
4. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は以下の者が担当している。所属は当時である。なお、その他は東徹志が実施している。

丸岡A遺跡の確認調査：黒川亮（有明町教育委員会）、倉元良文・下園昌二（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

本調査：中水忍（有明町教育委員会）、栗林文夫（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

整理作業・報告書作成：室込秀人（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、出口順一朗、東徹志（有明町教育委員会）  
5. 遺物写真の撮影を福永修一、西園勝彦（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、現像・焼付けを大村彌紀・中川ヒロミ（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご協力頂いている。

6. 本書の作成は、東のもと川上真理を中心 安野美子・若松孝雄・山元弓枝が各作業を実施している。丸岡遺跡・植原遺跡の石器については室込秀人が選別している。石材同定については和田るみ子（鹿児島大学大学院）が行っている。執筆については中水忍・黒川亮・和田るみ子・東徹志が分担している。
7. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成に際しては、以下の方々のご指導・ご支援を賜った。記して感謝を申し上げたい。

新東晃一、池畠耕一、中村耕治、長野慎一、立待次郎、鶴田静彦、前追亮一、黒川忠広、東和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、小村美義（志布志町教育委員会）、東朋子【組織別・五十音順・敬称略】

8. 本書の編集は、東徹志が行っている。

9. 調査記録・遺物の保管は、鹿児島県曾於郡有明町野井倉1760番地 有明町総合体育館内および有明町農業歴史資料館内に保管する。問合せは有明町教育委員会 社会教育課 社会教育係まで。なお、平成18年1月1日以降は、志布志市教育委員会 文化振興課 文化財係に移管する。

## 凡　　例

1. 各調査並びに作業について、基本的に鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導などに準拠して行っている。
2. 遺構配置図などに国土座標ラインを明示している。国十座標の基軸方向及び数値は、事業実施計画図面より引用し、旧測地系を用いている。
3. 遺構平面図には方位を記載している。方位は、調査に際してはおもに磁北を用い、報告書では磁北と座標値を用いた。磁北の場合は「MN」と表記している。
4. 遺構実測図・土壟断面図などに表記した標高は、事業実施計画図面より引用した数値であり、m（メートル）をおもな単位として用いている。遺構の法量は検出面からの数値である。掲載図面の縮尺は、各図に縮尺を明示している。なお、写真図版の遺物写真については、縮尺を統一していない。
5. 報告書中における遺構の呼称は遺構ごとに通し番号を用いている。掲図に示した遺物番号は本文中の遺物番号に対応する。遺物番号は章ごとの通し番号である。まとめや写真図版においては「章番号・遺物番号」と表示している。
6. 土色名に数字が入っているものは、小山正忠・竹原秀雄編著 2001 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖23版』に準じた。記載に際しては、原則として色名・記号・土質の順で記した。
7. 本書に用いた広域地図は、有明町所有の『有明町管内図』を使用している。
8. 土器は、同一個体と考えられるものを観察表において、同一セルにて表記して示している。土器胎土中の混和材同定は肉眼観察であり、記述は、石英=半透明や透明なもの、長石=不透明な白色砂、雲母=扁平で薄く光るもの、黑色砂=黒色のもの、赤色砂=赤色のもの、に分けている。観察表中の記号は、○最も多量、○含む、△極少量、○含まない、を意味する。
9. 石器の石材同定は、肉眼観察による。

## 目 次

### 序 文

報告書抄録

例言・凡例

第Ⅰ章 有明町の環境 .....	(東) 1
第Ⅱ章 九岡A遺跡の発掘調査報告 .....	(中水・黒川・東) 9
第Ⅲ章 仕明遺跡(第4次)の発掘調査報告 .....	(東) 43
第Ⅳ章 既刊行報告書の追録 .....	(財団法人 元興寺文化財研究所・東) 46
第1節 仕明遺跡(1~3次)	
第2節 長田遺跡	
第3節 楠原遺跡	
第V章 町収蔵資料の紹介 .....	(和田・東) 53
第1節 いせんば遺跡	
第2節 高牧A遺跡	
第3節 水頭地域の表探資料	
第4節 堂ノ上地点の表探資料	
第5節 その他の資料	

あとがきにかえて

図 版

## 挿図・表・写真 目次

### 報告書抄録

図1 調査地点

### 第Ⅰ章

図I.01 有明町の位置 .....	3
図I.02 有明町の周辺地形 .....	3
図I.03 有明町域の略地形 .....	3
図I.04 寛永鳥取旧市町村配置 .....	4
図I.05 有明町遺跡分布図(1) .....	5
図I.06 有明町遺跡分布図(2) .....	5
表I.01 有明町遺跡一覧表 .....	6~8

### 第Ⅱ章

表II.01 確認調査・本調査の組織 .....	10
表II.02 整理作業と報告書作成の組織 .....	10
図II.01 確認調査トレーニング .....	11
表II.03 確認調査の基本手順 .....	11
表II.04 確認調査トレーニングの概要 .....	11
図II.02 九岡A遺跡の位置 .....	12
写真II.01 調査状況(表土除去) .....	13
図II.03 調査区範囲とグリッド配置 .....	13

図II.04 調査区上層断面(1) .....	14
表II.05 基本手順 .....	14
図II.05 調査区下層断面(2) .....	15
図II.06 III・IV層 出土遺物の分布状況 .....	17
図II.07 III・IV層 出土土器(1) .....	18
図II.08 III・IV層 出土土器(2) .....	19
表II.06 III・IV層 出土土器の観察表(1) .....	20
表II.09 III・IV層 出土土器(3) .....	21
図II.10 III・IV層 出土土器(4) .....	22
表II.07 III・IV層 出土土器の観察表(2) .....	23
図II.11 IV層 出土土器(1) .....	24
表II.08 III~V層 出土土器の計測表(1) .....	25
図II.12 IV層 出土土器(2) .....	26
表II.09 III~V層 出土土器の計測表(2) .....	27
写真II.02 IV層 出土石器176(磨製石斧) .....	27
図II.13 調査区下層断面 .....	28
図II.14 V層上面 造構配置 .....	28
図II.15 雷層上面 受穴状土坑1・柱穴1~23の検出状況 .....	29
図II.16 雷層上面 受穴状土坑1と出土土器 .....	30
図II.17 雷層上面 柱穴1~23 .....	30

写真II.03	柱穴1土層断面	30	図IV.06	植原遺跡 遺物分布	51
表II.10	柱穴1～23の詳細	31	図IV.07	植原遺跡 出上鉱溝	51
図II.18	VII層上面 塚石遺構と出土土器	31	表IV.01	植原遺跡 石器の計測表	51
図II.19	VII層 出土遺物の分布状況	32	図IV.08	植原遺跡 出土石器	52
図II.20	VII層 出土土器（1）	33	第V章		
図II.21	VII層 出土土器（2）	34	図V.01	高牧城跡遺跡の位置	53
図II.22	VII層 出土土器（3）	35	図V.02	高牧城跡遺跡 表採遺物（1）	54
図II.23	VII層 出土土器（4）	36	図V.03	高牧城跡遺跡 表採遺物（2）	55
図II.24	VII層 出土土器（5）	38	表V.01	高牧城跡遺跡 表採上層の観察表	56
表II.11	VII層 出土土器の観察表（1）	39	図V.04	いせんば遺跡・堂ノ上地点の位置	57
表II.12	VII層 出土土器の観察表（2）	40	表V.02	鶴洋の観察表	58
図II.25	VII層 出土石器（1）	41	図V.05	いせんば遺跡 表採遺物（1）	58
図II.26	VII層 出土石器（2）	42	図V.06	いせんば遺跡 表採遺物（2）	59
表II.13	VII層 出土石器	42	表V.03	いせんば遺跡 土器の観察表	60
第III章			表V.04	いせんば遺跡 石器の観察表	60
図III.01	仕明遺跡の位置	43	図V.07	いせんば遺跡 表採遺物（3）	61
図III.02	仕明4次（2004）基本断面	44	図V.08	いせんば遺跡 灰採遺物（4）	62
図III.03	仕明4次（2005）3トレンチ遺構検出状況	44	図V.09	いせんば遺跡 表採遺物（5）	63
写真III.01	調査地（2004）の近景	44	図V.10	いせんば遺跡 表採遺物（6）	64
写真III.02	アカホヤ層堆積状況（2004）	44	図V.11	いせんば遺跡 表採遺物（7）	65
写真III.03	調査状況（2005）	45	図V.12	いせんば遺跡 表採遺物（8）	66
第IV章			図V.13	堂ノ上地点 表採遺物（1）	67
図IV.01	仕明遺跡 出土土器	46	図V.14	堂ノ上地点 表採遺物（2）	68
写真IV.01	鉄分付着の釋石製品	46	図V.15	水頭地域の位置	69
図IV.02	長田遺跡の位置	47	図V.16	水頭地域 表採遺物（1）	70
図IV.03	長田遺跡 出土刀子	48	図V.17	水頭地域 表採遺物（2）	71
写真IV.02	長田遺跡 出土刀子のレントゲン写真	48	図V.18	土器102の出土地点	72
写真IV.03	刀子の分析箇所	48	図V.19	2005年度の寄贈遺物	72
図IV.04	刀子表面のXRFスペクトル	49	表V.05	土器102・103の観察表	73
図IV.05	植原遺跡の位置	50	図V.20	土器103推定出土位置	73
			図V.21	明治39年頃の周辺地形	73

## 図版目次

- 図版1 丸岡A遺跡 空中写真  
 図版2 丸岡A遺跡 遺構（1）  
 図版3 丸岡A遺跡 遺構（2）  
 図版4 丸岡A遺跡 土器（1）  
 図版5 丸岡A遺跡 土器（2）

- 図版6 丸岡A遺跡 石器  
 図版7 仕明遺跡・長田遺跡・植原遺跡の追録  
 図版8 高牧城跡遺跡  
 図版9 いせんば遺跡ほか  
 図版10 いせんば遺跡・堂ノ上地点・水頭地域ほか

## 第Ⅰ章 有明町の環境

### 第1節 現在の有明町

有明町は鹿児島県の曾於郡にあり、大崎町・志布志町・松山町・旧大隅町（現、曾於市）に接する。町の沿革は、明治24年に志布志村から西志布志村として分かれた後、旧野方村の山重地区と合併して、昭和33年に有明町となり現在に至っている。平成18年1月からは志布志町・松山町と合併して志布志市として市制に移行する予定である。

町の人口は大正9年では約9200人、平成17年で約12,200人である。町域面積は98.05km<sup>2</sup>、その内訳は田畠37.5%・山林42.1%・その他20.4%である。このうち水田の多くは、河川より高い台地上に広がる蓬原開田・野井倉開田が占めており、この約1,000haにもおよぶ開田事業は有明町の代名詞となっている。

現在の基幹産業は農業で、畜産・茶・園芸・水稻などが生産されている。とくに茶業振興は盛んで、近年の栽培面積が県内3位にまで伸びている。また、菱田川・田原川沿いでは、水質が養殖に適しているため、うなぎの養殖が盛んである。

### 第2節 地理的環境

有明町は鹿児島県の大隅半島に位置し、宮崎県との県境に近く、日向灘沿岸にある。町域は志布志湾奥にわずかな海岸線をもち、そのほとんどは内陸に広がっている。町城は河川流域などの低地が極わずかで、標高が高い台地が多くを占め、河岸段丘で標高15~35m、台地で標高60m以上を測る。しかし、その様相は南北域で異なっている。町城の南部は、典型的なシラス台地が広がり、「原（はら）」と表現される比較的平坦な地形が見られる。菱田川下流域には平坦な河岸段丘面が広がっている。一方、北部域は、山林の割合が多く、シラス台地を侵食した谷が多く見られる。台地上には平坦面が少なく、山間部に近い状況である。

河川については、町域を二分するように流れる菱田川が最も大きく、次いで田原川や安楽川支流の本村川・高下谷川などがある。その他にも湧水を水源とした小川や小規模な河川が数多く存在する。これらの河川はシラス台地を浸食して形成した谷底を流れおり、集落の営まれる台地と河川の高低差が大きい点が特徴である。

気候については、温帯気候（南海型気候区）に属しており、高温多雨が特徴である。冬季でも農作物の作付けが可能であり、植物の生育も盛んである。

### 第3節 歴史的環境

有明の歴史は、近代の蓬原開田と野井倉開田に代表されるように農業の歴史として語られる。蓬原開田は、明治25年に始まり大正7年に完成している。測量技術も未熟な時期に、馬場藤吉に代表される地域住民の借財によって進められた特徴をもっている。一方、蓬原開田から数十年遅れて始まり太平洋戦争後に完成した野井倉開田は、野井倉甚兵衛や地域住民の代表者達を中心にして国や県の力を借りつつ進められている。その他にも山重太吉を中心に行われた荒谷開田などがあり、開田・開拓による生産増加と生活改善が今日までの目標となっている。そして、現在も農業を基幹産業とした生活には、熊野神社の神舞や白鳥神社の福神舞、集落単位の田ノ神講・観音講など、昔から引き継がれてきた民俗行事が数多く残っており、生活中に活きている。

文献などからうかがい知ることのできる町域全体の動向としては、古代末に発生した莊園の救仁院（有明町の川東地区<sup>\*2</sup>と志布志町、松山町の範囲）と救仁郷（有明町の川西地区と大崎町の範囲）が菱田川を境に南北に二分して存在しており、近世に至るまで変わらなかった。近世になり当時の松山村が救仁院から分離すると、救仁郷より救仁院へ川西地区（蓬原・原田・野神）を組み入れ、明治に志布志村となっている。

近代以前の詳しい歴史は、農村地帯のため今に遺る文献資料が乏しいうえ、明治期の廃仏毀釈が激しかったこともあり、貴重な資料が失われ、不明が多い。しかし、近年は発掘調査により貴重な考古資料が多く発見されている。

先ず、旧石器時代・縄文時代草創期は遺跡が少なく、遺物が数点確認されたのみである。しかし、縄文時代早期になると遺跡数は大幅に増え、町内全域に分布する。下堀遺跡の調査では、連穴土坑の燃焼部下に見られる「シミ状遺構」や何らかの施設の可能性のある杭状柱穴で構成された円形柱列などと類例の少ない遺構も発見されている。縄文時代前期から晩期にかけては、町域北側に遺跡分布が

## 第Ⅰ章 有明町の環境

偏る傾向があるが、晩期終末もしくは弥生時代早期には、町域南側にも分布が見られる。このように遺跡の動態に時期ごとの変化が見ることができる。

弥生時代になると遺跡数は少なくなるが、野井倉校区の土橋集落出土の青銅製銅矛や本村の花弁形住居などと貴重な遺物・遺構が発見されている。弥生時代の集落分布は、現在のところ不明な点が多いが、台地・河岸段丘上の古墳時代の集落と共に一部が発見されることが多い。他地域の弥生時代の集落立地傾向を参考にすると、今後は現在の河川周辺の低地において、集落などが発見されることが予想される。

古墳時代では、円墳として県内最大級の原田古墳やその周囲で発見された地下式横穴墓・金装飾の太刀が出土したと言われる蓬原上馬場の土壙墓群などの墳墓に関することが知られている。しかし、近年は長田遺跡・仕明遺跡・上苑A遺跡などの様に、堅穴住居や掘立柱建物の集まつた集落跡が確認されることが多く、また、馬具・耳環などの金属製品も出土している。

古代は発掘調査調査例が少なくて詳しくは不明であるが、町保管の出土地不明の表探遺物に良好な土師皿などが含まれており、未発見の集落などが存在するものと考えられる。

古代末からは、中国の輸入陶器の出土が多くなり、中世になると蓬原城が救仁郷の中心として栄えていたことが文献資料からうかがい知ることができる。蓬原城は菱田川のほとりにあり、独立した丘陵上に築かれている。隣接して金丸城が存在する。それ以外にも、台地上には「内城」の小字があることから、縄張りが周囲に広く拡がっていた可能性が考えられる。その周囲にも、菱田川やや上流の対岸にある仮屋集落の磐伝承や猪ヶ宇都集落の馬具・武具製作伝承、小松集落の製鉄伝承などが存在しており、縄張りの復元がまたれる。また、菱田川下流には蓬原城の前身と言われる片城や大崎町内の天守（あもい）城があり、菱田川が戦略上重要視されていたことが想像できる。

この他詳しい有明町の歴史については、下記の参考文献を参照されたい。

\*1 有明町役場企画課資料による

\*2 町内は菱田川を境に川西地区と川東地区に分けることが多く、さらには江戸時代の旧村単位である小学校校区で地域がまとまっている。川西地区（山重校区・野神校区・原田校区・蓬原校区）と川東地区（伊崎田校区・野井倉校区・通山校区）である。

### 【参考文献】

- 有明町歴史学編さん委員会 昭和55年 「有明町歴史」 有明町  
有明町文化財保護審議委員会 昭和49年 「有明町の文化財 第1集」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和51年 「有明町の文化財 第2集 -蓬原・野井倉の開拓史-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和54年 「有明町の文化財 第3集 -菱田のタカシマサ-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和55年 「有明町の文化財 第4集 -お地蔵さんと競走さま-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和56年 「有明町の文化財 第5集 -馬鹿さんと水神さま-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和57年 「有明町の文化財 第6集 -伝説-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和58年 「有明町の文化財 第7集 -むかし話-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和58年 「有明町の文化財 第8集 -おりとりと民謡-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和61年 「有明町の文化財 第9集 -いしづみをはずねて-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 昭和61年 「有明町の文化財 第10集 -戦争と駆け隕-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成元年 「有明町の文化財 第11集 -祭りと諏-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成2年 「有明町の文化財 第12集 -伊勢田和紙の歴史と伝承-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成3年 「有明町の文化財 第13集 -おのの地名-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成5年 「有明町の文化財 第14集 -曾の方言-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成7年 「有明町の文化財 第15集 -曾のあそび-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成9年 「有明町の文化財 第16集 -竹の根隕-」 有明町教育委員会  
有明町文化財保護審議委員会 平成16年 「有明町の文化財 第17集 -石塚-」 有明町教育委員会  
有明町教育委員会 昭和56年 3月 「蓬原島無形民俗文化財 猪野神社神舞保存記録報告書」 有明町教育委員会  
蓬原島無形民俗文化財 猪野神社神舞保存記録報告書  
蓬原島教育委員会 1973 「蓬原島町行司道跡地名目」  
蓬原島教育委員会 1977 「蓬原島町行司道跡地名目」  
蓬原島教育委員会 1978 「大崎地区風土文化財分布調査報告書」 蓬原島郷風土文化調査報告書(9)  
須須利一・中村耕作 1984 「大崎地区風土文化財分布調査報告書 -昭和58年度-」 蓬原島郷風土文化調査報告書(29) 蓬原島教育委員会  
蓬原島教育委員会 1985 「蓬原島郷市町村行司道跡地名目」 蓬原島郷風土文化調査報告書(36)  
牛ノ瀬修・中村耕作・赤木久美子 1985 「紀元前2世紀 山底遺跡」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(1) 有明町教育委員会  
出口剛一・堂込秀人 2003 「長田遺跡」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(2) 有明町教育委員会  
牛之瀬一郎・柴田秀一 2003 「黒喜多跡 (遺跡1・2号)、世界遺産、牧人小屋、人道遺跡、野原A遺跡、本村遺跡」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(3) 有明町教育委員会  
出口剛一・鶴川忠広 2003 「蓬部出雲跡 (遺跡1・2号)、櫛原遺跡 (遺跡2)」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(4) 有明町教育委員会  
牛之瀬一郎・柴田秀一・横山一郎・東徹志 2005 「「古墳時代」下限遺跡」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(6) 有明町教育委員会  
牛之瀬一郎・中水一郎・堂込秀人・東徹志 2006 「横須賀跡」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(8) 有明町教育委員会  
牛之瀬一郎・出澤一郎・堂込秀人・東徹志 2006 「「古墳時代」右近遺跡」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(9) 有明町教育委員会  
山口順一郎・飯野博隆・松崎千朗・飯手浩二郎・和田利み子・東徹志 2006 「「古墳時代」(1・2次)」 有明町郷風土文化財発掘調査報告書(9) 有明町教育委員会

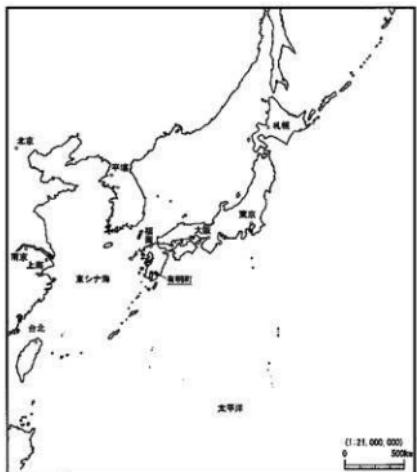


図 I .01 有明町の位置

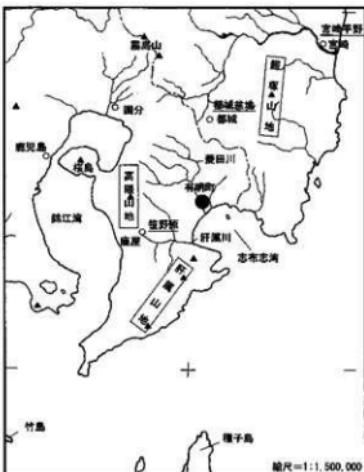


図 I .02 有明町の周辺地形

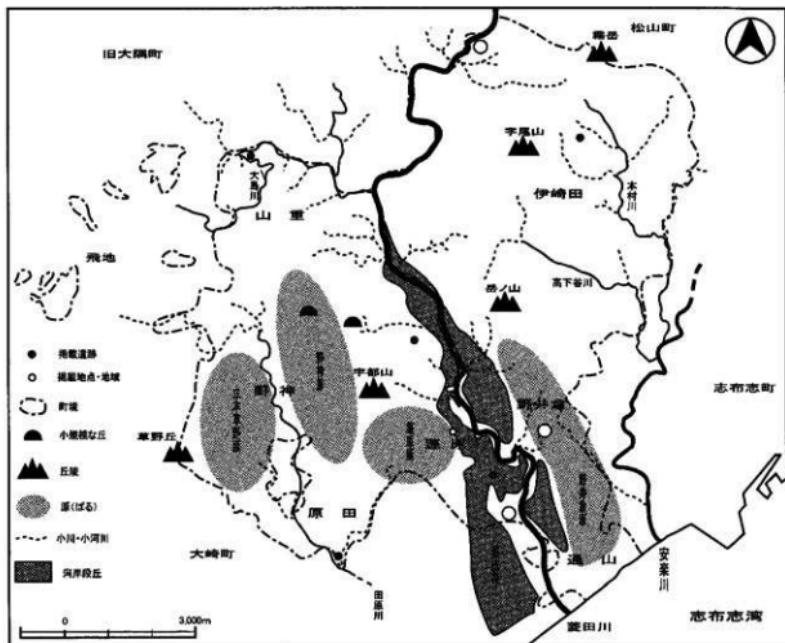


図 I .03 有明町域の略地形

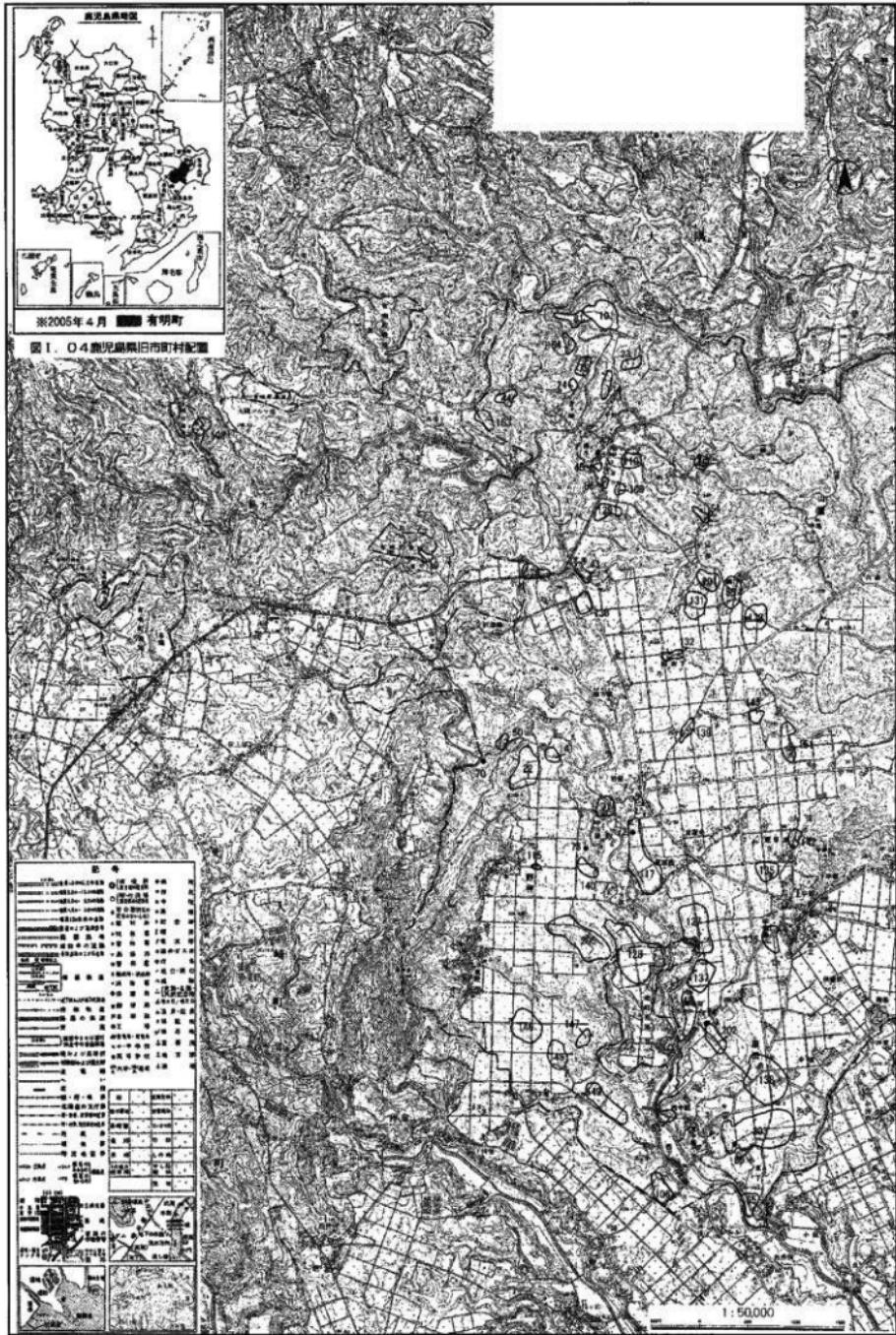


図 I .05 有明町遺跡分布図 (1)



図 I .06 有明町遺跡分布図（2）

## 第1章 有明町の環境

表1.01 有明町の遺跡一覧

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺物・遺物等	備考
69-1	御井谷	ヤナイダニ	山塙字御井谷	台地	縄(早・晚)	土器(肩平式), 黒色研磨土器, 粗製土器	
2	松ヶ尾	マツガオ	伊崎出字松ヶ尾	台地	縄(早・晚)・中	素平式, 打製石斧, 土器	H 11 分布
3	白ヶ尾B	シロガオ	伊崎出字松ヶ尾・白ヶ尾谷	台地	古	平削式	H 11 分布
4	牧原A	マキハラ	伊崎田字牧原・大通	台地	古	石破式, 肩平式	H 7 分布, H 12 全面
5	伊崎田耕	イサキタガバ	伊崎田字牧・西ヶ道・横森田	台地	縄(早・後)	石破式, 吉田式	H 11 分布, 旧名称「西之」)
6	御船A	カリヤ	野井字御船	台地	縄(早・後)	船形式	H 11 分布
7	飯坂B	カラヤ	野井字飯坂	台地	中世	打製石斧, 平削式	H 11 分布
8	社ヶ越B	シカガツ	伊崎田字社ヶ越・魂瀬	台地	縄(中・晚)・春(古)	打製石斧, 石器	H 11 分布
9	伏谷	ヌカタニ	伏神字伏谷	台地	縄(中・晚)・春(今)	打製石斧, 石器	
10	鹿牧A	カガマキ	山東字鹿牧	台地	縄(早・中・晚)	石器	H 11 分布
11	向殿	ムコウダン	伊崎田字向殿・谷ヶ道	台地	古	石, 頭	H 11 分布
12	高吉	タカヨシ	野井字高吉・前田・下段	台地	縄(中・晚)	石器	
13	興原C	ナワセ	伊崎田字興原・社ヶ越	台地	古		H 11 分布
14	下平野	シモヒラノ	(山並野) 平野	台地	縄(後)	土器	
15	黒畠A	クツラ	伊崎出字黒畠・牧原	台地	縄(後)	土器	H 7 分布
16	いんしんはん	インセンボ	伊崎田字社ヶ渡・大通	台地	縄(後)・中世	磨製石斧, 土器	
17	社ヶ渡A	シカガツ	伊崎田字社ヶ渡・坂ノ下	台地	縄(後)	土器	H 11 分布
18	倪屋原	カリヤカシラ	野井字倪屋原・倪原	台地	縄(後)・中世	土器器, 破片	H 11 分布
19	平船A	ヒラボ	野井字平船・舟手上	台地	縄(後)・中世	三足式, 土器器	H 11 分布
20	十橋	チヂバシ	野井字舟橋・下原・土原	台地	縄(後)・春(中)	舞踊	
21	向原B	ムコウダン	蓬原字向原	台地	縄(後)		
22	牧原A	カガマキ	野井字牧原・尾尾・中牧	台地	縄(後)	磨製石斧, 打製石斧	
23	高牧B	タカマキ	山塙字高牧	台地	古(古代)	中津爪式, 土器	H 11 分布
24	食ヶ崎C	クラガサキ	山塙字食ヶ崎	台地	縄(後), 春	七尋	H 11 分布
25	中尾	ナカオ	山塙字中尾・長谷	台地	縄(後)	土器	
26	干ヶ道	ウシガサコ	伊崎出字牛ヶ道・松ヶ尾・牛体	台地	縄(後)	石雕	
27	大沼	オオココ	伊崎田字大沼	台地	縄(早・晚)	家ノ神式, 入住式	H 7 分布
28	興原A	ナワセ	伊崎田字興原・坂ノ下	台地	縄(後)・中世	土器, 土器器	H 11 分布
29	武野	イノ	伊崎田字武野・井頭・力石	台地	縄(後)		H 11 分布
30	河江原	ムカエバラ	伊崎田字向江原	台地	縄(後)	剥片石器	H 7 分布
31	山原	ヤマバハル	伊崎田字山原・宮谷	台地	縄(後)	入住式, 磐石, 帶石, 痕片	H 11 分布, 全面
32	丸元	ワダモト	伊崎田字丸元	台地	縄(後)・古	中古巨量, 带石, 石斧	H 11 分布, 全面
33	下原	シモハラ	伊崎田字下原	台地	縄(後)・古	土器	H 11 分布
34	向原	ムコウバル	野井字向原・浜原・中川・山水	台地	縄(後)・古	打製石斧 円錐(後ノ内古墳)	H 11 分布
35	平尾台	ヒラオ	野井字平尾・井手・小松	台地	縄(後)・中世	打製石斧, 土器	H 11 分布
36	黒原C	クツラ	伊崎田字黒原・大通	台地	縄(後)	土器	
37	坂ノ下	サカノシタ	伊崎田字坂ノ下	台地	縄		H 11 分布
38	丸岡A	マルオカ	伊崎出字丸岡・方石	台地	縄	石雕, 土器, 石器(打, 磨)	
39	ヒノ添A	ウエノハラ	伊崎出字ヒノ添	台地	縄	青銅	H 11 分布
40	平尾	ヒラオ	野井字平尾	台地	縄		H 11 分布
41	田添	カワゾエ	山塙字田添・鶴ヶ辻・谷添	台地	縄(後)・春(中)	石斧	
42	麻屋	カカボリ	原田字麻屋・下原	台地	縄, 弦	土器器	
43	約段	シリダン	山塙字約段・中通・水通	台地	古(後)	土器, 石器	
44	前頭A	マエコト	山塙字前頭・松ヶ道	台地	古(中)	石斧	
45	上平野	カミヒラノ	山塙字上平野・清水	台地	古(中)	土器	
46	山原	ヤマシゲ	山塙字山原	台地	縄(中)	土器, 石器	
47	松原	マツバラ	野井字松原・上ノ原	低地	縄(中・後)	土器	H 7 分布
48	泊り	ステリ	庵原字泊り・日躑・山ノ前	台地	縄(中)	石器, 石器	
49	大崩A	オオブノ	庵原字大崩・上平園・小松	台地	縄(古)	上器, 石器	H 11 分布
50	古跡	フルイケ	野井字古跡・高尾	台地	縄(中)	石器(磨製, 打製)	
51	清水	シミズ	原田字清水	台地	縄(中)	打製石斧, 磨製石斧	旧名称「元宮の下・水田」
52	平場	タサバ	野井字平場・坪山・前堀	台地	縄(古)	石斧, 土器器	
53	下水流	シモヅル	原田字下水流・宮ノ前	台地	古	石斧, 土器器	H 11 分布
54	山園A	タブチ	野井字山園・山中	台地	縄	土器, 石器	
55	田園B	タブチ	野井字田園・久久保	台地	縄	打製石器	
56	吹切C	フキキリ	山塙字吹切・上平野	台地	縄(中)		
57	三方塙	サンボウサカイ	伊崎田字三方塙	台地	縄(中)	土器	
58	前田	マエダ	伊崎田字前田	台地	縄	土器, 石器	
59	鬼段A	ヒガシダン	伊崎田字鬼段	台地	縄(中)		
60	中野	ナカノ	伊崎田字中野・下原	台地	縄	土器, 石器	
61	西ノ谷	ニシノタニ	野井字西ノ谷	台地	縄		
62	井手上A	イデウエ	野井字井手上・上水流	台地	縄(古)	土器, 石器, 入器, 土器器	H 11 分布
63	寺村	ヨシムラ	野井字寺古村・野古	台地	縄	石器, 打製石斧	
64	上原A	ウエハラ	野井字上原・西原	台地	縄	土器	
65	長川	ナガタ	原田字長川	台地	縄(古)	山ノ門式, 水川式, 土器	H 8 分布, H 11 全面
66	佐用	シアケ	益原字佐用・堀ノ前・大瀬・牧	台地	縄(古)	山ノ門式, 土器	H 8 分布, H 12 ~ 14 全面

## 第Ⅰ章 有明町の環境

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺物・遺物等	備考
67	平財古墳	ヒラチコツン	山腹上・平野	台地	古	円墳	
68	興古墳	エイコツン	伊賀田字度ヶ道	台地	古	円墳	
69	片平古墳	ハタケコツン	蓬田字社明	低地	古	円墳	
70	山符ノ上古墳	ヤマフシノウコツン	野寺字後平	台地	古	円墳	
71	足尾古墳群	アシオカツンダン	野寺字洞内・月子元	台地	古	円墳3基	
72	中万古墓群	ミヤクダクムツク	野寺字穴八景	台地	古	円墳	
73	鹿追古墳群	クルツコツンダン	野寺字岩造	台地	古	円墳	
74	高井田古墳群	タカイダコツンダン	坂出字下原	台地	古	円墳1基、方墳1基	
75	鹿ヶ崎B	クワガサキ	山腹上・中・下・平野	台地	歴		
76	牧原	マキハラ	伊賀田字牧原・大通	台地	歴		H 13 全面
77	鶴崎丘	ハクザキ	伊賀田字鶴崎	台地	中世		
78	向段A	ムコグダン	蓬田字向段	台地	歴		
79	金丸城跡	キンマルショウアツ	蓬田字神風	丘陵	中世	空瓶	
80	片平城跡	ハタケコツンショウアツ	蓬田字下木瀬・仕明	丘陵	中世		
81	高牧城跡	タカムタショウアツ	蓬田字高牧	丘陵	中世		山城
82	大代	オオゲイ	野寺字大代・櫛山・大森	台地	歴・古代	土器器	H 11 分布
83	平呂	ヒラ	野寺字平呂	台地	古代・中世	土器器、青磁	H 11 分布
84	洗五	ジゴ	野寺字吉次五	台地	古代	土器器	H 11 分布
85	原田古墳	ハラダコツン	原田字大塚・山口・執	台地	古	円墳	H 14.1 町指定
86	高馬塗下式火	カマツカヨシコツア	蓬田字小松・内城	台地	古	削、削、人骨	H 13 24.1 町指定
87	東	ヒガシ	野寺字東・御塙	台地	歴		H 11 分布
88	横堀	ヨコボリ	野寺字横堀	台地	歴(早)・弥・古	遺穴七块1基、集石30基、耳挖／神式、土器器	H 12 全面
89	下段C	シモダン	野寺字下段・東	台地	縄・弥	土器	H 11 分布
90	下段B	シタダン	野寺字下段・東	台地	苏		H 11 分布
91	蓬坂城跡	ハボウザカショウアツ	蓬坂字山尚	台地	中世	城、空塙、土器	H 14.1 町指定
92	高吉登神跡	シコジマツカミノイハ	蓬坂字川永	低地			H 14.1 町指定
93	御前軒幸寺跡	エイジンカツラジツ	蓬坂字神澤	低地			H 14.1 町指定
94	高宗山心跡	カツジンサンシン	野寺字通山	低地		一字・石器	H 14.1 町指定
95	御前軒幸行跡	エイジンカツラヒヨウ	伊賀田山口	台地			H 14.1 町指定
96	平馬A	ハヤマ	野寺字平馬	台地	赤		H 11 分布
97	平馬B	ハヤマ	野寺字平馬	台地	赤	土器	H 11 分布
98	早坊C	ハヤブ	野寺字早坊	台地	赤	土器	H 11 分布
99	古原	コシラ	野寺字古原	台地	赤	土器	H 11 分布
100	中次A	ナカシギ	野寺字中次	台地	赤		H 11 分布
101	中次B	ナカシギ	野寺字中次	台地	赤		H 11 分布
102	前原	マエバチ	野寺字前原	台地	赤	土器器	H 11 分布
103	坂ノ下A	サカシカ	伊賀田字坂ノ下	台地	古		H 11 分布
104	上丸	エニソン	野寺字上丸・高丸	台地	縄(早)・古	遺覺、成田式、夥穴住居2基	H 8 分布、H 13 全面
105	萩	マキ	蓬坂字萩・外原	台地	古	土器	H 11 分布
106	坂ノト	サカノト	蓬坂字坂ノ上・前原・西原	台地	弥・古		H 11 分布
107	タニガワA	伊賀田字塔ノ底・家水・山院	台地	古			H 11 分布
108	堀切	ホリキリ	野寺字堀切	台地	弥		
109	吹切A	フツカリ	山寺字吹切	台地	弥		
110	新道	フタザギ	山寺字新道	台地	古		H 10 分布
111	山ノ口	ヤマノクチ	伊賀田字馬場ヶ辻・中田・山ノ口・南・柏・道	台地	縄	石器、石斧	H 11 分布
112	戎	ダン	伊賀田字戎・横ヶ原	台地	縄(中・後)		
113	立山	タチヤマ	伊賀田字の山・上・園・平・立山	台地	古		H 11 分布
114	鶴原古墳	クスバロコツン	蓬坂字大酒・丸丸	台地	古	円墳	
115	長坂古墳	ナガハカコツン	野寺字岩道・立下	台地	古	円墳	
116	鶴原	クスバロ	蓬坂字楠原・大通	台地	弥・古	土坡2基、成田式	H 2 分布、H 9 全面
117	穴倉	アナカラ	野寺字穴倉	台地	縄(早)・弥・古	石器式、成田式	H 6 分布、H 9 全面
118	北別原	カシバンビュウ	野寺字芝原・小道	台地	縄		H 7 分布
119	本村	ホンムラ	伊賀田字本村・下原	台地	縄・弥	貝殻条文土、深縫式、山口式、集石1基、整石住居1基	H 7 分布、H 13 全面
120	越原A	イイノ	伊賀田字御原	台地	縄(早・前)	吉田式、曲平式、荒川式、古道1基	H 7 分布、H 13 全面
121	飯野D	イイノ	伊賀田字定水・飯野	台地	縄		H 7 分布
122	草日屋	カスガヤ	蓬坂字草日屋	台地	縄		H 11 分布
123	坂宿	カリシユク	伊賀田字坂宿・多々越	台地	縄		H 7 分布
124	天神ノ尾	テンジンノオ	伊賀田字天神ノ尾	台地	縄		H 7 分布
125	谷ヶ尾	タニガエ	伊賀田字谷ヶ尾・向段	台地	縄		H 7 分布
126	平八	ヒラ	野寺字平八	台地	古		H 8 分布
127	下越	シモボリ	野寺字下越・立山	台地	縄(早)・弥・古	成田式	H 8 分布
128	浜場	ハマバ	野寺字浜場	台地	縄・古	成田式	H 8 分布
129	吹切B	フツカリ	山盆・吹切	台地	縄・古		H 10 分布
130	水池	スイドウ	野寺字水池	台地	古		H 11 分布
131	翁ヶ段	ツリガダン	山篠字翁ヶ段・野寺字田渕・大久保	台地	古		H 10 分布
132	森土	モリチ	野寺字森土	台地	縄・古		H 11 分布
133	森道	モリザ	野寺字森道・鶴前	台地	古		H 10 分布

## 第1章 有明町の環境

番号	跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
134	舟ノ木	イノキ	山塙字上ノ段・竹道	台地		H 11 分布
135	大屋	オオボリ	野神字下屋・水堀	台地	古・古代	H 10 分布
136	上原	ウエハラ	原田字上原	台地	古	H 10 分布
137	立山	タチヤマ	原郡字立山	台地	古	H 10 分布
138	東中郷	ヒガシナカハラ	原郡字東中郷・大屋	台地	古	H 10 分布
139	篠辻	ヒロサカ	野神字篠辻・中郷	台地	古	H 10 分布
140	渡辺	ワタリザコ	野神字渡辺・石道・曲川	台地	古代	土器群 H 11 分布
141	牧原	マキハラ	野神字牧原	台地	古代	H 10 分布
142	水喰	ミックレ	野神字水喰・遠原字川ノ底	台地	古代	H 10 分布
143	山ノ前	ヤマノマエ	遠原字山ノ前	台地	古	H 10 分布
144	日暮	ヒガマ	遠原字日暮・換り内城	台地	古	H 10 分布
145	丸岡	マルオカ	野神字丸岡・中ノ丸	台地	古	H 10 分布
146	風穴	カガアナ	野神字風穴・五色	台地	古	H 10 分布
147	上丘敷	カミゴシキ	原郡字上丘敷・五色	台地	古	H 10 分布
148	五色	ゴンキ	野神字五色・風穴	台地	古	H 10 分布
149	内ノ瀬	ニシノホリ	原郡字内ノ瀬・下丘敷	台地	古	H 10 分布
150	尾越	テバタリ	遠原字尾越・大辻・換原	台地	古・尾原	H 10 分布, H 13 全面
151	久岡	マルオカ	野神字久岡・蓬原字鶴原・山ノ後	台地	古	H 10 分布
152	神麻原	クスバハ	遠原字神麻原・山ノ後・鶴原	台地	古	H 10 分布
153	游遊	マエサコ	山塙字游遊	台地	繩	H 11 分布
154	越ヶ原	カラガサキ	山塙字越ヶ原	台地	古・古代	土器群 H 11 分布
155	鬼山	シオイリ	野井食字鬼山・桜山・山添	台地	古	土器群 H 11 分布
156	坂上	サカウエ	野井食字坂上・人代	台地	古代	土器群 H 11 分布
157	木森	キモリ	野井食字木森・田尾	台地	古代	H 10 分布
158	摩追	カモガコ	野井食字摩追・上丘上	台地	古	土器群 H 11 分布
159	上西戸	カエシサンウエ	野井食字上西戸	台地	古代	土器群 H 11 分布
160	益船	ジンボリ	野井食字益船・上丸下	台地	古	土器 H 11 分布
161	上丸	ウエンソン	野井食字上丸・下段・上丸下	台地	古代	土器群 H 11 分布
162	F段A	シモダン	野井食字下段	台地	古代	土器群 H 11 分布
163	中牟田	ナカムタ	野井食字中牟田	台地	古代	H 11 分布
164	田舎下	タオシタ	野井食字田舎下	台地	古代	七脚器 H 11 分布
165	上丸九	ウエンソン	野井食字上丸	台地	弥・古代	山ノ口式・土器群 H 11 分布
166	前頭	マエハタ	遠原字前頭	台地	古	H 11 分布
167	臨水原	シオズル	伊崎田字臨水原・前替	台地	古	土器群, 青磁 H 11 分布
168	鹿屋	カフジ	伊崎田字鹿屋・二反田	台地	繩	H 11 分布
169	東段B	ヒガシダン	伊崎田字東段	台地	古	H 11 分布
170	丸岡	マルオカ	伊崎田字丸岡	台地	古	H 11 分布
171	歌ノ辺	ハギノサコ	伊崎田字歌ノ辺・土江	台地	古	H 11 分布
172	七丸	トトウ	伊崎田字七丸・二方屋	台地	古	H 11 分布
173	渡ヶ瀬	ワタリガコ	伊崎田字渡ヶ瀬・牧	台地	古	H 11 分布
174	牧	マキ	伊崎田字牧・堂丸	台地	古	H 8 分布
175	小道	コザコ	伊崎田字小道・鹿屋	台地	繩	H 11 分布
176	川原原	カリハラダ	伊崎田字川原原・後迫・人道	台地	古	H 11 分布
177	足見路	ミタエリダン	伊崎田字足見路・前道・中誠	台地	繩・佛	H 11 分布
178	饭宿八	カリジユタ	伊崎田字饭宿・別山	台地	古	H 11 分布
179	神ノ辺	ヒエノサコ	伊崎田字神ノ辺・葛原前御・幕ノ段	台地	古	H 11 分布
180	鍋	カベ	伊崎田字鍋・西ノ辺	台地	古	H 11 分布
181	石割原	イシワリザコ	伊崎田字石割原・御原・丹場・追	台地	古	H 11 分布
182	樋	エヌキ	野井食字樋・合田	台地	繩・古	H 11 分布
183	中原	ナカハラ	野井食字中原	台地	弥・古	土器群 H 11 分布
184	東原	ヒガシハラ	野井食字東原	台地	弥・古	土器群 H 11 分布
185	西原A	ニシハラ	野井食字西原	台地	弥	H 11 分布
186	西原B	ニシハラ	野井食字西原	台地	弥・古	土器群 H 11 分布
187	上原	ウエハラ	野井食字上原・東原・西原	台地	弥・古	土器群 H 11 分布
188	中尾	ナカオ	野井食字中尾・西原追	台地	弥	H 11 分布
189	西原追入	ニシラバダコ	野井食字西原追	台地	古代	土器群 H 11 分布
190	西原追B	ニシラバダコ	野井食字西原追	台地	繩・弥	H 11 分布
191	上ノ段A	ウエノダン	野井食字上ノ段	台地	弥	H 11 分布
192	上ノ段B	ウエノダン	野井食字上ノ段	台地	弥	H 11 分布
193	上ノ段C	ウエノダン	野井食字上ノ段	台地	古代	土器群 H 11 分布
194	上ノ段D	ウエノダン	野井食字上ノ段	台地	古代	H 11 分布
195	シノ段E	ウエノダン	野井食字上ノ段	台地	古	H 11 分布
196	井手トド	イデウエ	野井食字井手トド	台地	古代	土器群 H 11 分布
197	幅付	イナツキ	野井食字幅付・下段	台地	弥	H 11 分布
198	下段	シモンダン	野井食字下段	台地	弥	土器 H 11 分布
199	和田上	ワタウエ	野井食字和田上	台地	弥・古	土器・土器群 H 11 分布
200	大岡B	オオゾノ	遠原字大岡・和手ノ上	台地	古	H 16 分布
201	大久保	オオカグ	野神字大保・飼ノ段	台地	弥	H 10 分布
202	下原	シモハラ	原田字下原	台地	古	H 10 分布
203	大原	オオツカ	原田字大原・門口	台地	繩・古	円墳 5 基, 方墳 1 基 (細川古墳を含む) H 8 分布
204	前堆	マエハタ	野井食字前堆	台地		
205	浜塚A	ハマバ	野神字浜塚	台地	古	土器 (成川式) H 16 分布

※「時代」の「古」は商文時代、「弥」は弥生時代、「古」は古墳時代、「歴」は歴史時代を示す。(前・中・後・後)は前期・中期・後期・晚期を示す。

## 第Ⅱ章 丸岡A遺跡の発掘調査報告

### はじめに

報告する調査成果は、調査担当者が記した調査記録及び事業報告書をもとに再度まとめ直したもので、確認の取れなかった成果については、掲載を見合せている。

### 第1節 調査に至る経緯と調査の経過

#### 1. 調査に至る経緯

有明町役場耕地課は、有明町大字伊崎田の丸岡地区において県単独農業農村整備事業を計画し、計画の実施に伴い事業区内における埋蔵文化財の存在の有無について、鹿児島県教育庁文化財課及び有明町教育委員会社会教育課に照会を依頼した。

これを受けて鹿児島県教育庁文化財課が鹿児島県立埋蔵文化財センターと有明町教育委員会に埋蔵文化財の分布調査を依頼し、両者が平成4年に実施したところ、事業区内に遺物散布地として丸岡A遺跡<sup>①</sup>が存在することを確認した。これにより有明町役場耕地課・鹿児島県教育庁文化財課・有明町教育委員会社会教育課の三者は、埋蔵文化財保護と開発事業との調整を図ることを目的に協議を行ったところ、まずは工事着手前に埋蔵文化財包蔵地の実態把握のために確認調査を実施し、その後に遺跡の取り扱いについて再び協議を行うことを約束した。

確認調査は、調査主体である有明町教育委員会の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成7年7月に実施した。調査の結果、縄文時代早期・前期・晩期の遺物包含層の存在が判明した。この確認調査の結果を受けて再度協議を実施したところ、事業の推進にあたっては遺跡の現状保存は困難であると判断し、事業実施前に記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。

本調査は、有明町役場耕地課からの受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターの支援・協力のもと、有明町教育委員会が調査主体となって実施した。

整理作業ならびに報告書作成については、有明町教育委員会が平成17年6月から整理作業を行い、平成17年12月末の報告書刊行をもって一連の作業を終了した。

#### 2. 調査の経過

##### 確認調査の経過と成果

確認調査は、調査主体である有明町教育委員会から鹿児島県立埋蔵文化財センターへと依頼され、同センターの倉元良文氏・下園昌三氏を調査担当者として実施した。庶務は有明町教育委員会の黒川晃が行った。調査は有明町山重の北別府遺跡と合わせて実施されており、両遺跡合わせて、期間が平成7年7月24日から28日までの約5日間、対象面積が約3,000m<sup>2</sup>であった。丸岡遺跡では対象範囲内に12ヶ所のトレンチを設けて調査を行っている。

層位については、遺跡範囲が畑地帯となっていることから、削平を大きく受けている。そのため現在の地形は平坦になっている。各層の詳細については表II.03に述べている。

調査成果としては、確認調査トレントの6トレンチから12トレンチにおいて、縄文時代早期・前期・晩期の遺物包含層が確認されており、この範囲を中心に遺物・遺構が拡がるものと考えられた。詳細については表II.04に述べている。

##### 本調査の経過

本調査は、黒川晃・中水忍が庶務を担当し、中水・栗林文夫氏が発掘調査を実施した。調査期間は平成9年7月4日から8月22日までの24日間を費やし、調査面積は約810m<sup>2</sup>を測った。詳しい調査成果については後述する。

##### 整理作業並びに報告書作成の経過

整理作業は調査終了後に担当者が一部を実施していたが諸事情<sup>②</sup>により報告書刊行には至っていないかったが、一度はおもな調査成果の概要が報告されるに至った<sup>③</sup>。しかし、調査成果の重要性から、平成17年度に町単独予算として整理作業及び報告書作成の費用を計上して作業を実施すること

## 第II章 古墳A遺跡の発掘調査報告

となつた。

整理作業は、東徹志のもと分担して行われ、各作業は川ノ上真理を中心に安野美子・若松孝雄・山元弓枝が従事した。庶務は東がを行い、事務補助は吉井麗子が行った。

各作業は、土器の接合を川ノ上、石膏復元を若松が行い、遺構の図化を東・川ノ上が、土器の図化は実測を東、拓本を川ノ上、トレースを安野が行っている。遺物分布図は東・山元が図化している。

石器の國化については、東・山元・若松などが実測・トレー<sup>ス</sup>を行っている。

遺物の写真撮影は、おもに東が行い、一部の写真撮影を鹿児島県立埋蔵文化財センター福永修一氏・西園勝洋氏に、現像・複付けを同センターの大村彌紀氏・中川ヒロミ氏にご協力いただいている。

その他の作業については、東・川ノ上が行い、報告書刊行をもって作業を完了している。

表1 調査時は「丸岡道跡」と呼称しており、その後、道跡台帳の改変に伴い「丸岡A道跡」と変更されている。

※2 調査後に多くの発掘調査が計画され、有明町役場の方針として報告書刊行より発掘調査の遂行による開発事業の推進が優先されたためである。

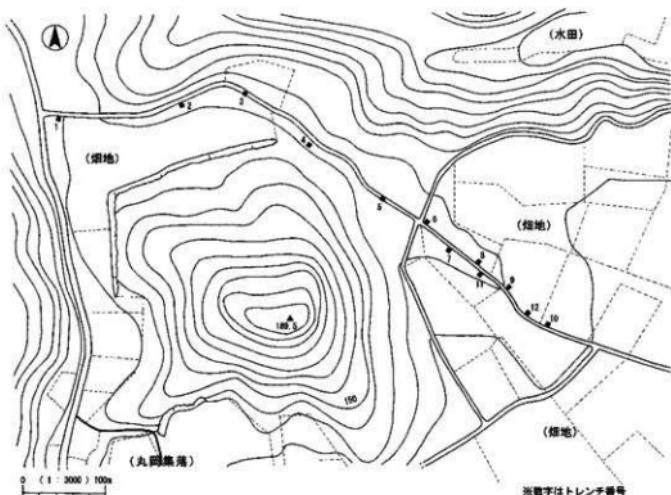
\*3 平成15年度刊行の『屋部当遺跡・楠原遺跡』報告書中において、鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課黒川忠広氏が報告している。

表II-91 確認調査・本調査の組織

		確認		本調査	
調査主体	有明町教育委員会				
調査責任	タ	教育長	福岡 孝	大脇 茂夫	
調査企画	タ	社会教育課	社会教育課長	川迫 繁久	高崎 成行
タ	タ	タ	社会教育課長・佐	一	上村 宗市
タ	タ	タ	社会教育係長	萩本昌一郎	タ
庶務	タ	タ	主事	一	黒川 美
タ	タ	タ	主事補	黒川 晃	一
商務・調査	タ	タ	主事	一	中水 忍
調査金	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課	文化財研究員	倉元 良文	栗林 文夫
	タ	タ	タ	下園 昌三	

表II-02 整理作業と報告書作成の組織

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	夕		教育長	長重 達郎
調査企画	夕	社会教育課	社会教育課長	中崎 秀博
	夕	夕	社会教育課長補佐	森重 晃一
	夕	夕	社会教育係長	岩元 秀光
調査・庶務	夕	夕	主 事	東 徹志
事務補助	夕	夕	臨時職員	吉井 順子
調査補助	夕	夕	△	川上真理、安野美了、若松孝雄、山元弓枝



図II.01 確認調査トレンチ配置

表II.03 確認調査の基本層序

層位	土色質	備考
I層	表土	現在の耕作土。
II層	火山灰層	大正3年桜島噴火の火山灰
III層	黒色腐食土層	
IV層	黄褐色土層	縄文時代前期の包含層
Va層	黄褐色土層	アカホヤ火山灰層
Vb層	黄褐色バミス層	アカホヤ降下軽石層
VI層	黒色土層	縄文時代早期の包含層
VII層	暗茶褐色土層	
VIII層	黄褐色バミス層	薩摩火山灰層

表II.04 確認調査トレンチの概要

トレンチ番号	規模 (幅×長さ(m))	遺構	遺物	備考
1T	12×23	ナシ	ナシ	地表面に近い部分の層序が削平される
2T	11×24	ナシ	ナシ	タ
3T	10×20	ナシ	ナシ	タ
4T	14×22	ナシ	ナシ	タ
5T	14×25	ナシ	ナシ	タ
6T	16×33	ナシ	土器・石器	縄文時代晚期の土器1点 縄文時代早期の土器1点と石器(網片)が出土する
7T	26×32	ナシ	ナシ	地表面に近い部分の層が削平される
8T	16×34	ナシ	ナシ	タ
9T	14×38	ナシ	土器	縄文時代早期の上器9点が出土する 現地表面より約60cm下が早期の包含層にあたる
10T	14×38	ナシ	ナシ	地表面に近い部分の層が削平される
11T	15×31	ナシ	土器・石器	縄文時代早期の土器4点と石器1点が出土する 現地表面より約30cm下が早期の包含層にあたる
12T	15×31	ナシ	土器	縄文時代晚期の土器1点と縄文時代早期の土器1点が出土する 現地表面より約80cm下が早期の包含層にあたる

## 第2節 発掘調査の環境

## 1. 丸岡A遺跡の環境

丸岡A遺跡(69-38)は、調査以前から縄文時代の遺跡として周知されている。立地は有明町北部域の台地上にあり、現地に存在する「丸岡」とよばれる丘の麓に位置する。標高は約140mを測る。台地はシラス堆積により形成され、長く舌状に延びており、その台地の根元に遺跡は位置する。台地の南北には、現在、湧水を利用した水田の広がる谷が存在する。この湧水から発生した小川は、すぐに安楽川支流の本村川に流れ込んでいる。

同じ台地には、縄文時代晚期の向江原遺跡(69-30)、古墳時代の東段B遺跡(69-169)、弥生時代の丸岡B遺跡(69-170)が存在し、現在も遺跡の両側には丸岡集落が広がる。遺跡の存在する町北部域の伊崎田校舎は、町南部域に比べて山がちな地域であり、縄文時代前期から晩期の遺跡が集中する地域でもある。

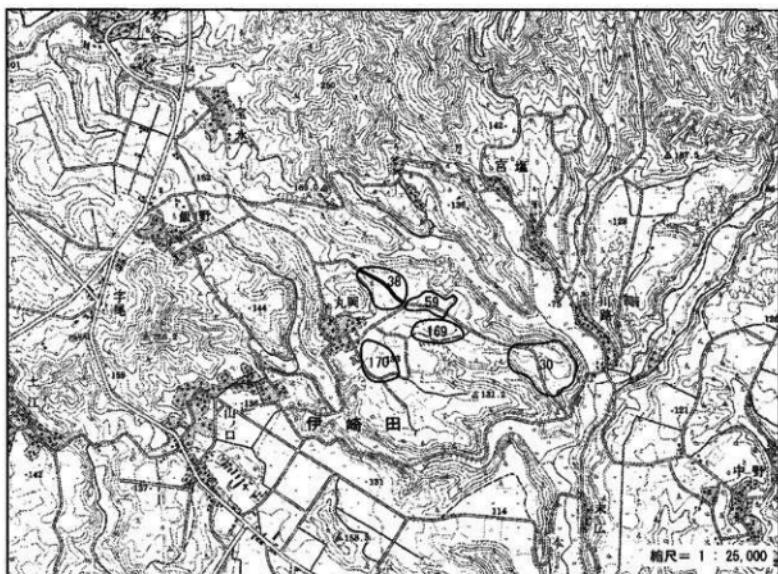
現在、調査地の周辺は農地整備が実施された畠地が広がっており、遺物包含層の多くが削平を受けているものと考えられる。

## 2. 調査の方法

本調査は、調査対象範囲を「A～E」の任意の地区に分割して調査区を設定し、南側より調査を開始している。調査区の配置状況は図II.03に示している。また、調査グリッドは10m間隔で任意の点を基準に設定している。

遺物包含層などの掘り下げは、I・II層は調査員の立会のもと重機を用いて土を薄く剥ぎ取り、その後は前述の地区ごとに、人力による掘り下げ作業を実施している。遺物の取り上げは、遺物に通し番号を振って平板を用いて記録している。

造構の精査及び検出作業は、基本層序第V層上面と埴層上面において行っている。



図II.02 丸岡A遺跡の位置

### 3. 基本層序

層位の遺存状況は、調査地周辺が農耕地として整備されており、全体が平坦な地形となっている。そのため層位も旧地表面に近い層は大きく削平を受けており、遺存していない。

基本土層は表のとおりである。

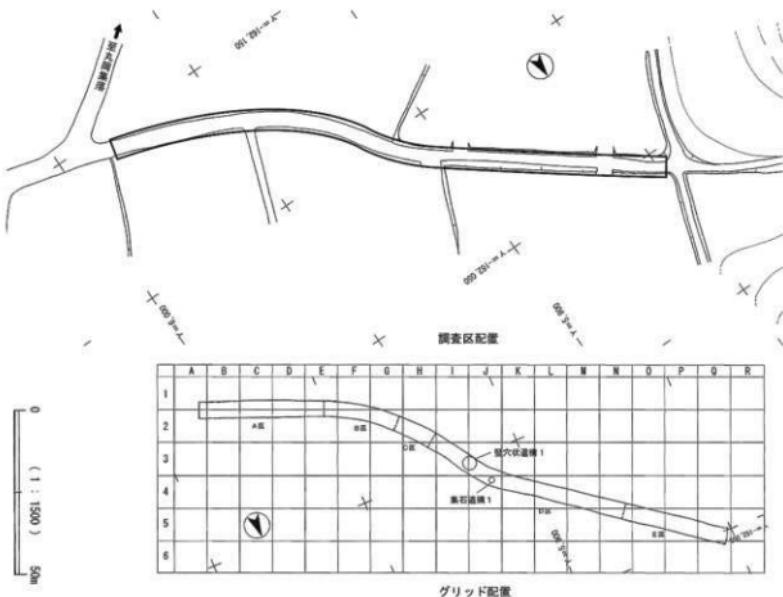


写真II.01 調査状況（表土除去）

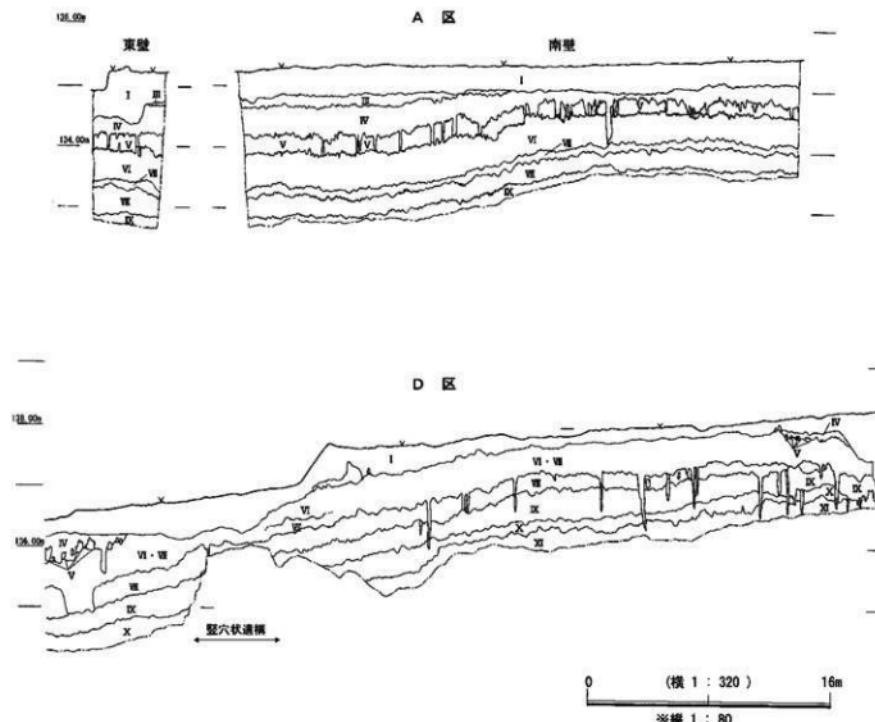
※1 出土遺物からは確認されていない、調査者の見解による。

※2 有明町既刊行報告書において「アカホヤ二次堆積層」と呼んでいる層である。

※3 有明町域全体では、アカホヤ降下火山灰層は切れ目のない層として確認されるが、この地点に関してはブロック状と化している。原因については不明であるが、層を観察すると降下軽石層が最も下位にあることから堆積自体は攪拌等を受けていると考えられる。牧道跡1・2次調査におけるアカホヤ降下火山灰層の堆積状況を参考にすると立木状態の樹木などの痕跡である可能性が考えられる（出口ほか2005）。



図II.03 調査区範囲とグリッド配置



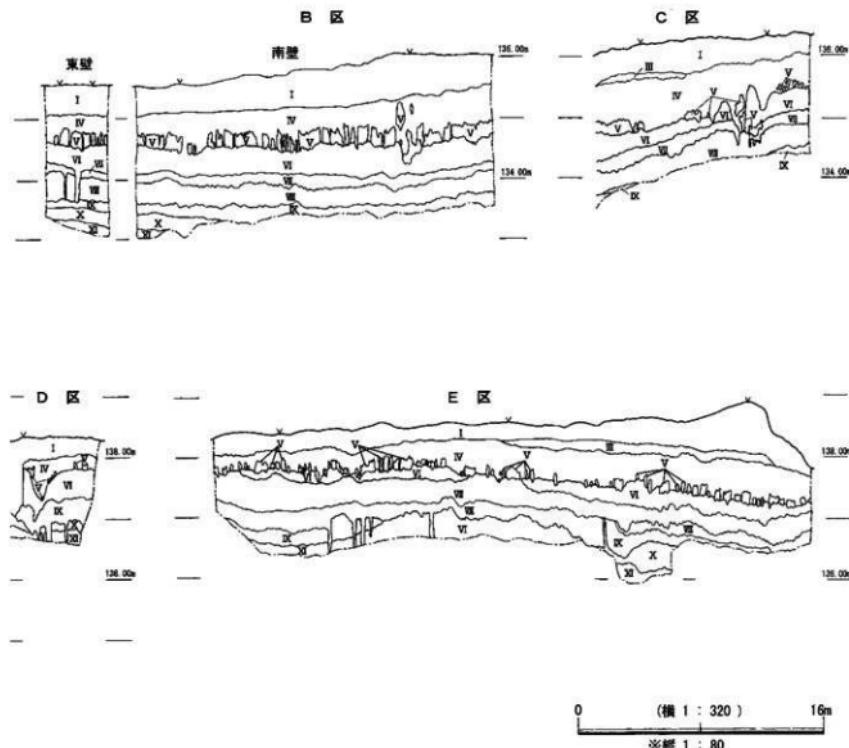
図II.04 調査区土層断面(1)

表II.05 基本層序

I層	灰褐色土	現在の表土、近代から現代にかけての旧道の硬化面が見られる。
II層	灰褐色火山灰土	層厚2cm程度で部分的に露出される。桜島起源の大正3年降下の火山灰と考えられる。
III層	黒色腐植土	やや粘質のある腐植土層で、古墳時代以降の時期 <sup>※1</sup> に相当する遺物包含層と考えられる。
IV層	黄褐色土 <sup>※2</sup>	オレンジ色のバミスを多く含む。縄文時代晚期・前期の遺物包含層である。
V層	黄褐色火山灰土	東界カルデラ起源のカホヤ降下火山灰土と考えられる。全体的にブロック状に見られる。
VI層	黒色土	縄文時代早期の遺物包含層である。
VII層	暗茶褐色土	
VIII層	黄褐色土	黄色の硬質土で、鹿磨降下火山灰土と考えられるバミスを含む。
IX層	茶褐色粘質土	
X層	黄褐色土	サラサラした質感のシラス層である。
XI層	黄褐色粘質土	シラス層である。

※1 出土遺物からは確認されていない。調査者の見解による。

※2 有明町既刊行報告書において「カホヤ二次堆積層」と呼んでいる層である。



図II.05 調査区土層断面（2）

### 第3節 検出面1（縄文時代前期・晚期）の調査成果

検出面1は基本層序第V層において遺構精査を実施した分を指す。遺物は、基本層序の第III層及び第IV層より出土している。時期は縄文時代晚期・前期である。

第V層上面を遺構検出面に、III・IV層を遺物包含層とする。時期は縄文時代晚期と前期である。

#### 1. V層上面の検出遺構

V層上面では遺構が検出されていない<sup>※1</sup>。

#### 2. III・IV層の出土遺物

ア) 分布状況と出土状況（図II.06）<sup>※2</sup>

III層の遺物分布は、調査区の東西両端に集中しているが、これは削平による結果であり、III層の遺存範囲と重なる。遺物の出土層はIII層の下位にあたり、IV層からIII層への漸移層にあたる層位と考えられる。

遺物も同一地点においてⅢ・Ⅳ層に縄文晩期のものが分布することからも、Ⅲ層出土の遺物としたものは、本来はⅣ層に属していた可能性が高い。そのため、ここではⅢ・Ⅳ層出土遺物を一括して報告している。

分布の特徴としては、1～3類のそれぞれ分布の集中範囲が分かれる傾向が見られる。

#### イ) 土器類（図II.07～10、表06・07）

Ⅲ・Ⅳ層出土の土器は、おおまかな特徴から1～6類に分けている。分類番号は任意である。個体数は細片のものが多く、把握できなかった。以下、分類別に述べ、個別の詳細は表に述べる。

##### 土器1類（図II.07）

1類とした1～16は、やや厚手の器厚に、器面をミガキないしナデ・条痕などで整える。縄文時代晩期の黒川式に比定すると考えられる。

口縁部4・6の外面にはミガキが密に施される。胴部のほとんどがミガキを施し、8・10と9・11が同一個体の可能性がある。9・11の色調は乳白色に近い、にじむ黄橙（10YR7/4）を呈し、他がおもに暗褐色を呈するとの異なる。底部は、12・13の端部が外に張り出す。

##### 土器2類（図II.08）

2類とした17～34は、外面に幅の狭い沈線文を施文する。縄文時代前期のおもに曾畠式に比定すると考えられる。

さらに外面施文の特徴からは、羽状が主体17～23、横位と縦位ないし斜位の25～28、横位が主体の29～34に分けられる。

口縁部17～23は、外面に羽状が主体の文様をもっている。口縁17～22は口唇部にキザミをもち、端部が外反する。外面に見られる沈線文の施文原体は、19がヘラ状工具、その他が貝殻と考えられる。原体の貝殻も18・20とそれ以外とでは異なる。21の内面にはやや歪んだ円形の刺突文が2条見られる。22の内面にも、やや不明瞭であるが、斜位の沈線文が見られる。口縁23は内溝した口縁をもち、口唇部の一部に突起部が残存する。文様の施文原体は貝殻と考えられる。また、23は接合した2点の破片の色調が異なっており、それぞれは赤色化・黒色化している。破碎後の環境が異なった結果と考えられる。

口縁部25～胴部28は、横位と縦位ないし斜位の沈線文をもっている。胴部24の沈線文は、ヘラ状工具で施文され、内面に縦位のものが見られる。口縁25と胴部28は同一個体と考えられる。胎土中に多くの混和材を含み、とくに金色雲母が多く見られる。

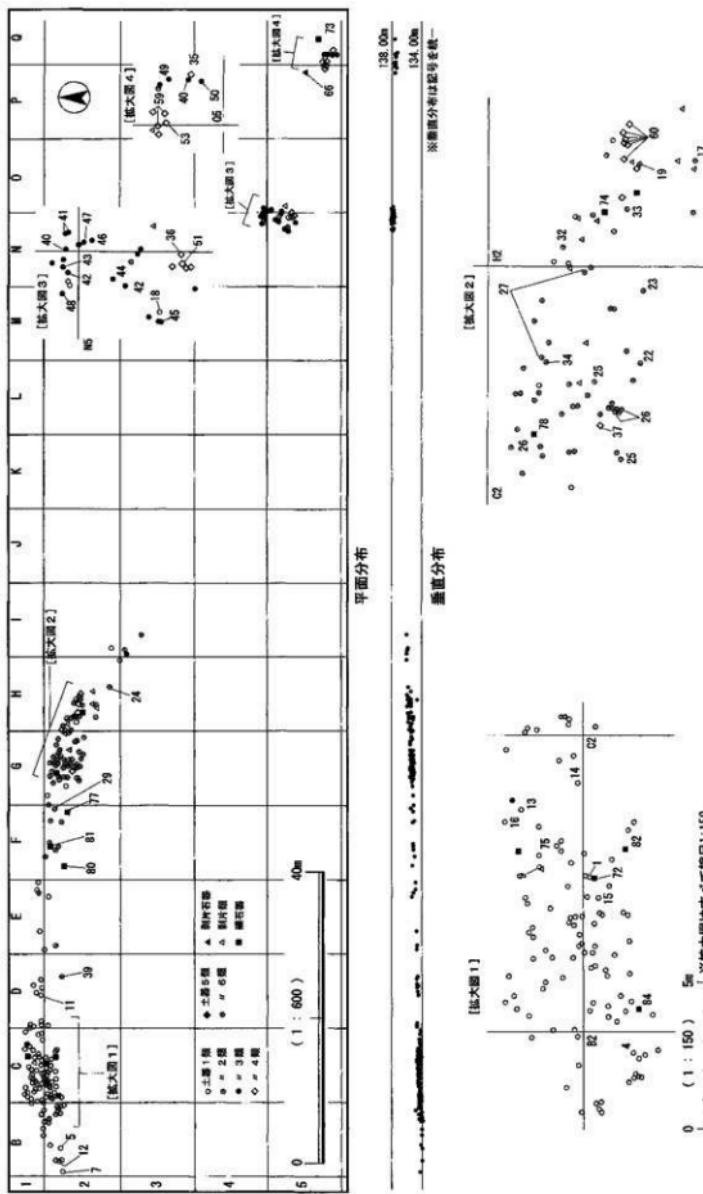
口縁部29～34は外面に横位が主体の文様をもっている。29・30・32は内面にも横位の沈線文をもち、33・34には横位の沈線文に加えて連続した長方形の刺突が見られる。それらに比べて頸部31はやや趣きが異なり、内面をミガキで整える。平格式であろうか。

##### 土器3類（図II.09・図II.10）

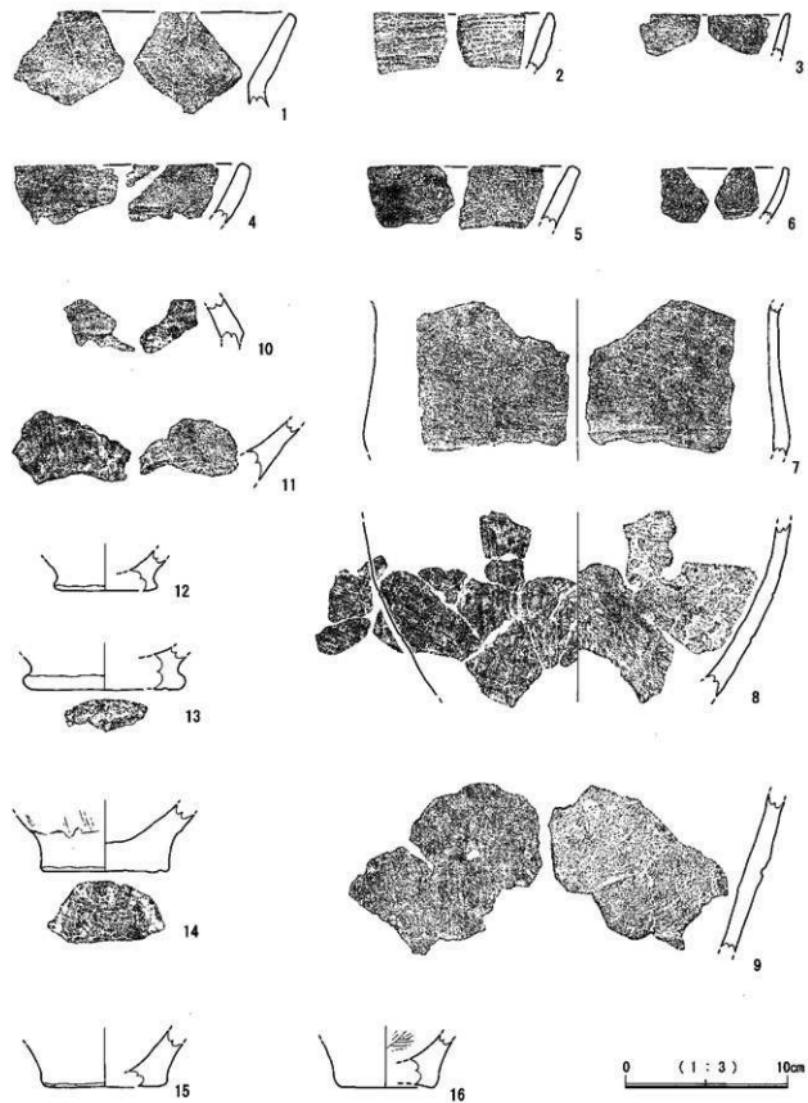
3類40～54・59・60は外面に粗い貝殻条痕を密に施す。型式は轟式と考えられる。40～45と46～48とはそれぞれ同一個体と考えられる。いずれも胎土中にも多量の混和材が含まれ、赤色砂が多いという特徴をもつ。口縁40・41には微隆起線文が見られ、この文様の下半には貝殻背面を押捺したような施文が存在する。胴部49・50は前述の両者とは調整・胎土などが異なる。

51～54は同一個体と考えられ、図面上ではほぼ完形に復元できる。器面は内外面に貝殻条痕が施され、口縁部外面は格子状である。口縁部には突起が貼り付けられる。胎土中の混和材に5mm大以上の赤色砂が含まれる。

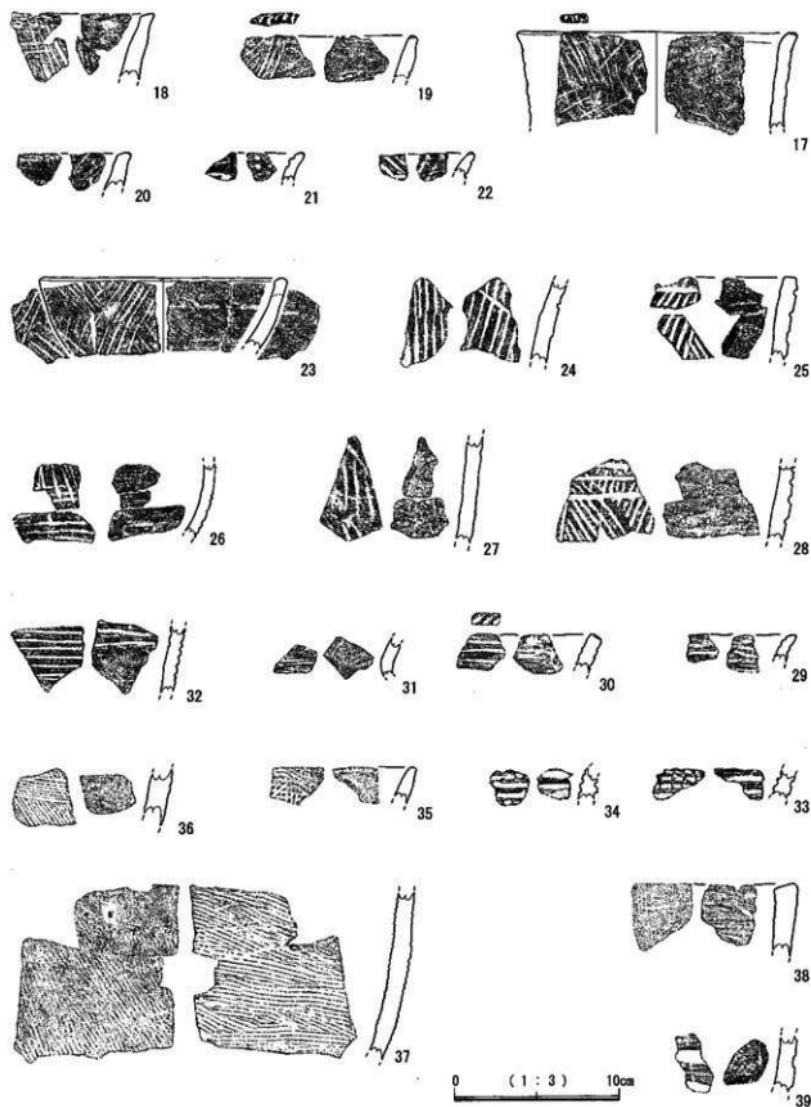
底部59は、破断面と接合の状況から、上下を打ち欠いて再加工した可能性が考えられる。性格は不明である。内面には円形剥離が多く見られ、内面は黒色化、外面は赤色化する。



図II-06 III・IV層出土遺物の分布状況



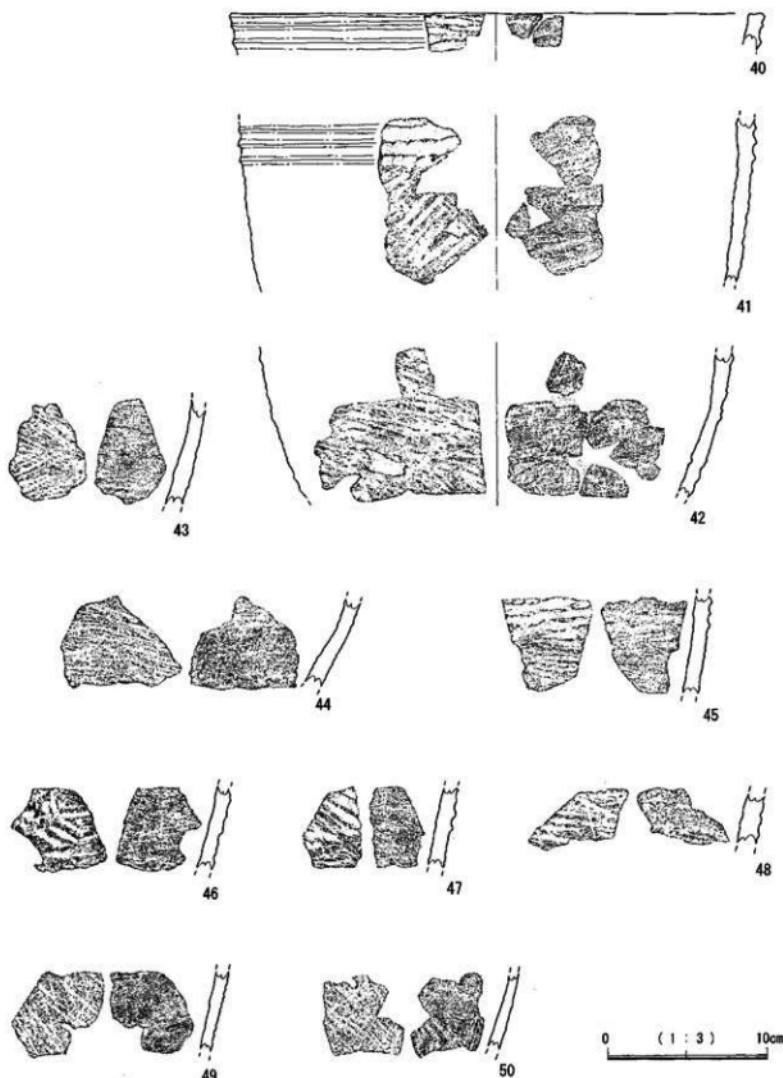
図II.07 III・IV層出土土器(1)



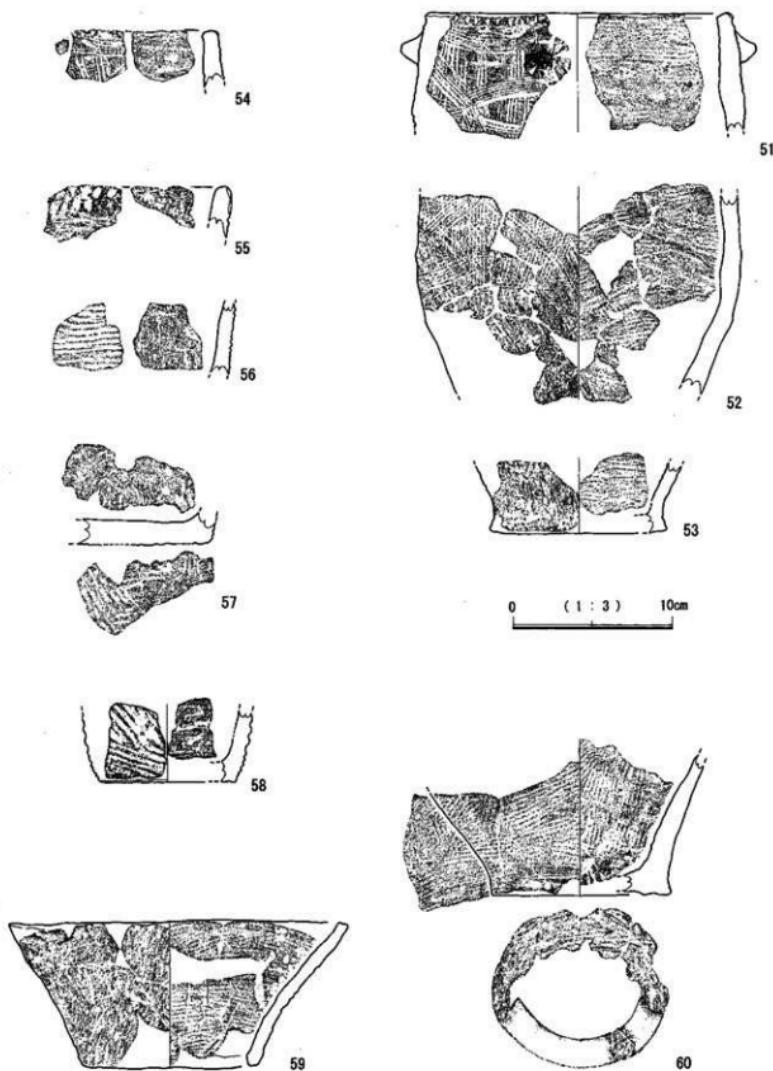
図II.08 III・IV層出土土器(2)

表II.06 III・IV層 出土土器の観察表(1)

目次 登録番号	団体名	出土物番号 (番号上り)	部位	表面		調査・文様		出土中の状況				備考
				内面	外面	内面	外面	径(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	底面	
X-07	1	C-2, IV, 74	上部	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	横のテグ	左へのケツリ抜、横のナデ	05	○ ○ - △ ▲	口部が黒化したが、裏面で灰化物が付着		
	3	B, III, 6	上部	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	横の只見奈良文の複数のナデ	横のナデ	05	○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化し、外側に灰化物がわずかに付着		
	3	B, IV, 1-1	口部	無地 107804-5	横のミガキ(底文が底板約2mm以下)	横のミガキ(底文が底板約2mm以下)	横のミガキ(底文が底板約4mm)	05	○ ○ ○ ○ ○	底板後で穿孔ありか?		
	4	B-2, IV, 114	内面	にふく・骨壺 107804-2	横のナデ	横の2ナデ(底文が底板約4mm)	横のナデ	05	○ ○ □ □ ○	底板後で穿孔ありか?		
	5	B-2, IV, 33	内面	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	横のナデ	横のナデ	横のナデ	05	○ ○ □ □ ○	外側がやや黒色化		
	6	四足 楼	口部	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	横のミガキ(底文が底板約4mm)	横のミガキ(底文が底板約4mm)	横のミガキ(底文が底板約4mm)	05	○ ○ □ □ ○	外側がやや黒色化		
	7	B-2, IV, 52	底	にふく・骨壺 107804-1	横のナデ後、底文やや横の横のミガキ(底文が底板約3mm)	横のミガキ(底文が底板約3mm)	横のミガキ(底文が底板約3mm)	05	○ ○ □ □ ○	内面が黒化したが、外側に灰化物がわずかに付着		
	8	D-1, IV, 25-1	底	無 107804-2	無	左脚の上のヘタケリ後、ナデ	左脚の上のヘタケリ後、ナデ	05	○ ○ □ □ ○	内面が黒化した、外側と一緒に灰化物が付着		
	9	C-1, IV, 703	底	にふく・骨壺 107804-3	にふく・骨壺 107804-3	ナデなし?	横のミガキ(底文が底板約2~3mm以上)	05	○ ○ □ □ ○	内面下端に灰化物が付着し、外側上部はやや黒化した、灰化物がわずかに付着		
	10	口縁一筋	底	七輪 107804-5	STYR45	横のテグリ	横のナデ	2	○ ○ □ □ ○			
	11	D-1, IV, 49	底	にふく・骨壺 107804-2	にふく・骨壺 107804-2	横のナデ	横のミガキ(底文が底板約3mm以上)	05	○ ○ □ □ ○	やや黒化		
	12	E-2, IV, 328	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ	横のナデ	1	○ ○ - ○ ○	やや黒化		
	13	C-1, IV, 7	底	無 107804-2	無 107804-2	横のナデ	横のナデ 底: 細かな?	1	○ ○ □ □ ○	外側がやや黒色化		
	14	C-1, IV, 79	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横のナデ?	横のナデ後、上部底をミガキ 底面: T字ナデ	1	○ ○ □ □ ○	内面に黒い跡付着 外側がやや黒色化		
	15	C-2, IV, 68	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横のナデ	横のナデ	2	○ ○ □ □ ○			
	16	C-1, IV, 8	底	無 107804-2	無 107804-2	「手」なナデもししくはミガキ	「手」なナデ 底面: 一定方向のナデ	05	△ □ - ○ ○	内面が黒化		
X-08	17	E-2, IV, 303	上部	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	にふく・骨壺 107804-1 107804-2	横のナデもししくはケツリ後、横のナデ	口縁部: 横のナデゼ 底: 灰化物による斑状の灰化火	05	○ ○ ○ ○	外側はやや黒化した、内面は灰化		
	18	X-3, V, 246	口縁	有茎器 107804-1	有茎器 107804-1	横のテグリ後、横のナデ	横のナデ後、貝殻類による斑状の灰化火	1	○ ○ ○ ○	内面は黒化した、外側には灰化物が付着		
	19	F, V, 269	口縁	無 107804-1	無 107804-1	横のナデ	横のナデ	1	○ ○ □ □ ○			
	20	H-2, IV, 274	口縁	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横のナデ	やや堅い横のナデ後、底の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○			
	21	H縁一筋	口縁	無 107804-5	無 107804-5	やや堅んだ形割れ突起が2本	底の灰化火	05	○ ○ ○ ○ ○			
	22	G-2, IV, 213	口縁	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横のナデ	口唇部: 横のキサミ 底: 灰化物	05	○ ○ - ○ ○	内面が黒化した、外側もやや黒化		
	23	G-2, IV, 317 H-2, IV, 95	上部	117: 有茎器 107804-1 495: 有茎器 107804-1	117: 有茎器 107804-1 495: 有茎器 107804-1	横の「五上り」のケツリ後、横のナデ、羽状の灰化火	ナデ後、堅い横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○	接合した2点の裂片の色剥が異なる		
	24	H-2, IV, 266	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ後、堅い横の灰化火	ナデ後、堅い横の灰化火と斜面なし 横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○	外側の一部が黒化、厚度?		
	25	G-2, IV, 303	上部	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横のナデ	ナデ後、堅い横の灰化火、横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	26	H-2, IV, 21	底	無 107804-1	無 107804-1	横のナデ	ナデ後、堅い横の灰化火、横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	27	G-2, IV, 302 H-2, IV, 201	底	にふく・骨壺 107804-1 107804-1	にふく・骨壺 107804-1 107804-1	ナデないしオキ	ナデ後、斜面なし横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○	底の外側は黒化		
	28	F-2, II, 148	口縁	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ後、横の灰化火	ナデ後、横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○			
	29	12, II, 18	口縁	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横の「五上り」のケツリ後、横のナデ	ナデ後、横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○			
	30	H-2, IV, 355	(口縁)	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ後、横に付する堅い火	ナデ後、横に付する堅い火	1	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	31	H縁一筋	口縁	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ミガキ	ナデ後、堅い横の灰化火	05	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	32	H-2, IV, 359	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ後、横に付する堅い火	ナデ後、横に付する堅い火	1	○ ○ ○ ○ ○			
	33	H-2, IV, 355	(口縁)	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ後、横に付する堅い火	ナデ後、横に付する堅い火	1	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	34	G-2, IV, 190	(口縁)	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ後、横の灰化火	ナデ後、横の灰化火	1	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	35	Q-5, IV, 202	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	片へのケツリ	11番目: 横のナデ 柄状? の共通灰	05	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	36	N-5, IV, 240	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	ナデ	柄状の共通灰、横の灰化火	05	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	37	G-2, IV, 179	上部	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横の貝具舟灰	横の貝具舟灰	05	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化		
	38	6, V, 11	底	無 107804-2	無 107804-2	横のミガキ(底文が底板約4mm)	口荷部: 横のミガキ(底文が底板約4mm) 柄状? の共通灰	1	○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒化		
	39	D-2, IV, 94	底	にふく・骨壺 107804-1	にふく・骨壺 107804-1	横のケツリ? 横、横のナデ	横のナデ後、底文灰	05	○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒化		



図II.09 III・IV層 出土土器(3)



図II.10 III・IV層 出土土器(4)

表II.07 III・IV層 出出土器の観察表(2)

遺物番号 (32.5上+下)	遺物名	当面		側面・枝		断面中の断面材 厚さ (mm)	縦 幅 (mm)	横 幅 (mm)	高 さ (mm)	参考
		内面	外面	内面	外面					
II-40	O-4, lv. 222 口縁	に凹い面	に凹い面	口縁底部：ケズリ後、焼けた？ 口縁部：笠頭下へのケズリ 底部下：笠へのケズリ	口縁部：良般条痕、下に日焼条痕？ の部分を施した箇所、細繩文で軽く溝らす 削む下字：おもにやや生上がりの具足条痕	2	○	○	○	外表面が黒色化し、変色が付着
II-41	O-4, lv. 224 前 216.250 破片 (口縁)	73785/8	10785/4							
42	N-4, lv. 226 前 N-5, lv. 234 前 P-5, lv. 230 前									
43	N-4, lv. 225 前	に凹い面	に凹い面	左へのケズリもしくは、右へのケズリ後、 焼けナダ	おもにやや生上がりの具足条痕	2	○	○	○	外表面が黒色化し、変色が付着
44	N-5, lv. 223 前	73785/5	10785/5							
45	N-5, lv. 231 前									
46	D-5, lv. 219 前 O-5, lv. 220 前	1121.1-1206.4	73786/6	左へのケズリ後、弱いナダか？	具足条痕	2	○	○	○	内外面が黒色化しない赤色化
48	N-4, lv. 228 前	に凹い面	10785/4							
49	Q-5, lv. 204 前 Q-5, lv. 205 前 303.303	73786/3	73786/6	ケズリ後、ナダ	具足条痕	1	○	○	○	内外面が黒色化しない赤色化
50	N-5, lv. 243 口縁	1121.1-1206.4	73785/4	他の具足条痕後、ナダ	口縁部：横のナダ 1121.1-1206.4：横のナダ後、端部のナダと 口縁部：格子状の具足条痕 削む下字：具足条痕 底面：ケズリ	1	○	○	○	外表面が黒色化 内面が赤色化、外表面は赤色化
52	P-5, lv. 309.400	73785/4								
53	P-5, lv. 305 前	に凹い面	10785/4							
54	P-5, lv. 403 口縁	1121.1-1206.4	73786/4							
55	97, v	口縁	に凹い面	ナダ？	1121.1-1206.4：複数のナダが2条 横の具足条痕	1	○	△	○	内面が黒色化
56	H-2, lv. 301 前	1121.1-1206.4	73786/5	トへのケズリもしくは工具ナダ	複数の具足条痕	1	○	○	○	外表面がやや赤色化
57	97, lv. 17 前	1121.1-1206.4	73786/4		具足条痕、ナダ	3	○	○	○	
58	H-2, lv. 307 前	1121.1-1206.4	73786/5	他のケズリ後、横のナダ	斜め(左上)の具足条痕	1	○	○	○	外表面が赤色化
59	P-5, lv. 300.210.212. 213.228-245	に凹い面	10785/4	他の具足条痕	具足条痕後、横のナダ後、一部にこぎき	2	○	○	○	内面が黒色化し、外表面は赤色化 内面には内面剥離が見られる
60	K-2, lv. 226.227.228. 279.280.281	に凹い面	10785/3	具足条痕、一部にナダ	具足条痕	1	○	○	△	内面が黒色化し、外表面は赤色化

底部 60 は、上端の縁は歪であるが、破断面の状況から打ち欠いた可能性が考えられる。また、底面も打ち欠いた可能性がある。供献用であろうか。

#### 土器4類(図II.08)

4類 35～37は、外面に貝殻条痕を密に施す。型式は轟式系であろうか。35～37はほぼ類似しており、同一個体の可能性も考えられる。37の内面には横位の貝殻条痕が見られる。

#### 土器5類(図II.10)

5類 55～58は外面に明瞭な横位の貝殻条痕を密に施す。縄文時代早期の前平式と考えられ、調査地内に見られた地層横軸などにより、VI層の遺物がIV層と同じ高さで出土したものと考えられる。

#### 土器6類(図II.08)

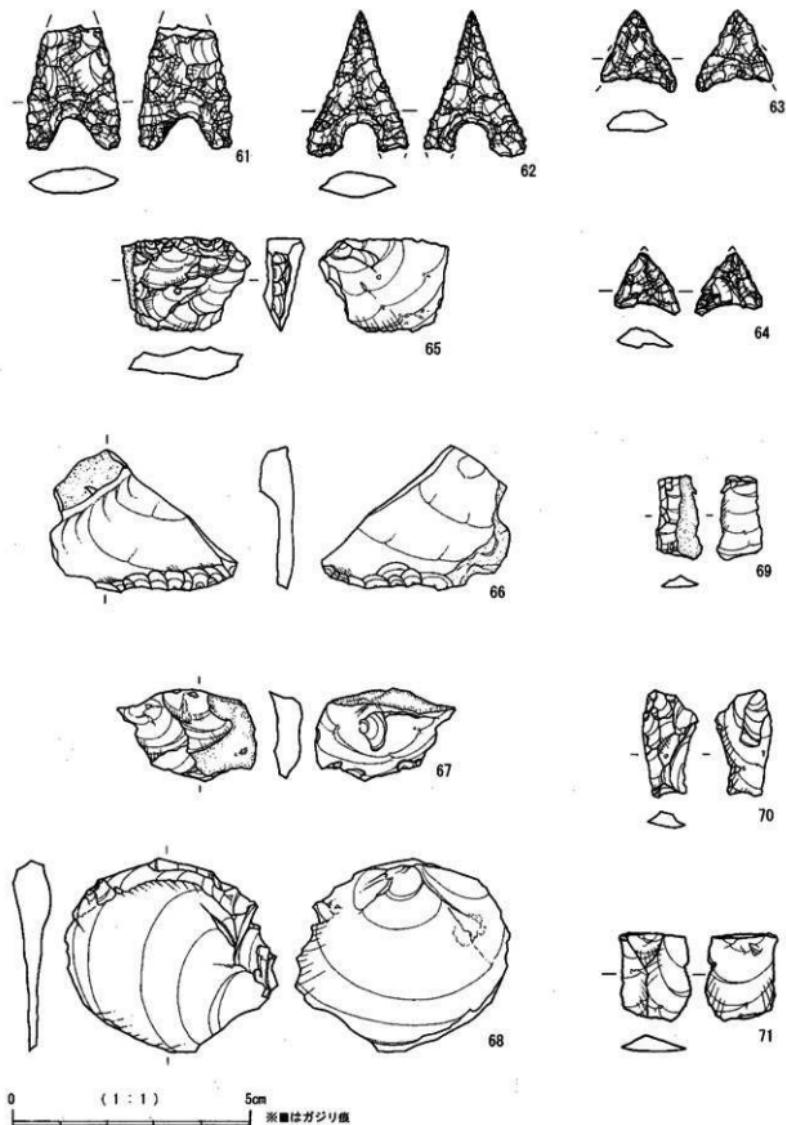
1～5類以外を6類とした。口縁部 38は型式が不明である。内面と口唇部に幅広(4mm程)のミガキを施し、外表面は継にハケメに類似した工具ナダを施した後に弱くナダ消す。胴部 39は幅のある沈線文が施されており、縄文時代中期の阿高式と考えられる。

#### ウ) 石器類(図II.11・12、表08・09)\*3

石器は、ほぼIV層から出土し、石鎚4点、剥片類57点、磨製石斧2点、磨石6点が出土している。

石材は、石鎚や剥片類のほとんどが黒曜石であり、とくに黒曜石(不明1)\*4としたものが最も多い。剥片 68は隣接する志布志町に所在する前川・安楽川上流域に見られるホルンフェルスを用いている。磨石に見られる円盤は遺跡周辺では台地を降りた本村川流域で採取できる。

剥片類の中には、残核や原石と思われるものがあり、石鎚を製作していた可能性が考えられる。また、再加工品も数点見られる。図化していない取上番号 369は、熱処理とは異なる被熱の可能性がある。磨製石斧 72・73は、破損後に加工した可能性が考えられる。



図II.11 IV層 出土石器 (1)

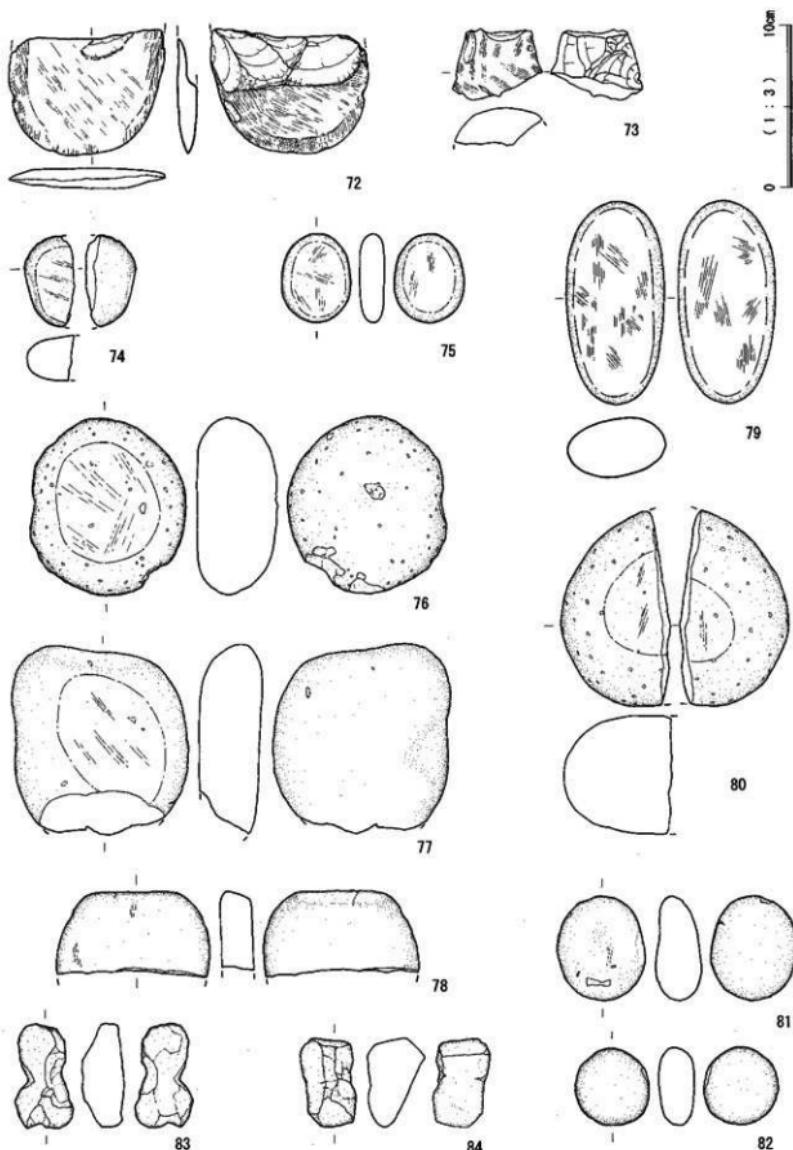
表II.08 III~V層 出土石器の計測表(1)

番号	出土位置	基盤	石材	法量(最大値で計測、単位はgとmm)				備考		
				長さ	幅	厚さ	重さ			
61	確認 - 14	III-T	IV	打製石頭	黒曜石(不明1)	26.0	19.5	5.5	26	先端が欠損
62	309	?	IV	打製石頭	チャート	31.0	21.0	5.5	19	
63	284	?	IV	打製石頭	黒曜石(三輪)	17.0	15.5	4.5	0.6	
64	306	?	IV	打製石頭	黒曜石(不明1)	13.0	14.0	4.0	0.4	
65	322	?	IV	残核	黒曜石(不明1)	19.0	27.0	7.0	3.6	原縫面あり
66	215	P 5	IV	測片(R.F)	破質質岩	41.8	26.4	5.0	5.2	
67	330	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	19.0	29.0	7.0	3.0	原縫面あり
68	235	?	IV	測片	ホルンフェルス	41.0	43.0	13.0	8.4	
69	確認 - 10	GT	V	測片	黒曜石(無端な形)	17.0	9.0	3.0	0.1	原縫面あり
70	324	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	22.0	12.0	4.0	0.8	
71	307-2	?	IV	測片	黒曜石(不明)	19.0	13.0	5.0	1.0	
-	307-1	?	IV	測片(R.F)	黒曜石(不明)	12.5	7.3	1.7	0.2	
-	150	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	27.5	18.7	13.6	4.0	原縫面が多くあり
-	153	G2	IV	測片	黒曜石(長崎流派)	31.4	19.6	15.6	10.3	原縫面あり
-	184-1	IV	測片	黒曜石(二輪)	25.3	24.4	16.1	10.1	原縫面が多くあり	
-	184-2	IV	測片	黒曜石(不明1)	16.0	13.5	5.8	1.2	原縫面あり	
-	212	PS	IV	測片	黒曜石(不明1)	5.6	5.2	1.1		
-	267	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	14.2	12.0	3.7	0.5	原縫面あり
-	269	?	IV	測片(I.C.?)	黒曜石(不明1)	22.3	11.2	6.2	1.2	原縫面あり
-	271	IV	測片	黒曜石(不明1)	15.3	13.5	5.6	1.0	原縫面あり	
-	276	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	21.5	15.1	2.7	1.0	原縫面あり
-	273	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	15.2	7.7	1.6	0.2	原縫面あり
-	285-1	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	21.0	18.2	9.5	3.8	原縫面が多くあります。打点あり
-	285-2	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	16.2	13.1	5.3	0.8	原縫面あり。打点あり
-	288	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	16.0	10.6	8.9	1.5	原縫面が多くあります。
-	292	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	12.8	12.1	4.3	0.6	原縫面あり
-	296	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	26.2	18.2	7.5	2.4	原縫面が多くあります。打点あり
-	299	?	IV	石核?	黒曜石(不明1)	31.5	16.5	11.2	5.4	原縫面が多くあります。打点あり
-	300	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	15.9	12.3	2.1	0.3	原縫面あり
-	305	?	IV	測片(R.F)	黒曜石(不明1)	17.7	9.5	4.5	0.6	原縫面あり
-	306-1	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	26.3	23.1	3.1	1.7	原縫面あり
-	306-2	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	15.6	9.4	7.1	0.7	
-	310	?	IV	原縫	黒曜石(不明1)	24.2	15.0	8.1	3.4	原縫面が多くあります。
-	318	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	30.3	21.0	4.8	3.6	原縫面が多くあります。
-	319	?	IV	測片?	鳥巣石(不明1)	19.5	19.1	4.7	1.9	原縫面あり。打点あり
-	325	?	IV	測片	黒曜石(西九州系?)	27.7	15.1	9.0	2.5	原縫面が多くあります。
-	327	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	16.4	10.5	3.8	0.7	原縫面あり
-	341	IV	石核&材	黒曜石(不明1)	23.7	14.5	4.9	1.6	原縫面あり。打点あり	
-	359	IV	測片	黒曜石(不明1)	23.1	15.0	5.4	1.1	原縫面が多くあります。	
-	360	IV	測片	黒曜石(三輪)	15.5	12.2	1.7	0.3		
-	361	IV	測片	黒曜石(不明1)	18.7	10.1	3.0	0.5	原縫面あり	
-	362	IV	測片	黒曜石(不明1)	20.9	16.8	11.4	2.9	原縫面が多くあります。	
-	366	IV	測片(R.F)	黒曜石(不明1)	24.5	13.9	2.2	0.9	原縫面あり	
-	368	IV	測片	黒曜石(不明1)	16.1	6.7	0.8	0.1		
-	369	IV	測片	黒曜石(西九州系)	18.2	6.3	4.2	0.3	原縫面あり。黒曜石とは異なる被熱の可能性あり。	
-	451	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	14.1	9.5	3.3	0.4	
-	452	IV	測片	黒曜石(三輪?)	12.2	8.6	1.8	0.2		
-	472	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	18.4	9.9	8.4	1.1	原縫面あり
-	473	?	IV	測片	黒曜石(不明1)	18.8	14.2	4.7	0.8	
-	208	?	IV	測片	安山岩	18.1	14.9	5.8	1.4	原縫面あり
-	229	?	IV	測片	黑色安山岩	23.7	16.4	2.8	1.2	
-	239	OS	IV	測片	玄武岩	20.8	22.5	11.7	7.5	原縫面あり
-	-	V?	IV	測片	チャート	32.5	20.8	5.9	3.5	
-	220	?	IV	測片	チャート	23.0	8.4	3.8	1.0	
-	320	?	IV	測片	チャート	14.4	11.0	3.6	0.6	
-	98	?	IV	原石?	石英質岩	22.0	18.4	11.5	6.3	
-	130	C1	IV	粘質岩	粘質岩	58.3	41.4	6.2	14.6	鉄分が表面に多く付着する

出土位置の「？」は、出土位置の記述が不明のものを、「モザイク」は確認済みトレンチをします。

手書きの「U.F」はユーズドフレイクを、「R.F」はリタッチドフレイクをします。

新石材の「○」内は推定産地をしめし、不明1は現在「森森山系」と呼ばれて調査されているものを指す。



図II.12 IV層 出土石器(2)

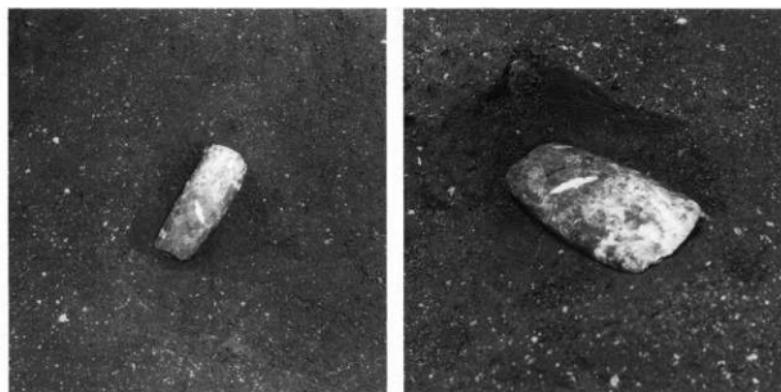
磨石 74～80 はやや不明瞭な磨面を持つものが多い。78・81・82 は磨石の素材であろうか。83・84 は凝灰岩の礫で自然礫である。

- ※1 調査当時は、基本層序の第V層にあたるアカホヤ降下火山灰層上面において、遺構が検出できることが認識されていなかったため、実際は遺構が存在していた可能性がある。なお、その後に行われた牧原遺跡の発掘調査において、アカホヤ降下火山灰層上面においてアカホヤ二次堆積層を覆土・埋土にもつ遺構の存在が確認されている（中水ほか 2003）
- ※2 分布図は、分布取り上げ番号 254～265 及び 383～412 は標高値がなく、482～524 は記録面が不明となっていたため掲載を見合わせている
- ※3 石材鑑定は、和田るみ子氏のご指導をいただいている。また、入稿前に今回報告分の石器について鑑定された和田氏は、団化しなかった剥片等にも石礫素材や原礫など団化の必要なものがあることをご指摘くださいました。しかし、諸事情により今回は掲載見合わせている
- ※4 この黒曜石は「霧島山系」と呼ばれ議論されている一群であり、その産地が確定していないことから産地不明としている

表II.09 III～V層 出土石器の計測表（2）

番号	出土位置		番種	石材	計測（最大値で計測。単位は g と mm）			備考
	報告	取上げ			長さ	幅	厚さ	
72 104	C2	IV	磨製石斧	粘板岩	77.0	96.5	12.5	94.10 鉄分が表面に多く付着する
73 236	Q5	IV	磨製石斧？	硬質頁岩	57.2	42.4	21.4	53.42
74 363	H2	IV	磨石？	砂岩	56.0	30.0	29.0	58.90
75 9	C1	IV	磨石	砂岩（硬質）	54.0	42.0	15.0	51.80
76 158	G3	IV	磨石	安山岩	108.0	94.0	49.0	793.80 表面の凸凹は鉛打痕か
77 154	F2	IV	石滅	砂岩	112.0	106.0	37.0	724.91
78 165	G2	IV	石磨	砂岩	48.0	92.0	20.0	177.70
79 207	Q5	IV	磨石	砂岩（硬質）	124.0	59.0	36.0	406.80
80 138	F2	IV	磨石	花崗岩	119.0	66.0	75.0	750.50
81 141	F2	IV	磨石？	砂岩	64.0	53.0	23.0	121.70
82 105	C2	IV	磨石？	砂岩	47.0	44.0	22.0	67.60
83 148	？	？	素朴？	凝灰岩	61.0	34.0	25.0	43.30
84 110	？	？	素材？	凝灰岩	53.0	32.0	35.0	38.90
176 ？	？	IV	磨製石斧	蛇紋岩				行方不明

\*出土位置の「？」は、出土位置の記録が不明のものをしめす



写真II.02 IV層 出土石器 176 (磨製石斧)

#### 第4節 検出面2（縄文時代早期）の調査成果

第V層上面を遺構検出面に、第VI層を遺物包含層とする。時期は縄文時代早期で、前葉の前平式が主体となり、吉田式も一定量出土している。

##### 1. 第V層上面の検出遺構（図II.03・14）

V層上面より竪穴状遺構1基・柱穴23基・集石遺構1基を検出している。いずれの遺構も近接しており、とくに竪穴状遺構と柱穴群は分布が重複している。遺構の分布については調査区の幅が約4.0mと狭いため、調査区外に遺構の分布が広がることが考えられる。調査者も「竪穴住居は1基しか検出できなかったが、周囲の地形等を考慮すると事業実施範囲外への広がりが想像される。<sup>\*1</sup>」と同様の可能性を指摘している。

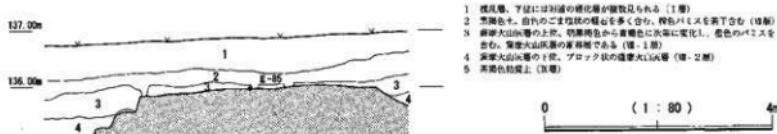
遺構の時期については、竪穴状遺構より縄文時代早期前葉に比定される前平式土器が覆土中より出土している。柱穴群に関しては、調査者が「竪穴住居は、その周囲、埋土の中にビットが多数検出できたが、埋土の状況から同時期のものでなく、それ以降のものと考えられる<sup>\*2</sup>」と述べており、柱穴群の時期は竪穴状土坑より新しい時期を想定している。一方で竪穴状遺構と集石遺構については「2つの遺構は、ごく近くで検出されたので同時期に存在したものと考えられる。<sup>\*3</sup>」と同時期の可能性を指摘している。

以下、各遺構別に詳細を記述する。

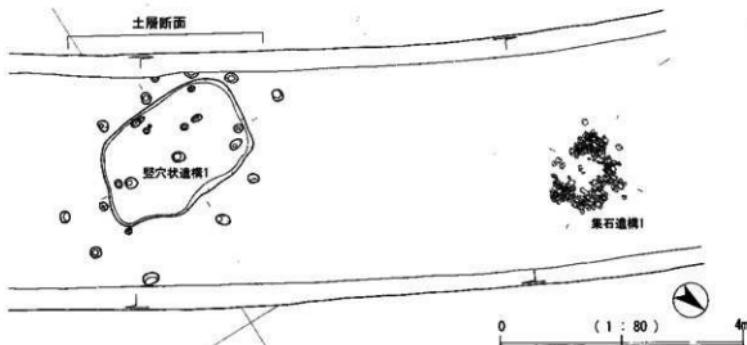
##### ア) 竪穴状遺構（図II.16）

竪穴状遺構は1基をグリッドI・J 3で検出している。竪穴状遺構1の周囲には柱穴1~11が巡り、少し離れて集石遺構1が存在する。

形態は、平面形が隅丸長方形に近い楕円形を呈しており、断面形は逆台形である。規模は平面2.5m × 1.7m、深さ32cmを測る。



図II.13 調査区土層断面



図II.14 VI層上面 遺構配置

遺構内からは複数の土器が出土している。土器は胴部 85 を除くと 5cm 以下の中破片である。胴部 85 は高さ 16cm × 幅 12cm のやや形の整った長方形の破片で、検出面において、ほぼ水平に外面を下にして伏せた状態で出土している。土器形式はいずれも前平式で、3~4 個体以上の個体数が考えられる。

#### イ) 柱穴 (図 II.17、表 II.10)

柱穴は 23 基が検出されている。分布は、柱穴 1~23 がグリッド I・J 3 に偏在して、堅穴状遺構 1 の周辺に集中している。配置状況からは、柱穴 1~10・柱穴 17~20・柱穴 13・15 と柱穴 22・23 に分けられる。柱穴 1~10 は堅穴状遺構を囲むように梢円形に巡っているが、堅穴状遺構 1 とは平面配置の軸方向が異なる。柱穴 17~20 は前述の梢円形柱列のほぼ中央を直線状に並んでおり、延長線上にも梢円形配列の一部である柱穴 3・8 が並んでいる。柱穴 13・15 と柱穴 22・23 は、それぞれの直径が類似しており、対になるように配置されている。

柱穴の特徴としては、覆土がⅦ 層に類似している点と断面形が逆三角形と逆台形の 2 種類ある点と、上場の直径がやや大きめの柱穴 1~10・17~20 とそれ以外に分けられる点などが挙げられる。なお、調査者は多くの柱穴に対して樹根の可能性を指摘している。各柱穴の詳細については表に述べる。

#### ウ) 集石遺構 (図 II.18)

集石遺構は 1 基をグリッド J 4 の VI (薩摩降下火山灰) 層上面で検出している。集石遺構 1 は、礫が馬蹄状に弧を描いて広がり、礫の密度には疎密がある。礫の密度が最も密な範囲は、礫が積み上げられた状態を呈する。礫の垂直分布などから浅い掘り込みをもっていた可能性が考えられる。礫は、角礫で全体的に赤色化しており、脆く、すぐに割れる特徴をもっている。この特徴からは被熱を受けた可能性が考えられる。礫個数は約 300 個を数える。覆土中には炭化物の粒が含まれる。

出土遺物は、土器 90 の 1 点があり、前平式と考えられる。

\* 1~3 調査記録による

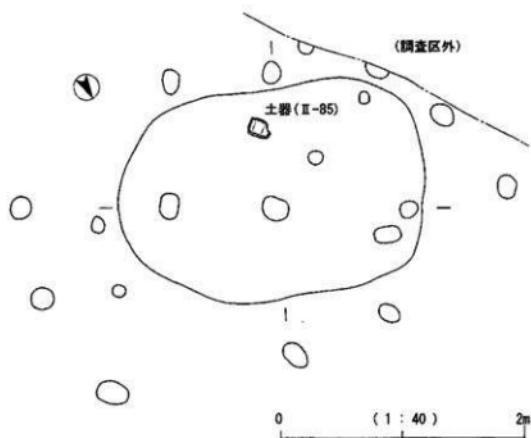


図 II.15 VII 層上面 堅穴状土坑 1・柱穴 1~23 の検出状況

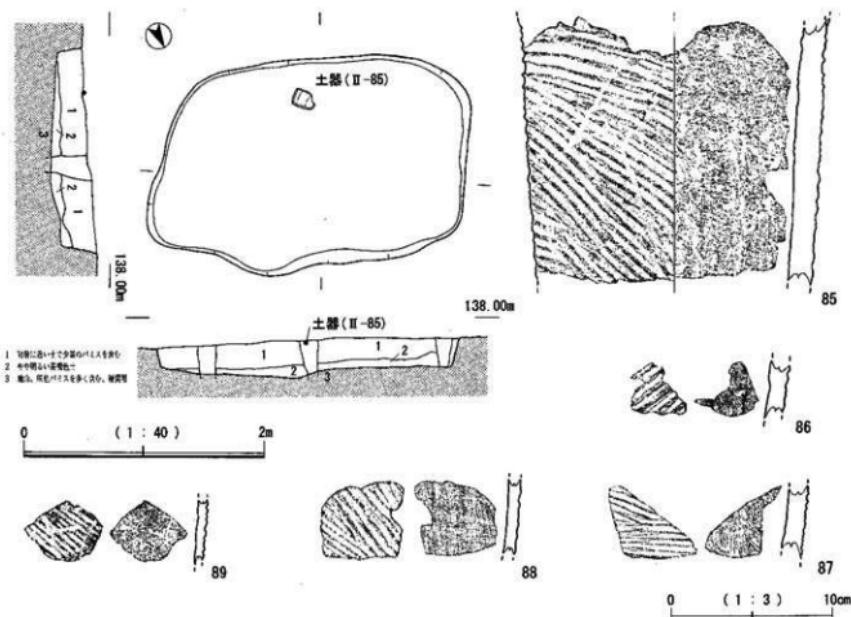
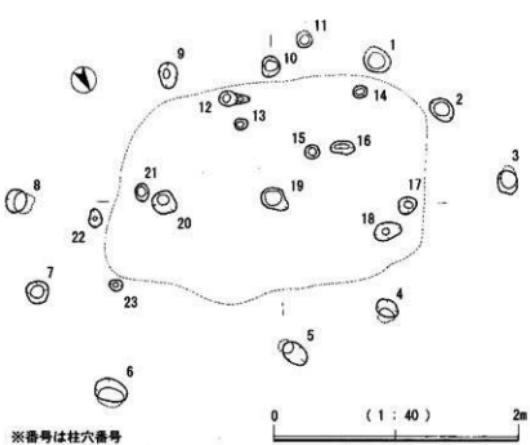
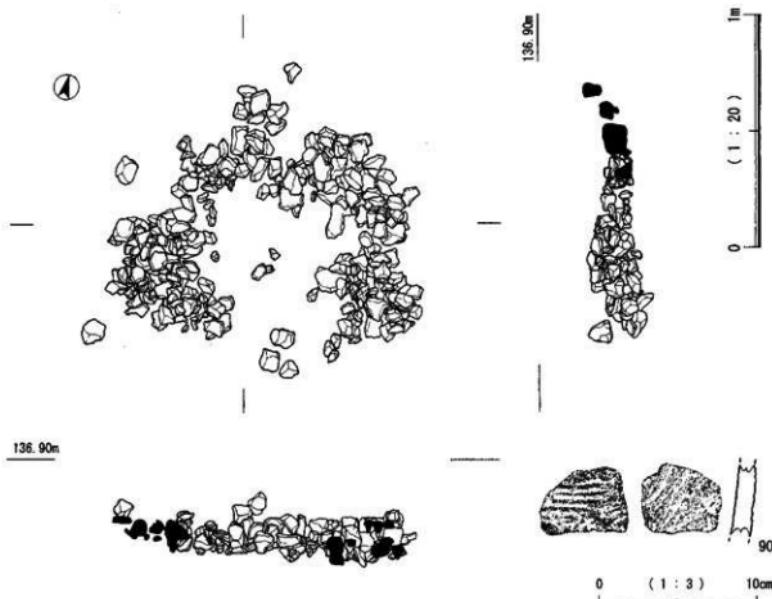


図 II.16 VII層上面 積穴状土坑 1と出土土器

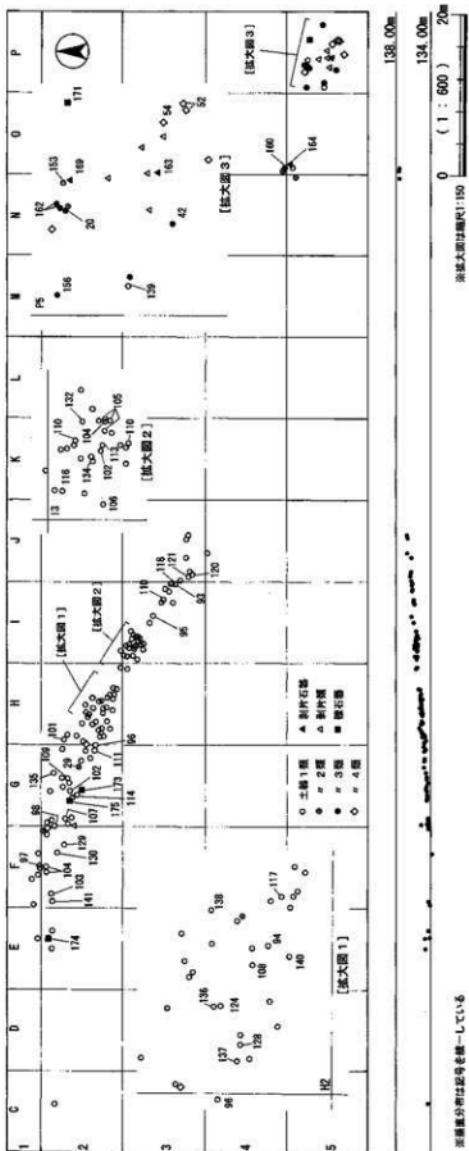


表II.10 柱穴1~23の詳細

柱穴番号	詳細
柱穴1	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含み、褐色の小粒の軽石を若干含む。深さ70cm。断面形は逆三角形。樹根か?
柱穴2	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。黄色のバミスを含む
柱穴3	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む
柱穴4	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。深さ34cm。断面形は逆台形
柱穴5	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。断面形は逆三角形。樹根か?
柱穴6	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。断面形は逆台形
柱穴7	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。黄褐色バミスを含む。深さ45cm。断面形は逆台形
柱穴8	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。褐色の小粒の軽石を含む。深さ53cm。断面形は逆台形
柱穴9	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。褐色バミスを含む。深さ58cm。断面形は逆三角形。樹根か?
柱穴10	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。橙色バミスを含む。断面形は逆台形
柱穴11	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。褐色の小粒の軽石を若干含む。深さ20cm。断面形は逆三角形
柱穴12	記録なし
柱穴13	記録なし
柱穴14	記録なし
柱穴15	記録なし
柱穴16	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。褐色の小粒の軽石を若干含む。堆上は軟らかく疊りがない。樹根か?
柱穴17	記録なし
柱穴18	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。深さ28cm。断面形は逆台形
柱穴19	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む
柱穴20	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含み、褐色バミスを含む。深さ29cm。断面形は逆三角形
柱穴21	記録なし
柱穴22	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。褐色の小粒の軽石を若干含む。深さ70cm。断面形は逆三角形。樹根か?
柱穴23	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。褐色の小粒の軽石を若干含む。深さ70cm。断面形は逆三角形。樹根か?



図II.18 VII層上面 集石遺構と出土土器



## 2. 第VI層の出土遺物

### ア) 分布状況と出土状況 (図II.19)

VI層の遺物分布は、調査区の東西両端に集中しているが、IV層と同様に、削平によりグリッドJ4～N4が消滅している。

土器の分布は、出土量の最も多い土器1類の前平式が調査区全体に分布している。造構のあるグリッドI8～J9にかけては包含層が一部削平されるが分布する。土器2類・3類はとくに集中する範囲が見られないが、調査区東端のグリッドO4～P5に多く出土している。

石器の分布は、調査区東端のグリッドP5に比較的出土が集中する。

### イ) 土器類

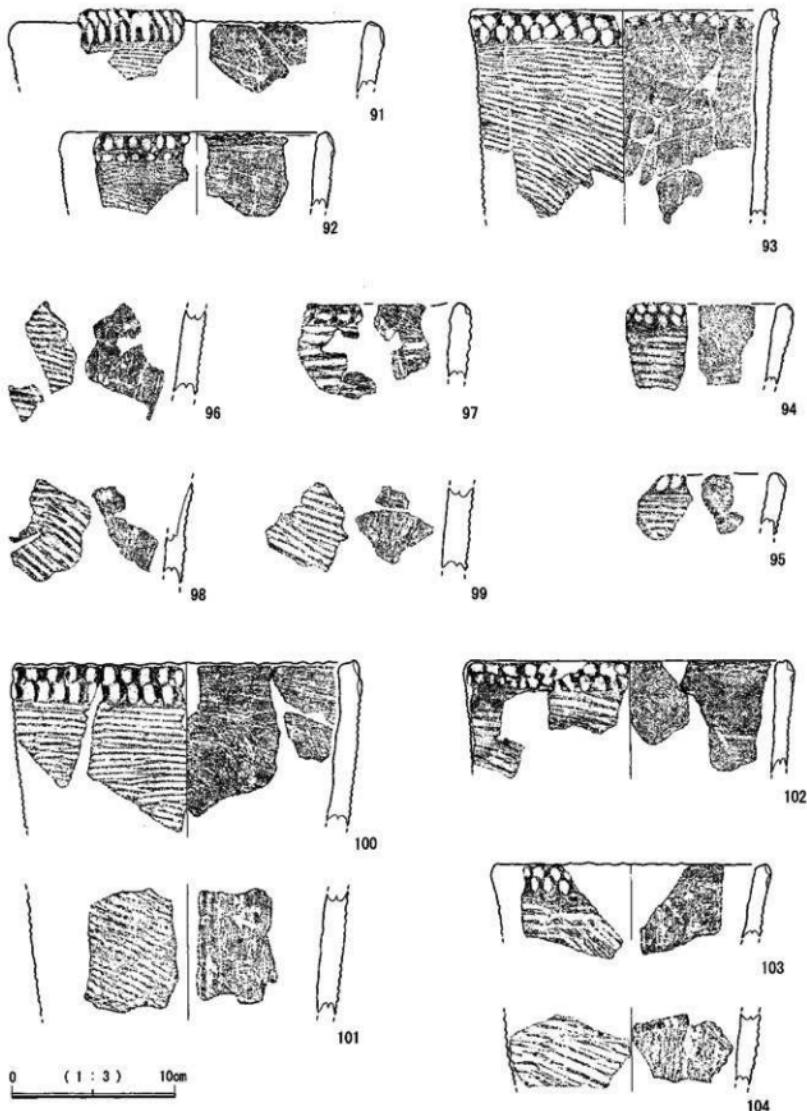
VI層出土の土器は、おおまかに特徴から1～3類に分けている。分類番号は任意である。以下、分類別に述べ、個別の詳細は表に述べる。

#### 土器1類 (図II.20～23)

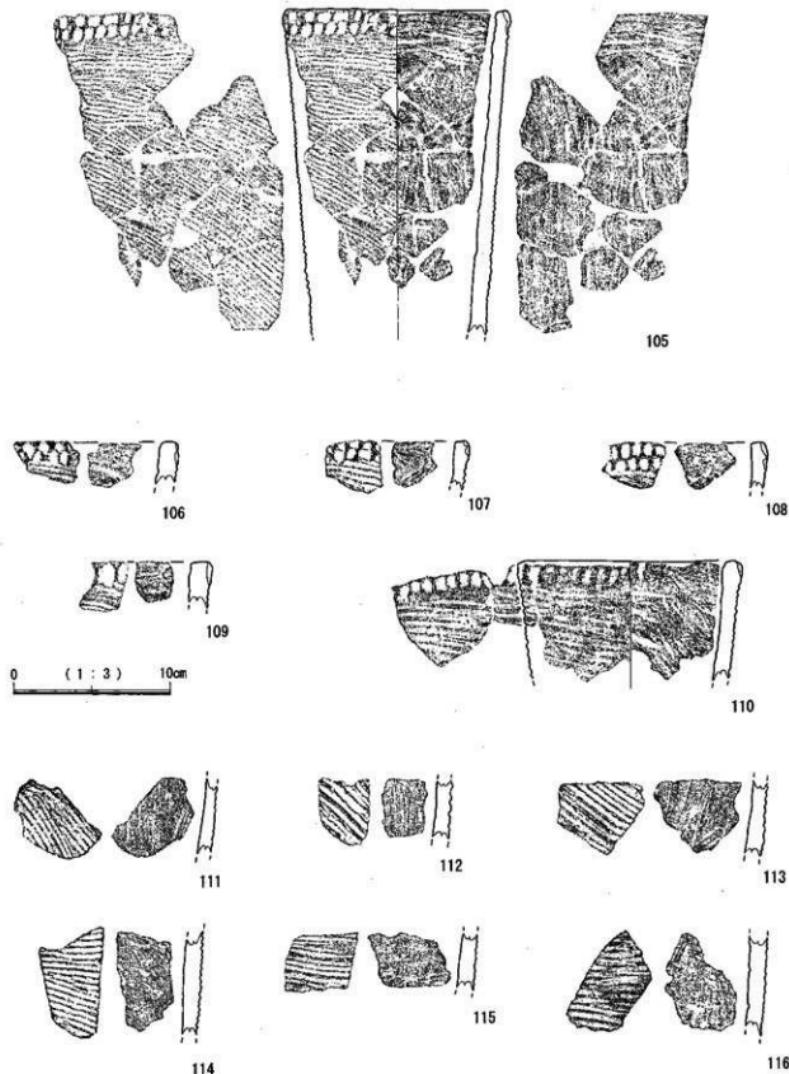
1類91～141は、腹部外面に横位もしくは斜位の粗い貝殻条痕を密に施し、内面をケズりで整える。土器型式は前平式と考えられる。

おもな口縁部のキザミは綫長の梢円形を呈すが、施文具の先端が尖り幅のあるものを用いたか、もしくはヘラ状の施文具を刺突して先端を固定したまま左右に動かして施文したものと考えられる。一方、ヘラ状の工具を口縁部97・102・107・108のキザミは他と異なり、施文具先端が四角のもので刺突したか、ヘラ状もしくは貝殻の施文具を刺突後にやや横に引いた可能性が考えられる。他方、口縁部92は2条のキザミの下の1条のキザミは円形の刺突である。口縁部110のキザミは貝殻腹縁を斜めに刺突する。

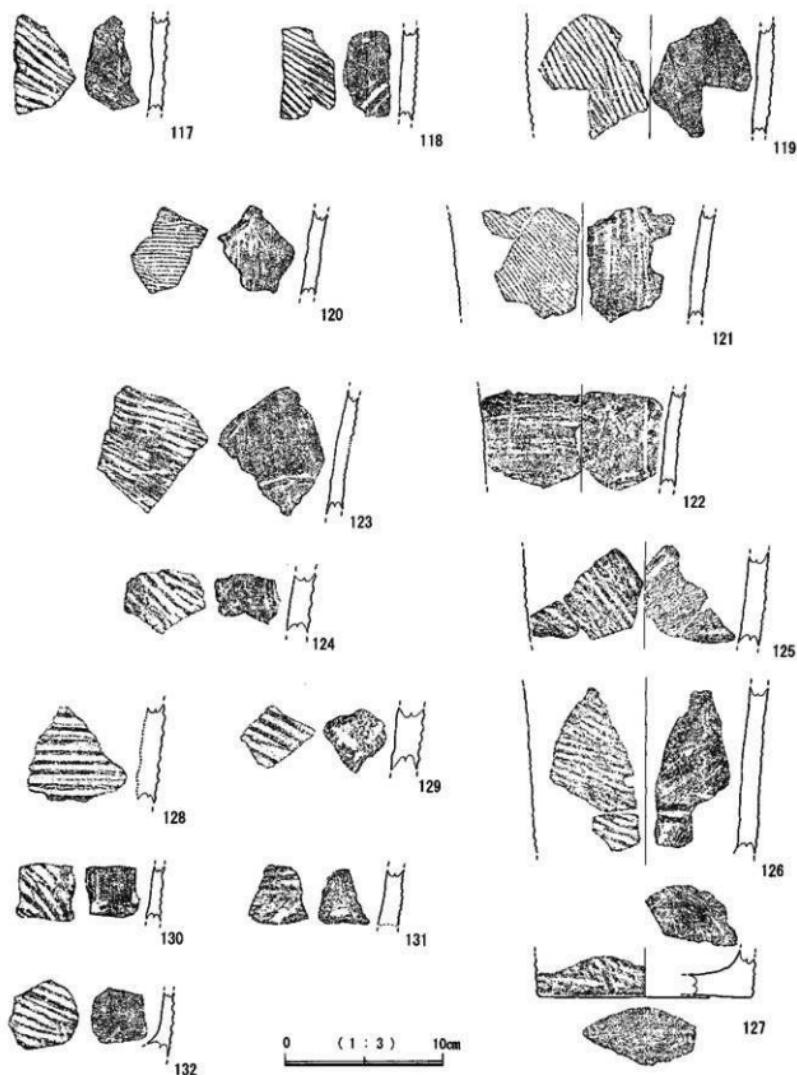
図II.19 VI層出土遺物の分布状況



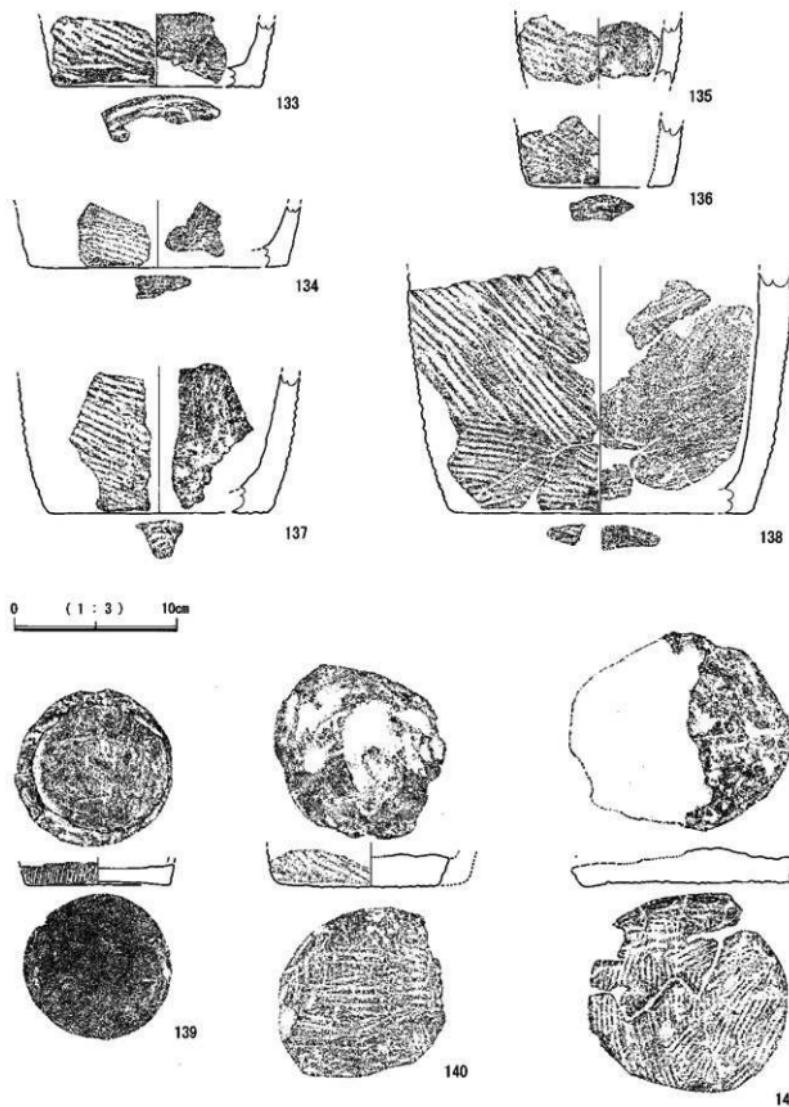
図II.20 VI層出土器 (1)



図II.21 VI層 出土土器(2)



図II.22 VI層出土土器 (3)



図II.23 VI層 出土土器(4)

胴部は、すべて貝殻条痕を施しており、複数個体のものが出土している。施原体である貝殻もいくつかの種類が見られる。胴部122は上端に横位の貝殻腹縁の刺突が巡る。

底部は、底面の調整が貝殻条痕・ケズリ・ナデと施原体の違いがある。

なお、土器胎土中の混和材については、次の数点は他のものと異なる。口縁部93・94・101・106・胴部115・116・124は、胎土中に5mm大を超える赤色砂粒を含む。胴部128・底部129は1mm大の長石を多量に含む。

#### 土製円盤

底部139～141は、ほぼ底面のみが造りこり、破断面は打ち欠きもしくは摩滅の後が見られる。土製円盤であろうか？土器型式は、139が吉田式、140・141が前平式と考えられる。

#### 土器2類（図II.24）

2類142～153は、内面をケズリ後にミガキを施す。外面は縦位の貝殻腹縁の刺突文や縦の逆三角形の浮文を施す。土器型式は吉田式と考えられる。推定される個体数は最大7個体と考えられる。

胴部142～150は、外面に横の貝殻条痕後、縦位の貝殻腹縁の刺突文と逆三角形の浮文を施す。一方、151～155は外面に密な縦位の貝殻腹縁の刺突文のみを施す。

口縁部144～148は小型で、推定される口径は10cm前後と考えられる。口縁部145～胴部148は同一個体と考えられ、口縁部から底部まで見られる。

底部148・151・152は、最下端を縦位のキザミを施す。

#### 土器3類（図II.25）

1・2類以外のもの156～162を3類としている。

胴部156は、外面に密な押引文を施す。型式は吉田式であろうか。なお、胎土中に5mm大と粒度が大きい赤色砂を含む。

胴部157は、密度が疎の貝殻腹縁を刺突する。型式は下剥峰式であろうか。出土は1点のみである。

胴部158・159は、縦に並んだ刺突文を連続して密に刺突する。同じく下剥峰式であろうか。なお、158は胎土中に5mm大と粒度が大きい赤色砂を含む。他に3点が出土している。

胴部160の外面文様は、斜めの短沈線文を繰り返し、その上から横位の沈線文を複数条巡らす。胎土は他と異なり乳白色を呈する。平柄式であろうか。1点のみ出土している。

胴部161・162は、器面の内外面に貝殻条痕を施し、胎土中の混和材は大きく粗く、量も多い。含まれる赤色砂は5mm大と粒度が大きい。右京西式と考えられる。他に2点が出土している。

#### ウ) 石器類（図II.26・27）

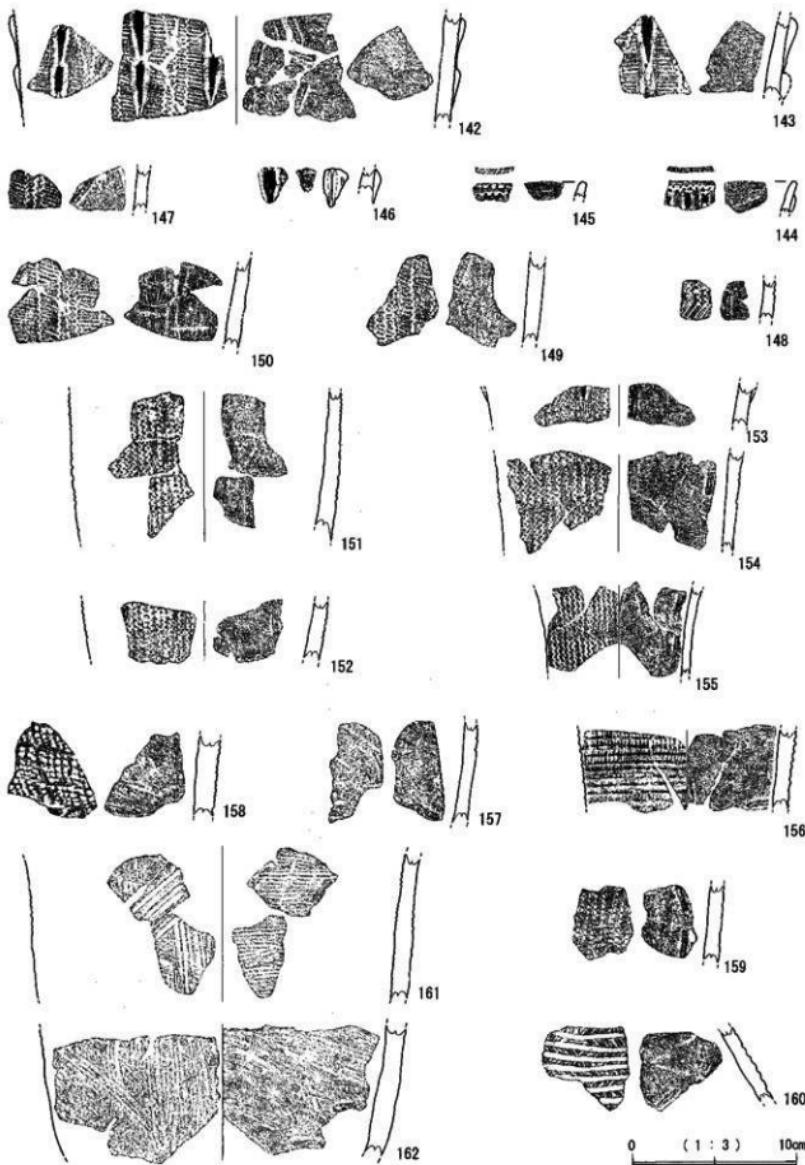
VI層出土の石器は、石鏃3点、石鏃未製品1点、剥片類8点、スクレイバー1点、磨石2点、石皿3点が出土している。

石材は、IV層と同様に、全体的に最も多いのが黒曜石である。産地別には黒曜石（不明1）<sup>\*1</sup>としたものが多いが、他にも複数の産地のものが見られる。また、チャート・メノウもあり、製品では黒曜石（不明1）とした石材製のものは存在しない。

剥片類の中には、残核と思われるものがあり、何らかの石器製作が行われていた可能性が考えられる。

磨石は不明瞭な磨面を持つものが多い。170は磨石の素材であろうか。173・174は小型の石皿であろうか。

<sup>\*1</sup> この黒曜石は「霧島山系」と呼ばれる議論されている一群であり、その産地が確定していないことから産地不明としている。



図II.24 VI層 出土土器(5)

## 第Ⅱ章 丸岡A遺跡の発掘調査報告

表II.11 VI層 出土土器の観察表(1)

番号	層	遺物番号 (取り上げ)	組合	土器			測定・文様	出土の箇所	備考
				内面	外面	内面			
11	65	v. 住家一朝	新	に高い直腹 373764-1 373765	おもに上へのきずへに長いカズリ	細めの貝殻模様文(左側のみ)	3 ○ ○ ○ ○ ○	外側がまだらにやや褐色化	
16	86	KOなし	新	に高い直腹 373766-4	高いカズリ	細めの貝殻模様文(右斜め上り)	0.5 ○ ○ - ○ ▲	-	
47	91	住家一朝	新	SV786-6	上へのカズリ後、下へのカズリ	細めと他の貝殻模様文	1 ○ ○ ○ ○ ○	-	
88	KOなし	新	に高い直腹 373767-2 373768-2	上へのカズリ後、下へのカズリ。上でのナテ	細めの貝殻模様文(左斜め下)	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化		
89	KOなし	新	に高い直腹 373767-3 373768-3	上へのカズリ後、下へのカズリ	細めの貝殻模様文(左斜め上り)	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が黒色化		
11.16	90	家内	新	に高い直腹 373768-1 373769-1	上へのカズリと(右斜め上)、低いカズリ	他の貝殻模様文	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が褐色化し、円形の斑駁 がよく見られる	
11	91	M-4.vi.499	新	SV786-6	上斜め上へのカズリ	円錐形、複数のナガ 口縁部: 縦波状のナガ 底部: 肩波状のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が白色化、内面に円形 斑駁が多く見られる	
20	92	KOなし	新	に高い直腹 373769-4	左へのカズリ後、高い後のナテ	円錐形、複数のナガ 口縁部: 縦波状のナガ 底部: 肩波状のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外側がやや黒色化	
93	J-3.vi.502	口縫	新	に高い直腹 373769-4	1脚目: 横のナガ。空間隔の剥離の痕 縫: 上へのカズリ	丁字彫刻: 縫のナガと 口縁部: 口縁部のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	外側が黒色化	
94	J-1.vi.508	口縫	新	に高い直腹 373769-4 373770-2	縫: 横のナガ	丁字彫刻: 口縫との角に複数のナガと並 行してもう1条のナガと複数のナガ 口縁部: 横のナガ	3 ○ ○ ○ ○ ○	縫が複数(3×1リングか?)	
95	I-3.vi.508	口縫	新	に高い直腹 373769-5	縫: 横のナガ	丁字彫刻: 口縫との角に複数のナガと並 行してもう1条のナガと複数のナガ 口縁部: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
96	H-2.vi.460	口縫	新	に高い直腹 373769-6	縫: 横のナガ	丁字彫刻: 口縫との角に複数のナガと並 行してもう1条のナガと複数のナガ 口縁部: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
97	F-1.vi.503	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	丁字彫刻: 口縫との角に複数のナガと並 行してもう1条のナガと複数のナガ 口縁部: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
98	G-1.vi.506	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	丁字彫刻: 口縫との角に複数のナガと並 行してもう1条のナガと複数のナガ 口縁部: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
99	J-4.vi.521	口縫	新	97. v. -45	縫: 横のナガ	丁字彫刻: 口縫との角に複数のナガと並 行してもう1条のナガと複数のナガ 口縁部: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
100	97. v. -45	口縫	新	SV786-6	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	縫が10(11面開)半面黒色化 , 内面は多くに円形斑駁が 見られる	
101	97. v. 7	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
102	II-2.vi.466	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	2 ○ ○ ○ ○ ○	外側がやや黒色化	
103	G-2.vi.348	口縫	新	373769-7	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外側が黒色化	
I-3.vi.507	104	口縫	新	373769-7	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外側が黒色化	
105	F-2.vi.354	口縫	新	373769-7	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	2 ○ ○ ○ ○ ○	外側がやや黒色化	
106	H-2.vi.354	口縫	新	373769-7 373769-8	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外側が黒色化	
107	G-2.vi.339	口縫	新	373769-8	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が黒色化	
108	H-2.vi.437	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
109	G-2.vi.351	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
110	I-3.vi.545	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外面上半は黒色化、下半は半 黒化で円形斑駁が見られる	
111	546	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外面上半は黒色化、下半は半 黒化で円形斑駁が見られる	
112	I-3.vi.554	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	外側が黒色化	
113	G-2.vi.339	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が黒色化	
114	H-2.vi.437	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
115	G-2.vi.351	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
116	I-3.vi.500	口縫	新	373769-8 373770-1	縫: 横のナガ	口縁部: 縫のナガ 口縁部: 縫のナガと複数のナガ 縫: 横のナガ	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
117	J-2.vi.419	口縫	新	SV786-6	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
118	I-3.vi.533	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	117は左斜め上へのナガ。底部に左 側にあらうか	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
119	KOなし	新	SV786-6	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化		
120	J-3.vi.571	口縫	新	373769-6 373770-1	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	1 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
121	J-3.vi.530	口縫	新	373769-6 373770-1	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面がやや黒色化	
122	L-4.vi.495	口縫	新	373769-6 373770-1	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が黒色化	
123	J-4.vi.522	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が黒色化	
124	H-2.vi.447	口縫	新	373769-6	縫: 横のナガ	左斜め上への貝殻模様	0.5 ○ ○ ○ ○ ○	内面が黒色化	

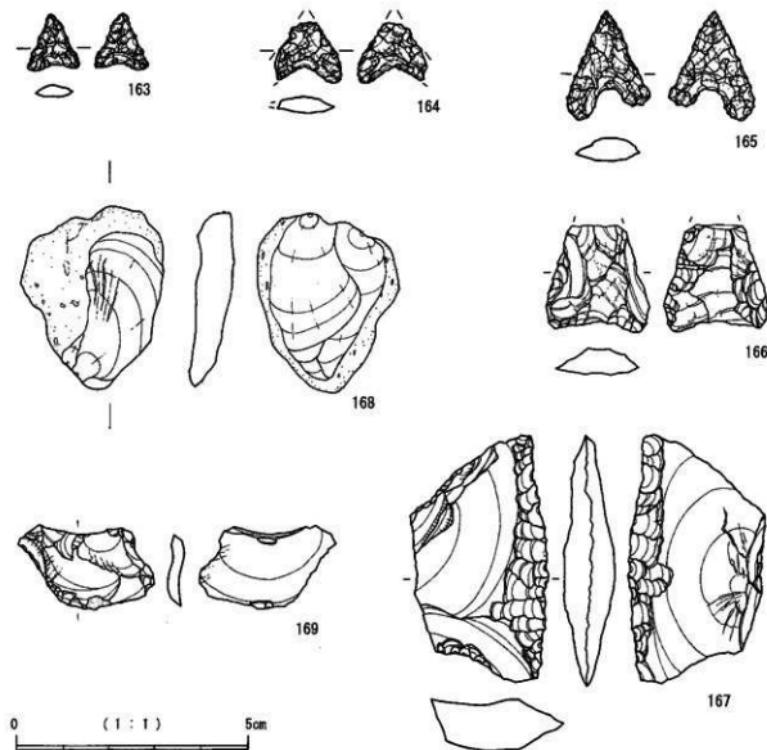
表Ⅱ.12 VI層 出土土器の観察表(2)

遺物番号	遺物番号 (取引上記)	層位	土器		測定・文書		前土中の剖面状況					備考	
			内部	外部	内部	外部	経年変化	石突	火炎	鉢	盤	手取	
125	I-3.vi.546.308	側	壁	73786.4	トへのケズリ	仮説的上部の貝殻集落	△	○	△	△	△	△	外層の一部がわずかに黒色化
126	I-3.vi.555	側			底面: カセリ後、認為ナテ	底面: 北側面のカセリ	-	-	-	-	-	-	
127	I-3.vi.346	底											
128	H-2.vi.445	側	にあく・裏面	10786.4	トへのケズリ	底: 丸め上がりの貝殻集落	1	○	○	△	△	△	内面が黒色化
129	Y-2.vi.256	側	にあく・裏面	73786.4		底: 丸め上がりの貝殻集落	-	-	-	-	-	-	外層が黒色化
130	Y-2.vi.377	側	裏面	10786.4	側: 上へのケズリ後、工具ナテ	左斜め上部の貝殻集落	△	○	△	○	△	△	内面が黒色化、外層が赤化し、同心環跡も見られる
131	L-4.vi.497	側	裏面	73786.4		底: 丸めナテ							
132	J-3.vi.543	底	にあく・裏面										
133	97.v	底	にあく・裏面	73786.4	底: ナテ	左斜め上部の貝殻集落	△	○	△	△	△	△	内面がやや黒色化
134	I-3.vi.573	底	にあく・裏面	10786.4	ナテ	底面: 製作時刻の経年変化	△	○	○	○	△	△	内面がやや黒色化
135	G-2.vi.264	側	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ	左斜め上部の貝殻集落	1	○	○	△	△	△	内面が黒色化
136	H-2.vi.447	側	にあく・裏面	73786.4	右: 上へのケズリ	右斜め上部の貝殻集落	-	-	-	-	-	-	内面が黒色化
137	H-2.vi.446	底	にあく・裏面	73786.4	左斜め上部の貝殻集落	左: 上へのケズリ	2	○	○	○	△	△	内面がやや黒色化、外層が赤化し、円形射撃が見られる
138	H-2.vi.426	側	にあく・裏面	73786.4	右: 上へのケズリ後、认为ナテ	右斜め上部の貝殻集落	1	○	○	○	○	△	内面がやや黒色化
139	Y-5.vi.412	底	にあく・裏面	73786.4	底: 丸め上部のケズリ後、ナテ	底: 丸め上部の貝殻集落	△	○	○	○	○	○	内面がやや黒色化
140	II-2.vi.439	底	にあく・裏面	73786.4	底: 丸め上部のケズリ後、ナテ	底: 丸め上部の貝殻集落	1	○	○	○	△	△	内面が黒色化
141	Y-2.vi.371	底	にあく・裏面	73786.4	底: 丸めナテ	底: 丸め上部の貝殻集落	△	○	○	△	△	△	内面が黒色化
142	vi.錠付漆	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、底に横のミガキ	左: 前土中の貝殻集落、南側の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	1	○	○	○	○	-	内面が半色化
143	K-4.vi.597	底	にあく・裏面	73786.4	右: ナテ	右: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	-	-	-	-	-	-	
144	L-4.vi.491	口縁	にあく・裏面	73786.4	左: ナテ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	
145	K-4.vi.508	口縁	にあく・裏面	73786.4	右: ナテ	右: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
146	II-7.12	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 横に横のミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	1	○	○	○	○	-	内面が半色化
147	K-4.vi.515	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 横に横のミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	
148	K-4.vi.513	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 横に横のミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	
149	L-4.vi.498	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	1	○	○	○	○	-	内面が半色化
150	L-4.vi.517	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	
151	M-5.vi.495	底	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	
152	I-4.vi.499.900	底	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
153	1-4.vi.300	底	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
154	Y-5.vi.294	側	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
155	K-4.vi.507	底	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
156	K-4.vi.508	底	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、縫合ミガキ	左: 前土中の貝殻集落の剥離と土と底との隙間	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
157	P-5.vi.365	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 丁寧なナテ	左: 丁寧なナテ	△	○	○	○	△	△	内面が半色化し、円形射撃が見られる
158	L-4.vi.528	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、ナテ	左: 上へのケズリ後、ナテ	1	○	○	○	△	△	内面が黒色化
159	L-4.vi.499	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、ナテ	左: 上へのケズリ後、ナテ	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
160	M-4.vi.508	柄	にあく・裏面	73786.4	左: 上へのケズリ後、ナテ	左: 上へのケズリ後、ナテ	△	○	○	○	○	-	内面が半色化
161	O-4.vi.217	柄	にあく・裏面	73786.4	ナテ	ナテ後、表面の火炎痕を拭いてしらし。モジ	△	○	○	○	○	○	内面が半色化し、円形射撃が見られる
162	M-5.vi.496	底	にあく・裏面	73786.4	ナテ	ナテ後、表面の火炎痕を拭いてしらし。モジ	2	△	○	○	○	○	内面に、わずかに黒色化の痕
163	S-5.vi.301.302	底	にあく・裏面	73786.4	ナテ	ナテ後、表面の火炎痕を拭いてしらし。モジ	2	○	○	○	△	△	内面が黒色化

## 第5節 まとめにかえて

本報告は、初めに示したとおり、調査と報告を異なる人物が担当して行っている。そのため整理作業及び報告書作成の担当者として気が付いた点を記したい。

調査では、おもに縄文時代早期前業(前平式)の遺構が検出されている。遺構は堅穴状遺構<sup>11</sup>、柱列、築石遺構であり、隣接している。堅穴状遺構と柱列は配置関係から、両遺構が互いに存在を意識して築かれている可能性が高い。この両遺構は調査者が、覆土が異なることから違う時期の遺構としている。しかし、写真を見る限り柱穴は遺物包含(VI)層付近の層土に類似するのに対しても、堅穴状遺構は蕪草障下火山灰(Ⅳ)層をベースにVI層付近の影響を受けている様に見られる。このことから両者が



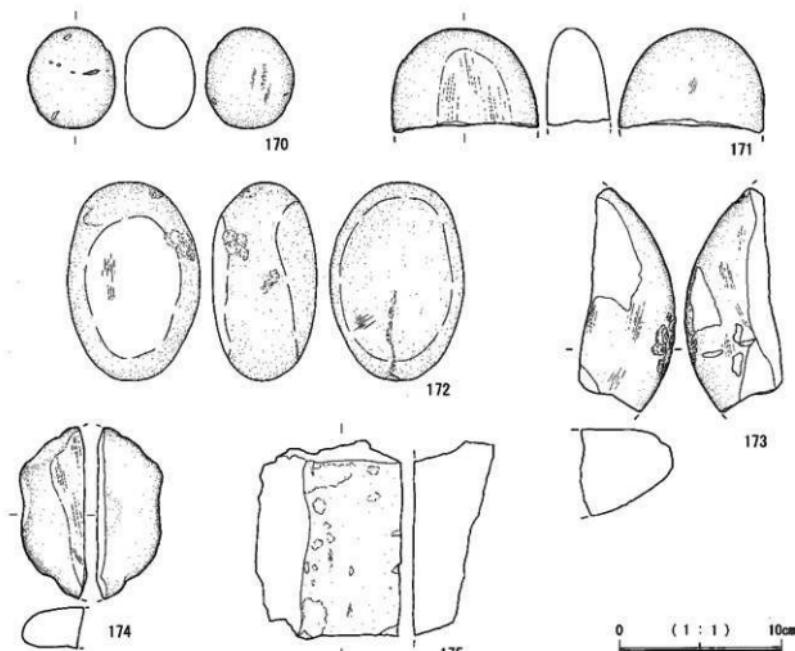
図II.25 VI層 出土石器 (1)

異なる土層であるのは筆者も同意見であるが、その違いが時期差ではなく、竪穴状造構の覆土は土器Ⅱ.85の出土した高さを床面とした浅い掘り込みの竪穴住居や平地式住居の床面もしくは床下の痕跡の可能性があると考える。そうすると重複する様に配置している円形に並んだ柱列が上屋のための施設となり、両者を合わせてひとつの竪穴住居になる可能性が考えられる。今後、類例と調査時例での検証が必要と考えられる。

\*1 概要報告をおこなった黒川忠広氏は「前平式土器期の竪穴状造構は、川辺町鷹爪野遺跡でも検出されており、宮崎県日南市や串間市においても確認されている。」と述べておらず（出口ほか2003）、同様の造構の検出例が他地域においても確認されていることを挙げている

## 【参考】

- 黒川晃・倉元良文・下園昌三 1995 「北別府遺跡・丸岡遺跡」 県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書 有明町教育委員会  
 中水忍・栗原文夫 1998 「丸岡遺跡県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書」 有明町教育委員会  
 山口順一郎・黒川忠広 2003 「丸岡遺跡」「屋部当道路・権原遺跡」 有明町埋蔵文化財報告書(4)p13-19 有明町教育委員会



図II.26 VI層 出土石器(2)

表II.13 VI層 出土石器の計測表

番号	出土位置	器種	石材	法量(最大値で計測、単位はgとcm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
163	406	?	打製石器	黒曜石(三船)	125	11.0	2.5	0.1
164	384	?	打製石器	黒曜石(西北九州系)	130	14.5	3.5	0.5
165	400	P5	打製石器	チート	24.0	18.0	5.0	1.2
166	探波-2	-	打製石器(未製品)	チート	23.0	22.0	6.0	3.2
167	探波-1	-	スクライバー	黒曜石(姫島)	54.0	30.0	12.0	15.0
168	216	?	?	黒曜石(針先)	38.6	29.8	8.4	11.0
169	395	?	?	メノウ	18.0	29.0	4.0	1.4
-	403	?	?	黒曜石(不明1)	9.8	6.2	2.9	0.1
-	404	?	?	黒曜石(不明1)	8.3	6.8	2.0	0.1
-	405	?	?	黒曜石(島ノ木津屋?)	13.8	9.2	3.2	0.4
-	410	?	?	黒曜石(小明1)	9.2	3.5	1.2	0.0
-	396	?	?	黒曜石(不明1)	22.2	16.4	4.6	1.3
-	美深	-	?	チート	32.9	13.3	4.4	1.9
170	-	V1	素材?	砂利	63	54	4.4	204.8
171	397	P5	V1	砂利	60	89	3.9	307.4
172	492	L4	V1	砂利	123	84	6.5	924.7
173	346	G2	V1	石器	128	56	5.4	426.7
174	375	E2	V1	砂利	107	38	2.6	160.4
175	393	G2	V1	石器	120	90	4.3	638.6

※出土位置の「？」は、出土位置の記載が不明のものをしめす

※器種の「UE」はユーズドブレイカを、「RF」はリッタッヂブレイカをしめす

※石材の「」は出土地をしめし、不明は現在「姫島山系」と呼ばれて講論されているものを指す

※170～175の器種を出土位置は不明である

### 第三章 仕明遺跡（第4次）

#### はじめに

平成16年度・平成17年度に、有明町役場建設課が大字蓬原地内の町道宇都鼻志陽1号線の現道拡幅工事に伴い、周知の埋蔵文化財包蔵地である仕明遺跡（69-66）の範囲内において土木工事を行うことになり、これに対して試掘調査などを実施した成果を報告する。遺跡の詳細については、既刊の報告書を参照されたい。

#### 第1節 調査経過

##### 平成16年度 立会調査

工事が実施された範囲は、仕明遺跡内の北東側にあたり、大久保集落近くにあたる。現況は現道と埋設トラフ（側溝）に畑地であった。工事は歩道整備と雨水用トラフの埋設工事であり、地表面から約130～140cmの深さまで掘削を行っている。

試掘の結果、遺構・遺物は検出されなかつたが、工事箇所が仕明遺跡第1次の調査区に近いことから工事立会を行うこととした。立会調査は9月9日から27日までの間に随時実施している。

立会調査では、第1～3次調査において古墳時代以降の包含層とされた層は、耕地整備等の擾拌により削除されており、遺物の出土はない。遺構も池田降下軽石包含層上面及びアカホヤ降下火山灰層上面において検出に努めたが確認されていない。薩摩火山灰層上面においては柱穴1基が検出されている<sup>※1</sup>。

以上の成果から、立会調査はいずれの時期においても遺構・遺物が希薄な可能性が高い。範囲が河岸段丘のやや舌状に延びた段丘面の中央部にあたることから、段丘縁辺部に比べると生活域などからやや離れた位置となっていた可能性も考えられる。

##### 平成17年度 試掘調査

仕明遺跡南側で工事が実施され、位置は片平集落付近にあたる。現況は現道と埋設トラフ（側溝）



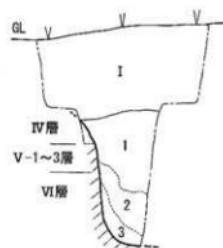
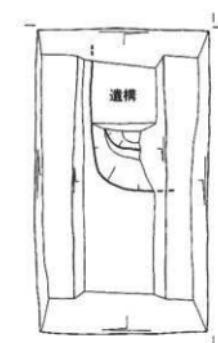
図III.01 仕明遺跡の位置

### 第Ⅲ章 仕明遺跡（第4次）

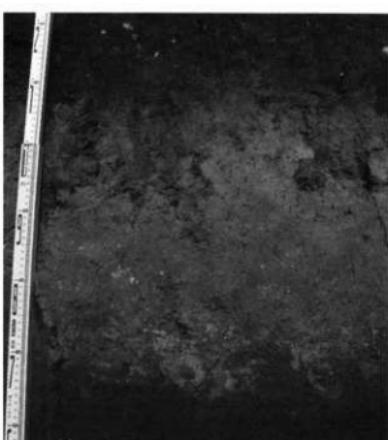


図III.02 仕明4次(2004) 基本層序

図III.03 仕明4次(2005) 3トレンチ 遺構検出状況



写真III.01 調査地(2004)の近景



写真III.02 アカホヤ層堆積状況(2004)

に畠地であった。工事は現道を拡幅して歩道整備を行うことを目的としている。

試掘調査は3ヶ所にトレーナーを設定し掘り下げている。また、それとは別に拡幅に伴う住宅の法面工事範囲において工事立会いを実施している。

結果、3トレーナーにおいて土坑を検出している。土坑は地表面から80cm掘り下げたアカホヤ降下火山灰層上面において検出している。形態は平面形が隅丸方形に近い楕円形で、断面形はやや段をもつた逆台形を呈すると考えられる。平面形はトレーナー外に大きく広がっており、検出した範囲で幅54cm以上×長さ108cm以上×深さ110cmを測る。遺物は出土していない。形状・規模から落とし穴もしくは地下式横穴墓の竖坑の可能性も考えられるが性格は不明である。

他のトレーナー及び立会調査範囲では、遺構・遺物は確認されていない。

トレーナー1～3の範囲は、歩道整備範囲であることから浅い掘削で工事施工が行われ、遺構を守る保護層が確保できることから、そのまま埋め戻して現地保存としている。

まとめにかえて

以上の成果に、第1～3次調査成果を合わせると、H17-3トレーナー土坑は、古墳時代の地下式横穴墓の竖坑<sup>\*2</sup>か縄文時代前期頃のおとし穴状遺構の可能性が考えられる。

遺跡内の土地利用状況については、遺跡北西部は遺構密度が希薄で、中央部から東部に中心が広がる可能性が考えられる。そしてH17-トレーナー3付近は古墳時代に墓域もしくは縄文時代前期に狩場であった可能性がある。

\*1 断ち割り等を行っていないため、確実とはいがたい

\*2 調査中はおとし穴状遺構と考えていたが、試掘終了後に大崎町教育委員会 内村憲和氏に調査中の地下式横穴墓を見学させていただき、内村氏の調査経験をお聞きする機会を得たところ、おとし穴と断定する要素がなく、形態が地下式横穴墓の縱穴部にも類似する可能性があるとの結論に到達している。試掘とはいえども拡張するべきであったと反省する。

参考文献

出口順一朗・中水忍・堂込秀人・横手浩二郎・東徹志 2005 『仕明遺跡（1～3次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）有明町教育委員会



① H17-0トレーナー  
② H17-3トレーナー 近景  
③ H17-3トレーナー 遺構 半裁状況

写真III.03 調査状況（2005）

## 第IV章 既刊報告書の追録

### はじめに

有明町では、2002（平成14）年刊行の『長田遺跡』から本書に至るまで、約4年間で10集の埋蔵文化財発掘調査報告書が刊行されてきた。これは本町の財政規模を考えると対応能力を超えた膨大な量であり、結果として十分な作業が行えないまま報告書刊行を迎えてきている。そこで、ここでは刊行後の収藏整理などにおいて、新たに掲載の必要が生じた分について追録として報告する。

### 第1節 仕明遺跡（出土遺物の報告）

仕明遺跡（69-66）は、蓬原校区の東大久保集落から片平集落にかけて存在しており、その範囲は広い。時期も幅広く、古墳時代の集落跡を中心に、旧石器時代後期から古代・中世・近世までの遺構・遺物が発見されている。このことから、この地域が長期にわたって生活域であったことが考えられ、とくに堅穴住居は古墳時代・古代のものが、掘立柱建物は中世・近世のものが存在する。

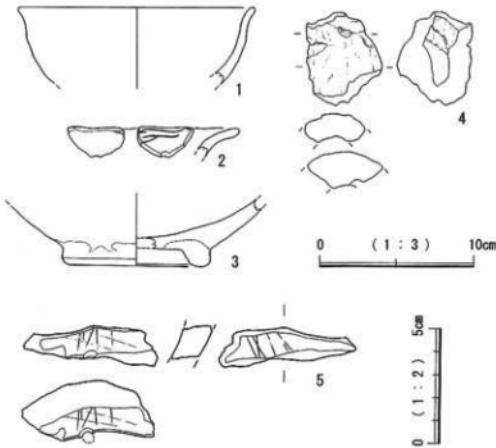
青磁1・2と白磁3は、輸入陶磁器と考えられる。出土位置は北区北端から東区である。

羽口4は羽口先端部であり、外面にガラス化した鉱滓が付着する。出土位置は東区東側付近の確認トレンチ内である。時期は不明であるが、仕明遺跡では古墳時代の堅穴住居内より、鐵製の馬具・刀子など出土し、堅穴住居3では鉱滓も出土していることから、古墳時代のものである可能性も考えられる。

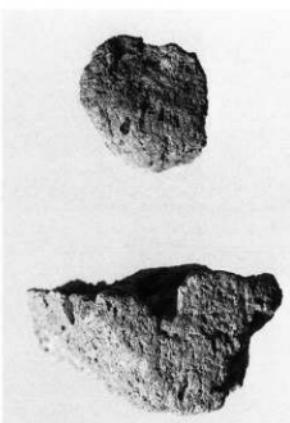
石製品5は滑石製石鍋の二次加工品と考えられ、穿孔を穿った痕が見られる。出土位置は掘立柱建物の集中する北区南半である。

#### 参考文献

出口順一朗・中水忍・堂込秀人・横手清二郎・東徹志 2005 『仕明遺跡（1～3次）』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）  
有明町教育委員会



図IV.01 仕明遺跡 出土遺物



写真IV.01 鉄分付着の滑石製品

## 第2節 長田遺跡（鉄製刀子の分析）

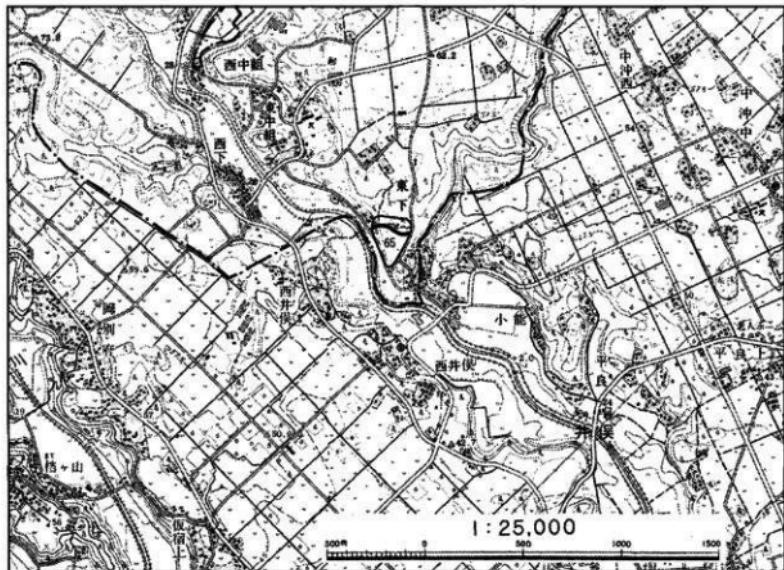
長田遺跡（69-65）は、原田校区の東下集落付近にあり、周囲は古墳が存在し、古墳時代・弥生時代の遺物が多く出土している地城である。平成11年度に発掘調査を行い、平成14年度に報告書を刊行後、鉄器の保存処理・分析を委託する機会を得たので、その成果について報告する。鉄器の保存処理・分析は、財団法人元興寺文化財研究所に委託しており、処理・分析を井上美知子が、遺物観察と実測・トレースを橋本英将が行っている。

### 1. 長田遺跡出土刀子について

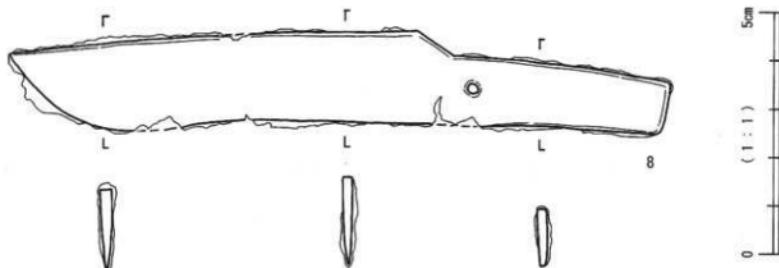
取上げ番号・出土位置については、調査を担当した出口順一郎氏に確認したところ、2号竪穴住居の出土遺物の鉄製品33として報告書掲載したものである。当時は鎧兜もしくは刀子として報告している。法量は長さ13.6cm×幅1.9cm×厚さ0.2cm、重さ15.2gを測る。（東）

刀子は全体的に内反り気味である。一部欠損があるが、刃部と茎部のラインから刃側の闊は無かったものと考えられる。背後のみ闊をもつ刀子は古墳時代後期以降に一般的に見られるタイプである。目釘穴はX線撮影の観察結果より位置が不自然であることから、注意を要する。刀身の一部には有機物痕跡があり、鞘の一部である可能性が考えられる。（橋本）

参考文献 出口順一郎・堂込秀人 2003 「長田遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 有明町教育委員会



図IV.02 長田遺跡の位置



図IV.03 長田遺跡 出土刀子



写真IV.02 長田遺跡 出土刀子のレントゲン写真

#### 1. 長田遺跡出土刀子の分析について

財団法人 元興寺文化財研究所

長田遺跡出土刀子の分析について、以下のとおり報告します。  
調査対象

No.2 刀子の表面 (写真2)



写真IV.03 刀子の分析箇所

## 内容

ケイ光X線分析（以下、XRF）装置で、比較的サビの少ない箇所の元素分析を行った。

## 使用機器及び測定条件

エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーアンスツルメンツ（株）製 SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ1.8mm、管電圧45kV

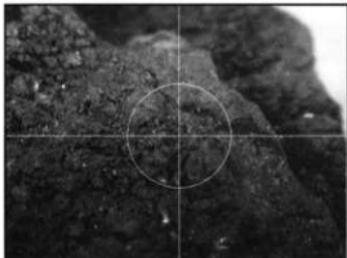
## 結果

XRFの結果、No.2刀子の表面では主な元素として鉄(Fe)を検出した（図2）。

## [測定条件]

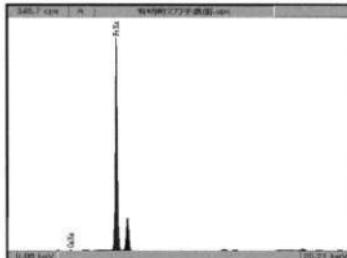
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	216
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16
コメント	03189 有明町No.2 刀子表面

[試料像]



視野 : [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



## [結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	R O I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	3.934	3.54 – 3.84
26	Fe	鉄	K α	2587.759	6.23 – 6.57

図IV.04 刀子表面のXRFスペクトル

## 第3節 楠原遺跡（出土石器の報告）

楠原遺跡（69 - 116）は、蓬原校区の西中野集落付近にある。町指定である蓬原城・金丸城は遺跡の存在する台地の延長上に存在している。平成9年度に発掘され、平成14年度に屋部当遺跡の調査成果と共に報告されている。今回は未掲載であった出土鉱滓・石器について報告する。

詳しい分布の傾向などは報告書に譲るが、出土位置は図にて示している。出土層はおもにV層であり、縄文時代後期から古墳時代の遺物の包含層と報告されている。

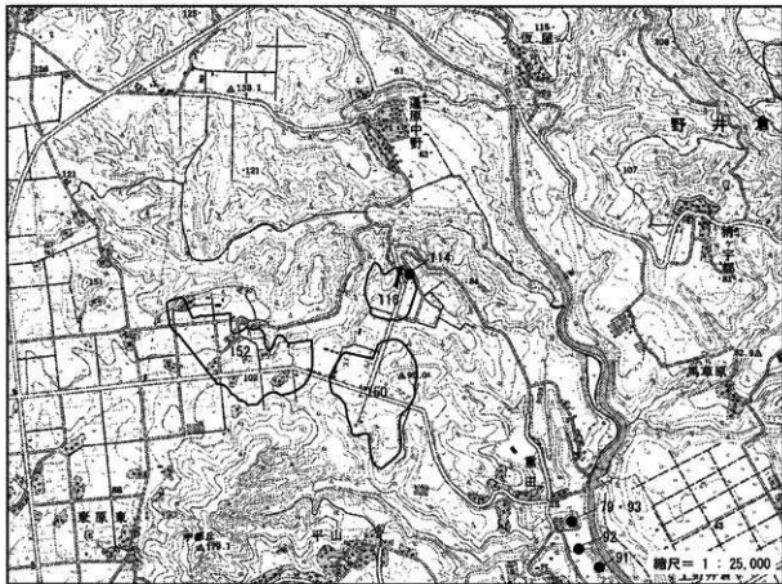
鉱滓は5点あり、3点は径3~5cm大と小さい。鉱滓9・10は重量が他に比べて重く、鉛と考えられる赤色化がみられることから鉄滓と考えられる。磁力にも反応が見られる<sup>※1</sup>。鉱滓9の法量は長さ10.3cm×幅8.0cm×厚さ7.1cm、重さ7253gを計る。鉱滓10の法量は長さ13.2cm×幅9.6cm×厚さ3.1cm、重さ409.2gを計る。

石器は打製石庖丁1点、石鎌1点、打製石斧2点、磨製石斧3点、石皿2点、その他1点の10点を数える。打製石庖丁12は、対になる紐掛部を打ち欠いて作り、刃部の反対側には刃潰しを行っている。石器13は磨製石斧などの破損剥片を研磨して刃部と考えられる形状に整える。刃部には使用痕が見られる。

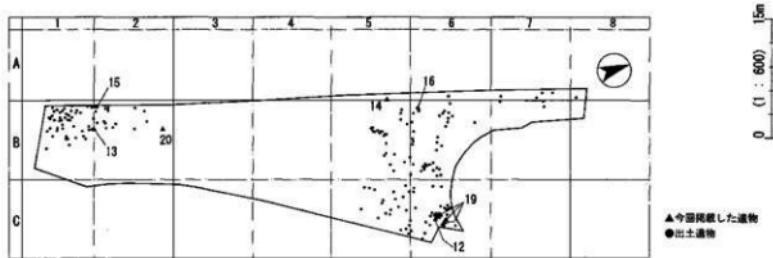
※1 学校用教材用磁石で実施している

## 参考文献

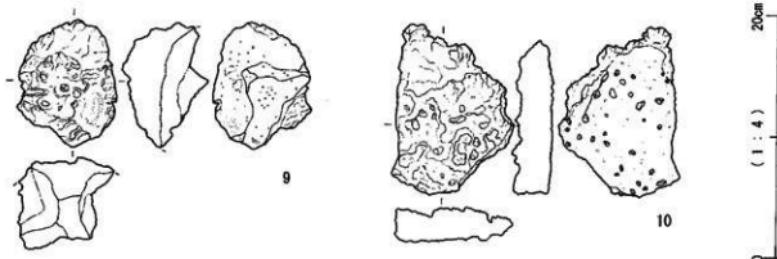
出口順一朗・黒川忠広 2003 『屋別当遺跡、楠原遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）有明町教育委員会



図IV.05 楠原遺跡の位置



図IV.06 楠原遺跡 遺物分布

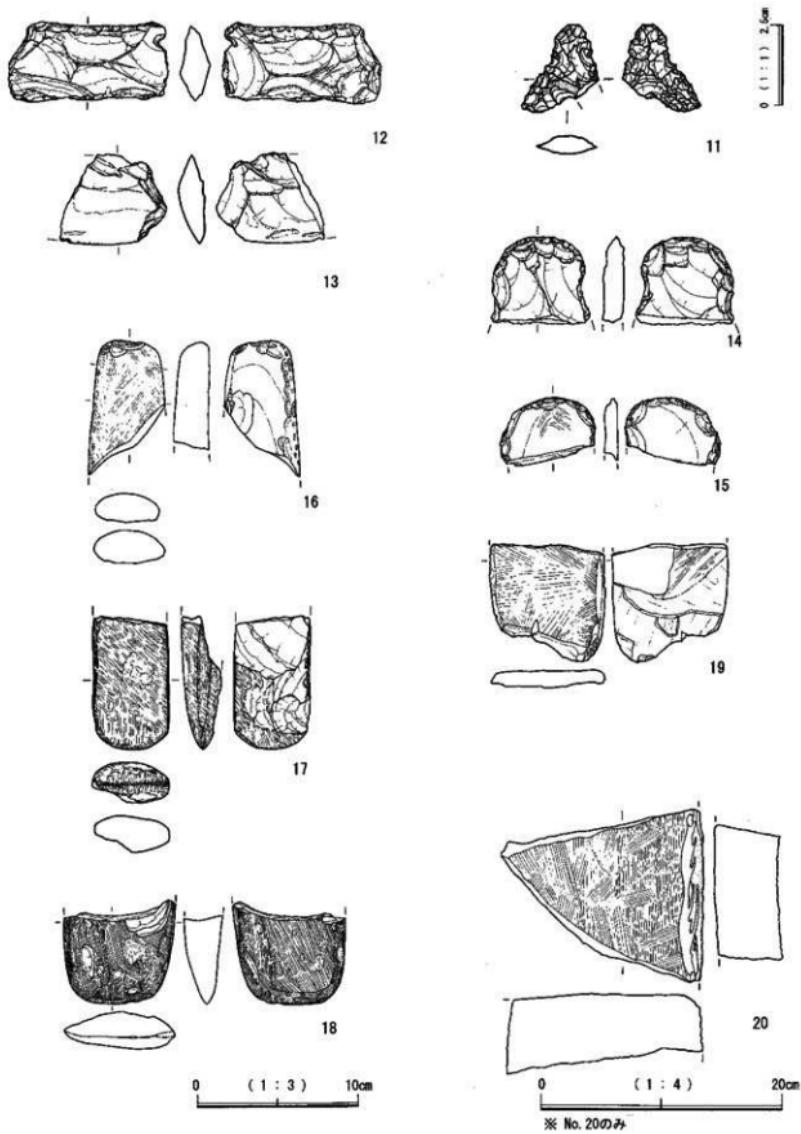


図IV.07 楠原遺跡 出土鉱滓

表IV.01 楠原遺跡 出土石器の計測表

番号	出土位置	地区	層位	器種	石材	法線(数大抜で計測、単位はgとmm)				備考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
11	6	67	V	打製石器	白色チャート	19	11	0.6	0.6	
12	103	表層	II	打製石器?	基板岩	50	9.9	1.8	101.4	
13	51	B	IV	打製石器?	愛山岩?	57	6.6	1.7	69.9	
14	166	P5	V	打製石器	頁岩	5.5	6.0	1.6	37.2	
15	46	B2	V	打製石器	頁岩	33	5.8	0.8	31.3	
16	172	B6	V	打製石器	愛山岩?	7.3	4.4	2.1	106.9	
17		V		磨製石器	硬質頁岩	8.3	4.7	2.5	114.8	
18	一五	AB3		磨製石器	硬質頁岩	5.4	6.8	2.3	108.0	
19	116,117,197	C6	V	石器	硬質砂岩	6.9	7.0	1.0	71.4	
20	65	B2	V	石器	硬質砂岩	14.3	16.6	6.0	1744.4	

※出土位置の「?」は、出土位置の記録が不明のものをしめす



図IV.08 楠原遺跡 出土石器

## 第V章 町収蔵品の報告<sup>\*1</sup>

### 第1節 高牧城跡遺跡

倉庫Bに封筒袋に入れた状態で保管されていた。封筒には「高牧城跡」と表書きがあった。収蔵に至る経緯は不明であるが、有明町誌の文中写真に類似のものが一部見られる。

高牧城跡遺跡(69-81)は周知の遺跡の範囲にあたる。菱田川支流の大鳥川流域にあり、立地は独立した舌状の台地で、周囲より高くなる。遺跡名は中世や近代の西南戦争時に城・砦があったという伝承に由来し、現在も一部に堀跡が残ると言われる。隣接して縄文時代早期の包含層のみが遺存する高牧A遺跡(69-10)が存在する。

#### 表探遺物

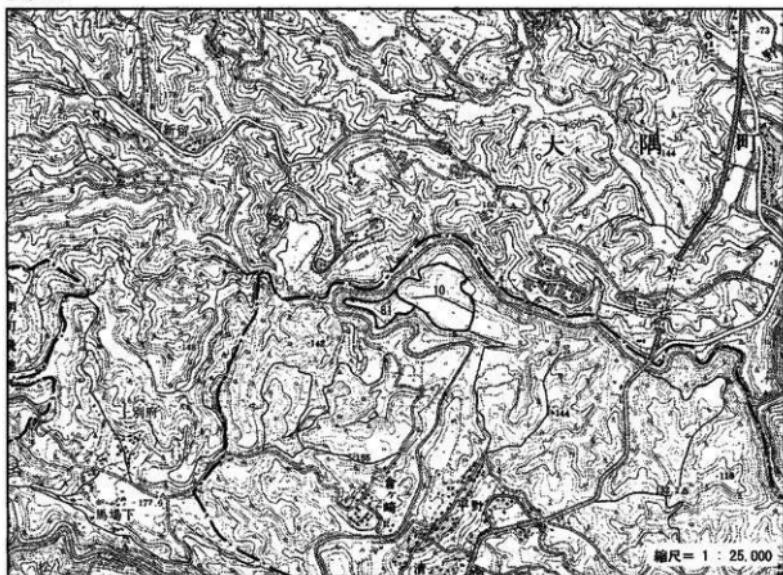
遺物は土器類23点、石器類2点がある。時期は土器の特徴からおもに縄文時代後期と考えられる。

土器1~12は、口縁部や口唇部にキザミ・刺突文をもち、外面を貝殻条痕後にナデを施して整える。文様は幅広の太い沈線文が並行したり、幾何学的に描かれたりする。形式は、綾式と呼ばれるものに含まれると考えられるが、口縁部4・7などは不明である。

口縁部4には、口唇部から口縁部にかけて横位のキザミをもった縱長の浮文が、2つ並行して貼り付けられる。胸部10・11は太い沈線文の間に貝殻腹縁の刺突文が施される。胸部12は短沈線文が同一方向に連続して施文される。

口縁部13は、口唇部と口縁端部に指を施文原体にしたキザミが施される。外面は強い横の指ナデにより、境が突帯状を呈する。形式は不明である。

口縁部14~胸部16は、口縁部外面に断面形が三角状に肥厚させた文様帶をもち、その上下に貝殻腹縁の刺突文などが施される。形式は、市来式と呼ばれるものに含まれると考えられる。底部18・胸部19は胎土が酷似しており、同一個体の可能性が考えられる。また、胎土が比較的14~16に類似する。



図V.01 高牧城跡遺跡の位置

表V.01 高牧城跡 銅器の観察表

登録番号	品目	形状	内面	外縁	調査・文様						説明	
					銘文	内面	外縁	内面	外縁	内面	外縁	
V-1-3	口縁	にいの内縁	口縁部-縁の長条巻文後に横のナデ、唇部近寄る	口縁部-縁のキザミ	0.5	○	△	△	△	△	△	内外縁の一部が褐色化
V-2-4	口縁	STY54	口縁部-縁の長条巻文後、横のナデ	口縁部-縁の長条巻文後に横のナデ、太い化文を多角	0.5	○	△	△	△	△	△	外縁が黒色化
V-3-2	口縁	STY54	口縁部-縁の長条巻文後、横のナデ	口縁部-縁の長条巻文後に横のナデ、太い化文を多角	1	○	△	△	△	△	△	外縁が黒色化
V-4-1	口縁	STY54	口縁部-縁の長条巻文後、横のナデ	口縁部-縁の長条巻文後に横のナデ、太い化文を多角	1	△	○	△	△	△	△	口縁部から口縁間にかけて、奥縁のナデをもつた複数の化文
V-5-11	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	2	○	△	△	△	△	△	内縁が黒色化
V-6-13	瓶	STY54	口縁部-縁の長条巻文後、横のナデ	口縁部-縁の長条巻文後に横のナデ、太い化文を多角	2	○	△	△	△	△	△	内縁が黒色化
V-7-9	口縁	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	△	△	△	△	△	外縁が黒化する
V-8-17	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	△	○	△	△	△	△	内縁がわざかに黒化
V-9-12	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	△	○	△	△	△	△	内縁がわざかに黒化
V-10-19	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	△	○	△	△	△	△	内縁がやや黒色化、外縁が黒化
V-11-18	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	△	△	△	△	△	内縁がわざかに黒化
V-12-16	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	○	○	○	○	○	外縁が黒化
V-13-5	口縁	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	△	○	△	△	△	△	- 外縁がやや黒色化
V-14-7	口縁	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	△	△	△	△	△	△	外縁が黒化する
V-15-6	口縁	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	1	○	○	○	○	○	○	内縁がやや黒化
V-16-20	口縁	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	○	○	○	○	○	外縁がやや黒化
V-17-8	口縁	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	2	○	○	△	△	△	△	内縁がやや黒化
V-18-10	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	○	△	△	△	△	内縁がやや黒化
V-19-11	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	○	△	△	△	△	内縁が黒化
V-20-15	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	1	○	○	○	○	○	○	内縁がわざかに黒化
V-21-22	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	0.5	○	○	○	○	○	○	外縁がわざかに黒化
V-22-23	瓶	STY54	口縁部-縁のナデ	口縁部-縁のナデ	4	○	○	○	○	○	○	外縁が半分に黒化

口縁部 17 は、外反する口縁に、口唇部に斜位のキザミを、外面に斜位の貝殻縫線を施される。形式は縄文時代早期前葉の石坂式と考えられる。

胴部 20 は外面に組織痕と呼ばれる圧痕が見られ、内面は黒色化し丁寧に磨かれる。縄文時代晩期のものであろうか。

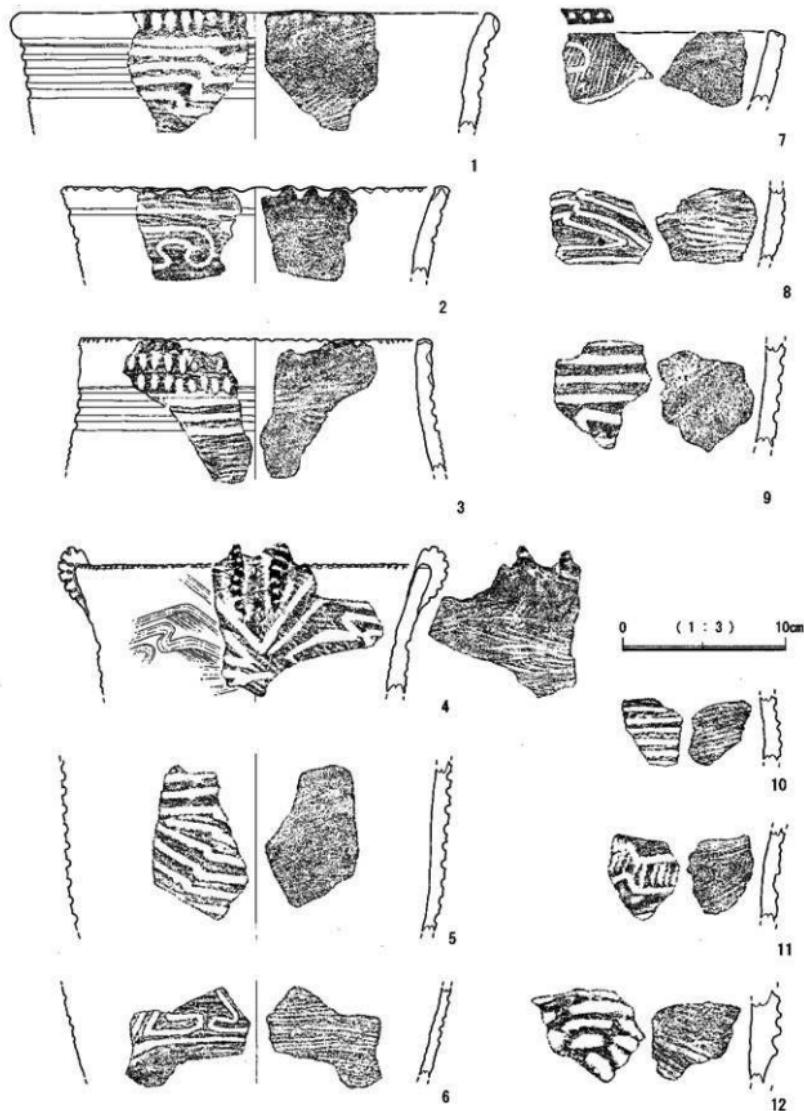
胴部 21 は、内面に同心円状の当具痕と外面に格子目状のタタキ目とをもつ、中世須恵器もしくは陶器であろうか。胴部 22 は器蓋が厚手で粗製である。時期・形式とともに不明である。

胴部 23 の器面は非常に摩滅しており、河川などでローリングを受けたと考えられる。形式は不明であるが、古墳時代の中津式頸の器形に近いと思われる。

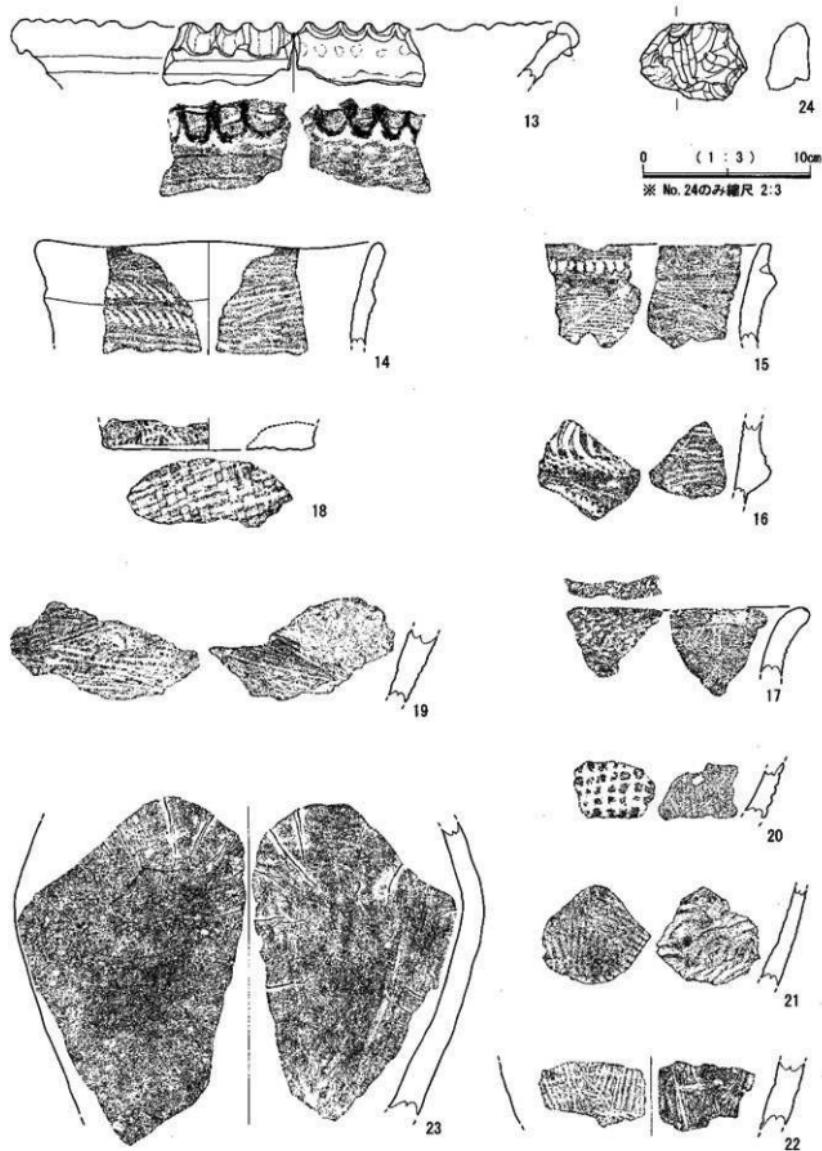
石器 24 は残核であろうか、打点と原礎面が見られる。石材は不純物の多い竜ヶ水産の黒曜石である。法量は長さ 23cm × 3.2cm × 1.3cm、重さ 8.4g を測る。

※1 ここで紹介する遺物は、今年度に行われた収蔵資料の整理作業に伴い確認された資料である。遺物は役場裏の 2 棟の倉庫に分けられて保管されており、担当者交代の過程で保管状況が不明となっていた。倉庫 A はおもにごみ分別場・資材置き場に利用されている倉庫 A (仮称) とおもに公用車庫に利用している倉庫 B (仮称) である。倉庫 A では一階間に複数のダンボール箱に入れて保管してあり、白壁により箱・名札が汚い荒らされた状態であった。そのため遺物の詳細が不明であるが、わざかに残った名札には「山ノ口」があり、その他のにも遺物に直接記入したものなどが見られた。これらは状況からおもに伊崎田の山ノ口遺跡の遺物と思われる。倉庫 A 内の「難藏文化財貯庫 (発掘調査用の資材置場)」内において「いせんば遺跡」の資料を確認している。倉庫 B では中2階のスペースに複数のダンボール箱に保管されており、虫食いなど一部を除き見られなかった。遺物の名札などには「高牧城跡」「水頭」などの記入が見られた。

山ノ口遺跡については、鹿児島県教育委員会が過去に実施した分布調査時に、耕地改良事業中の現場より、採取された記録があり、その一部が町に収蔵されていたことが確認されている。鹿児島県立埋蔵文化財センターには、上記以外にパケージ約 25 箱分が収蔵されている。



図V.02 高牧城跡遺跡 表採遺物（1）



図V.03 高牧城跡遺跡 表探遺物（2）

## 第2節 いせんぼ遺跡

伊崎田校区黒葛集落の川添純弘氏より寄贈された遺物である<sup>#1</sup>。川添氏によれば、遺物は茶木作付けのため畑地を整地中に、アカホヤ降下火山灰層より上の黒色土層中より出土したと言うことである。現況は茶畠となっている。<sup>#2</sup>

いせんぼ遺跡(69-16)は、菱田川の上流域にあり、標高約174mの台地縁辺部に立地する。旧地形は不明である<sup>#3</sup>。周囲はシラス台地の侵食が激しく開析した谷が多く見られ、北側の谷には湧水を利用した水田が広がる。台地面には凹凸が多く見られる。

### 表探遺物

遺物は鉱滓類10点、土器類31点、石器類48点がある。時期は土器の特徴からおもに縄文時代後期と考えられる。鉱滓については時期が不明である。

鉱滓は、いずれにも赤色化した部分がある。とくに図化した25・26と註記番号2・3の計4点は磁石に反応があり、鉄滓と考えられる。25は楕形滓で、上面に流動した痕が見られる。26は裏面に細長い繊維の痕跡が見られる。

土器27~31は、外面を貝殻条痕後にナデを施して整え、幅広の太い沈線文を並行させる。形式は綾式に含まれると考えられる。口縁部27・胴部29は、太い沈線文の間に貝殻腹縁の刺突文が施される。

土製品32は、土器片を再加工した土製円盤と考えられ、縁を打ち欠いて円形に整える。

口縁部33は、口縁部がほぼ直角に外に折れ、上を向いた口縁端部に2条の沈線文と円形刺突の列が施される。口縁部34は内外面にミガキを施し、口唇部に縄文を施す。33・34の形式は不明であるが、縄文時代後期の範囲内と思われる。

底部35~39には、底面が網代網の圧痕の35・37、貝殻条痕の39などがある。口縁部40は内外面を貝殻条痕で整え、口縁部が波状の器形を呈する。形式は不明である。口縁部41は、内外面に密のミガキを施し、器面が黒色化する。



図V.04 いせんぼ遺跡・堂ノ上地点の位置

石器は磨製石斧1点、打製石斧1点、打欠石錐1点、凹石1点、磨・敲石類26点、石皿16点がある。注目する点としては、磨・敲石・石皿の間にセット関係が存在する可能性がある点が挙げられる。それは磨・敲石に、磨面が平らで断面形の角がやや尖る49・51と、磨面の縁がさらに磨面を形成して断面形がやや丸みを帯びる47・52・62・67があり、前者が石皿の浅い凹みしかもたない82・83・85に、後者がそれ以外の深い凹みをもつものに対応する可能性が考えられる。

#### いせんぼ遺跡と高牧城跡遺跡の特徴

いせんぼ遺跡・高牧城跡遺跡は、共に縄文時代後期を主体とした遺跡であるが、町域の北部域とその隣接地域にあたる範囲に所在している。これを踏まえて、縄文時代を通じての町内遺跡の分布動態を見ると、早期は町域全体に分布するのに対して、前期から晩期までは北部域に集中し、晩期終末（弥生時代早期）になると平坦なシラス台地と河川下流域の多い町南部域に多くなる傾向が分かる。この理由としては当時の環境などが大きく起因しているのであろうが、当町域で見た場合に、早期末のアカホヤ降下火山灰に伴う火砕流分布との関係が注目される。つまり、この火砕流が確認されたのは、町南部域の牧遺跡（69-105）<sup>※4</sup>であり、その分布は串間市や志布志町安楽の河岸段丘上<sup>※5</sup>でも確認されており、志布志湾岸に集中している可能性が高いのである。そうであれば、町北部域は、志布志湾から比較的遠く、地形も山間部の様相を呈しているため、火砕流の進路が妨げられた可能性が考えられる。火砕流の到達範囲が前期以降の遺跡分布に影響を与えた可能性がある。今後、当町を含め、火砕流到達限界地域での確認がまたれる。

※1 牧原遺跡（東ほか2003）の調査中に川添氏と話す機会があり、出土状況などについてご教授いただいた。その時、磨石・敲石数点を追加寄贈していただいている。寄贈遺物は、当初、所在不明であったが、検索の結果、倉庫Aの通称「埋蔵文化財倉庫」奥に、プラッタック製の箱4箱に入れた状態で収蔵してあるのを確認した。この時に名札などは見られなかつたが、以前の文化財担当者の証言と遺物の内容が一致したことからいせんぼ遺跡の遺物と判断している。

※2 追加寄贈の遺物の一品を既刊行の報告書（東ほか2003）にて紹介している。

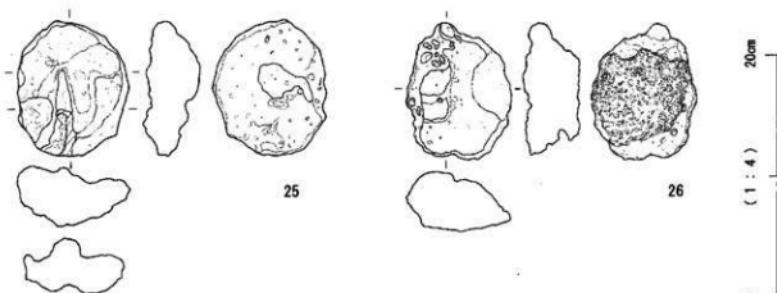
※3 周辺はすでに農業構造改善による耕地面積縮小であり、旧地形は失われている。

※4 出口ほか2005『牧遺跡第1・2次』有明町教育委員会を参照。

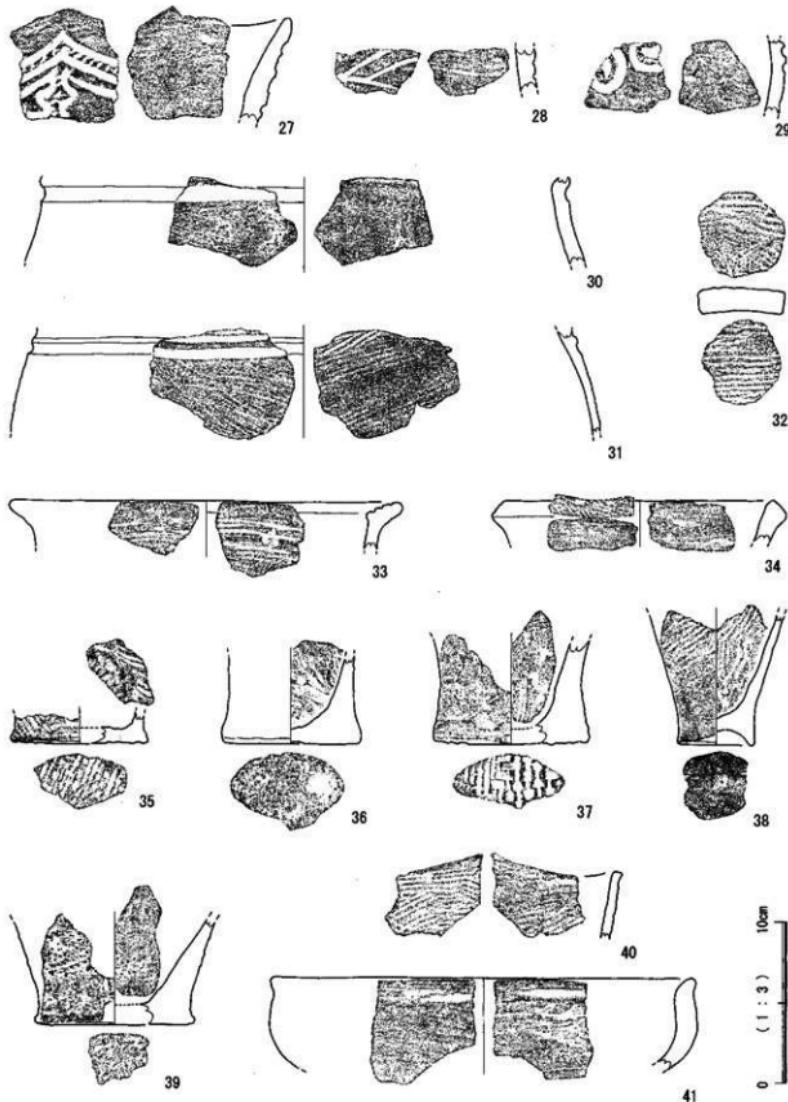
※5 志布志町安楽の旧鉄道道路脇の土木業者の廃土置場（河岸段丘の末端近く）にて、筆者が内眼観察にて確認している。

表V.02 いせんぼ遺跡 鉱滓の計測表

序号	測定項目	計量（最大幅で計測、単位はmm±g）			備考
		幅①	幅②	幅③	
J-25		109	92	43	207.27
G5		109	93	46	277.28 斜形底。底面に凹凸した痕跡
-	底1	89	72	66	470.82 底面に凹凸した痕跡あり
-	底2	76	59	52	285.72 底面に凹凸した痕跡あり
-	底3	68	53	32	362.44 底面に凹凸した痕跡あり
-	底4	58	50	37	329.04 底面に凹凸した痕跡あり
-	底5	52	49	30	382.90 底面に凹凸した痕跡あり
-	底6	48	38	32	386.61 底面に凹凸した痕跡あり
-	底7	46	39	34	674.43 底面に凹凸した痕跡あり
-	底8	40	34	29	387.76 底面に凹凸した痕跡あり



図V.05 いせんぼ遺跡 表探遺物（1）



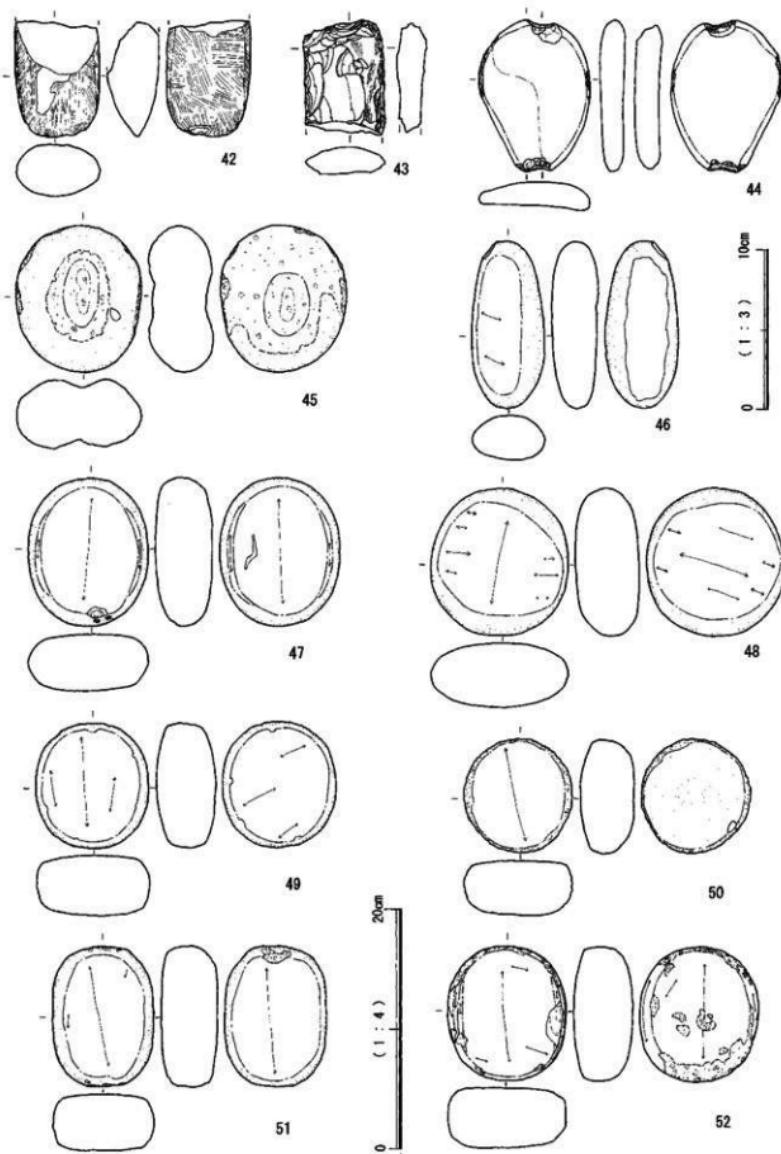
図V.06 いせんぼ遺跡 表探遺物 (2)

表V.03 いせんぼ遺跡 土器の観察表

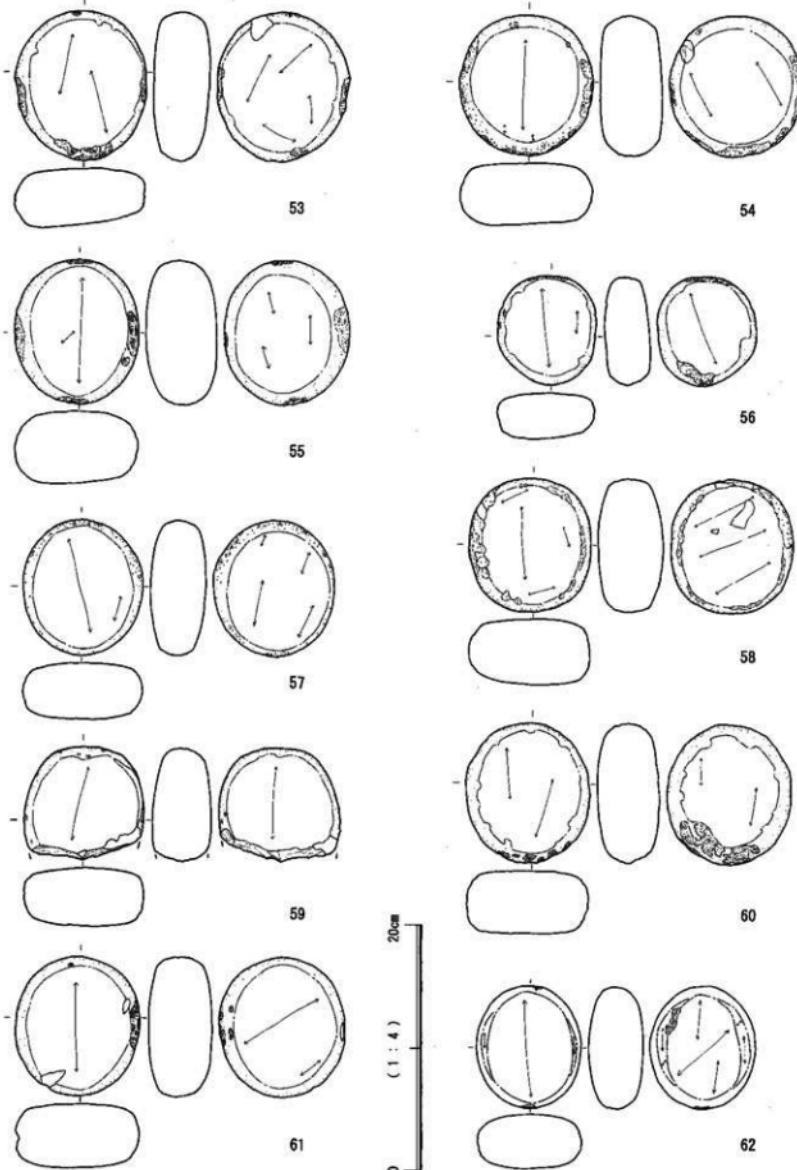
番号	地名	調査・文様					出土や他の発見物 (cm)	参考
		内面	外面	内面	外面	内面		
27 15 磁	二ノ井村 10736-3	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面がわずかに黒化
28 15 磁	二ノ井村 10736-3	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面がわずかに黒化
29 17 磁	二ノ井村 10736-4	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面がわずかに黒化
30 14 磁	二ノ井村 10736-1	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面がわずかに黒化
31 13 磁	二ノ井村 10736-1	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
32 12 磁	二ノ井村 10736-1	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
33 4 陶	二ノ井村 10736-1	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
34 1 陶	二ノ井村 10736-1	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
35 9 陶	二ノ井村 10736-1	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
36 7 陶	二ノ井村 10736-4	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
37 6 陶	二ノ井村 10736-2	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
38 5 陶	二ノ井村 10736-2	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	縞のナデ	○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
39 8 陶	二ノ井村 10736-4	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
40 2 陶	二ノ井村 10736-1	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着
41 3 陶	二ノ井村 10736-4	縞のナデ					○ ○ ○ ○ ○	内面が黒化し、炭化物が付着

表V.04 いせんぼ遺跡 石器の計測表

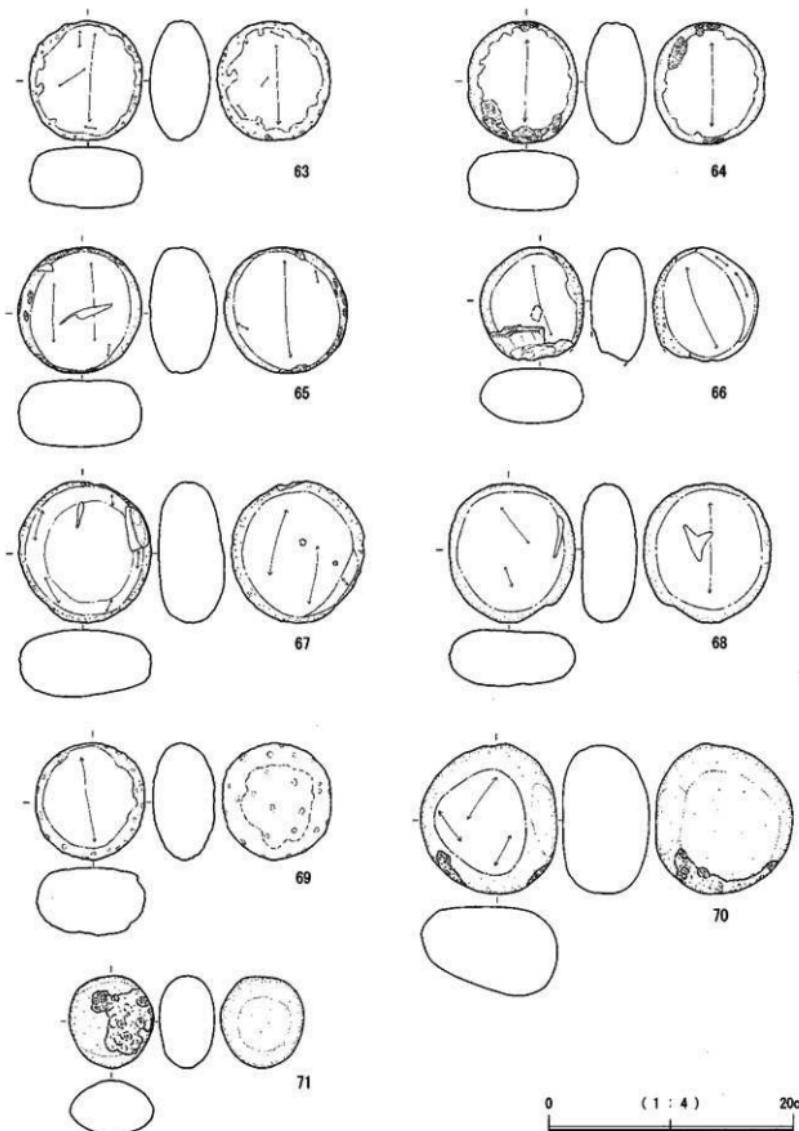
番号	器種	石材	計量(最大値で計測、単位はmmとg、石皿についてはkg)					番号	器種	石材	計量(最大値で計測、単位はmmとg、石皿についてはkg)				
			長さ	幅	厚さ	重さ	報告				長さ	幅	厚さ	重さ	報告
42 24	磨製石斧	堆積岩?	96	70	43	4187	66	42	磨石・敲石	砂岩	92	85	45	4763	
43 26	打製石斧	黄岩	92	66	23	2293	67	40	磨石・敲石	*	116	109	54	9665	
44 25	石錐	砂岩	95	69	15	1486	68	39	磨石・敲石	*	115	103	45	8090	
45 23	凹石	*	123	105	45	1061	69	30	磨石・敲石	花崗岩	97	90	51	6722	
46 43	磨石 (棒状)	*	140	61	37	4798	70	60	磨石・敲石	砂岩	124	111	70	14419	
47 20	磨石	硬質砂岩	124	101	47	9157	71	61	磨石・敲石	*	75	68	44	3159	
48 22	磨石	堆積岩?	124	114	53	11667	72	45	石皿	*	366	339	81	125	
49 28	磨石	花崗岩	105	95	50	8366	73	48	石皿	凝灰岩	300	250	115	100	
50 38	磨石・敲石	硬質砂岩	95	90	45	5650	74	44	石皿	花崗岩	273	352	110	160	
51 17	磨石・敲石	花崗岩	117	93	47	8422	75	47	石皿	*	217	223	100	70	
52 18	磨石・敲石	砂岩	112	98	49	8870	76	59	石皿	*	226	168	93	60	
53 29	磨石・敲石	花崗岩	122	107	46	9327	77	51	石皿	*	188	244	113	79	
54 35	磨石・敲石	砂岩	115	109	49	9753	78	52	石皿	*	195	160	85	35	
55 33	磨石・敲石	*	118	101	58	10340	79	53	石皿	*	219	226	93	55	
56 32	磨石・敲石	花崗岩	89	80	37	4228	80	57	石皿	砂岩	227	202	98	65	
57 36	磨石・敲石	砂岩	111	98	45	7094	81	58	石皿	花崗岩	255	159	75	45	
58 21	磨石・敲石	*	109	99	53	8696	82	46	石皿	砂岩	322	243	98	130	
59 41	磨石・敲石	*	93	98	48	6709	83	54	石皿	*	223	255	105	105	
60 27	磨石・敲石	花崗岩	114	100	50	9565	84	59	石皿	凝灰岩	245	164	82	35	
61 34	磨石・敲石	砂岩	114	102	52	8015	85	49	石皿	花崗岩	166	233	68	30	
62 37	磨石・敲石	硬質砂岩	94	85	44	5429	86	56	石皿	*	115	146	81	20	
63 16	磨石・敲石	花崗岩	99	93	50	7049	87	55	石皿	凝灰岩	158	193	82	35	
64 31	磨石・敲石	*	101	90	49	6888									
65 19	磨石・敲石	砂岩	104	101	55	8604									



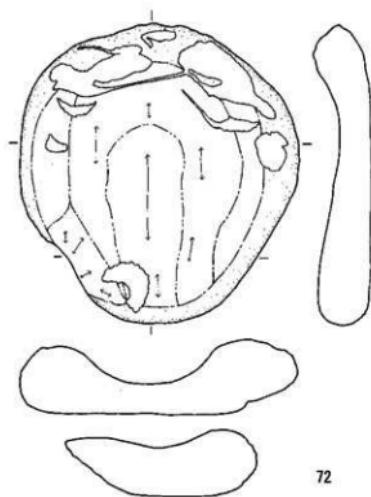
図V.07 いせんぼ遺跡 麦採遺物（3）



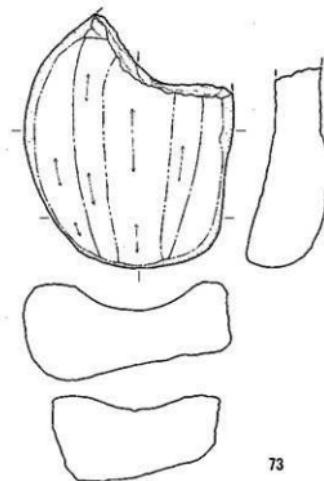
図V.08 いせんぼ遺跡 表探遺物 (4)



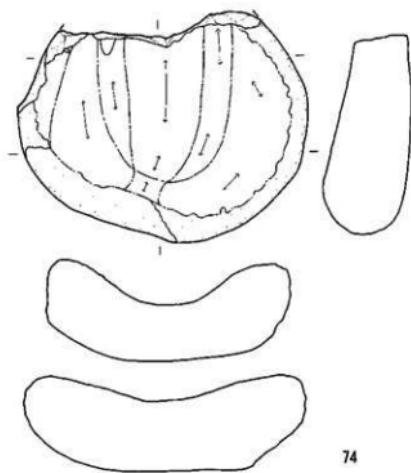
図V.09 いせんば遺跡 表探遺物(5)



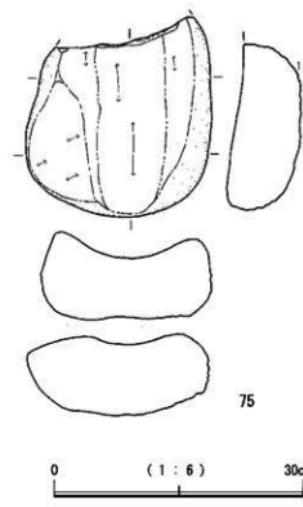
72



73



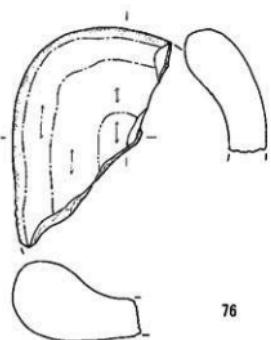
74



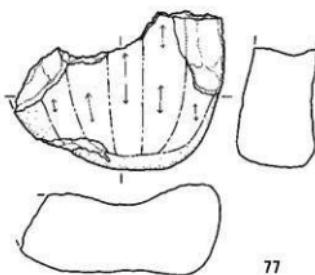
75

0 (1 : 6) 30cm

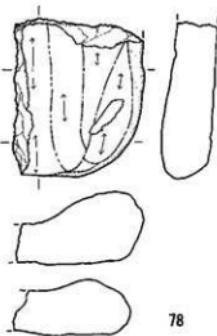
図V.10 いせんぼ遺跡 表採遺物 (6)



76

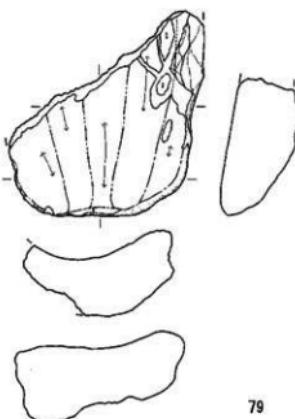


77

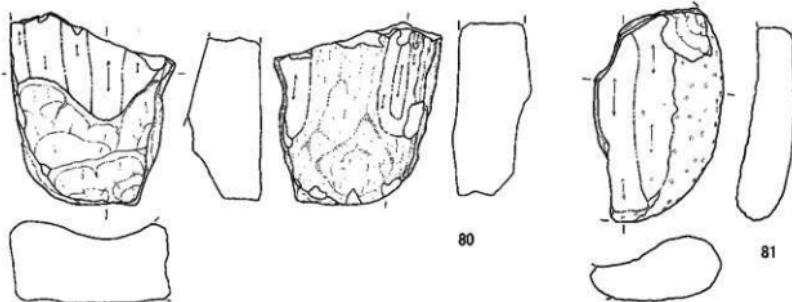


78

30cm  
(1 : 6)



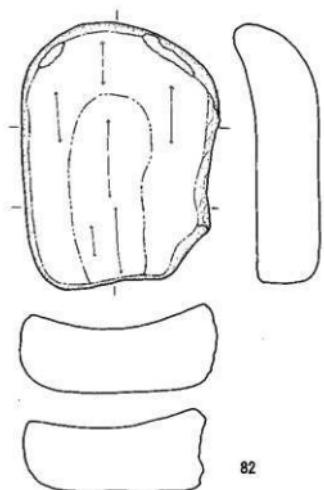
79



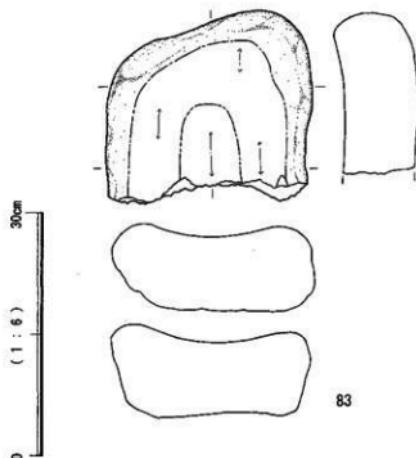
80

81

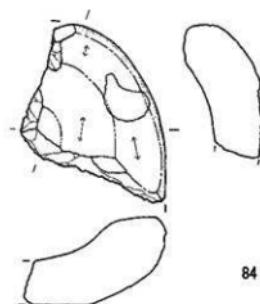
図V.11 いせんぼ遺跡 表採遺物 (7)



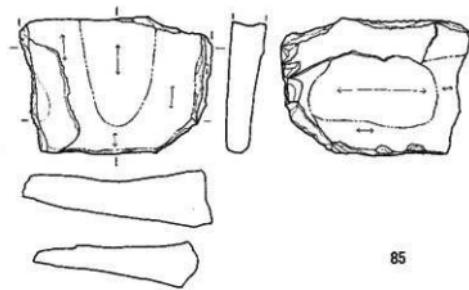
82



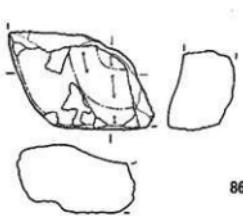
83



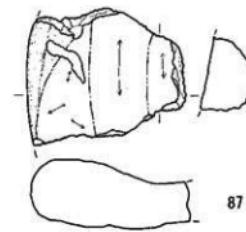
84



85



86



87

図V.12 いせんぼ遺跡 表採遺物 (8)

### 第3節 堂ノ上地点の表探資料

大型打製石斧 6 点が倉庫 B にダンボール箱に入れた状態で保管されていた。収蔵にいたる経緯などは不明で、名札はなく、遺物に直接記入が見られ、伊崎田校区牛ヶ追集落付近の「堂ノ上」と呼ばれる範囲からおもに出土したことが分かる。採取地点は、周知の遺跡範囲外の可能性が考えられ、今後、現地確認などを経て遺跡として登録する必要があると考えられる。

遺物を観察するかぎり、使用に伴う剥離が少なく、99～101 などは薄くて実用的とは言いがたい。出土状況が不明であるが、一括出土しているのであれば祭祀に伴う埋納の可能性も考えられる。また、96～98 は使用痕跡が一部に見られて実用的であり、大型打製石斧は単に製作当初の原型を止めただけとの考え方もある。当町を含めた大隅地域の菱田川流域では、大型打製石斧の出土例や打製石斧の一括出土例などが多い傾向がある<sup>※1</sup> ことと合わせて、今後の検討が必要である。（東）

#### 表探遺物

大型打製石斧 6 点の石材はホルンフェルスで、隣接する志布志町に所在の前川・安楽川上流域に見られるホルンフェルスに類似している。96だけは風化面の色調が黄褐色であるが、原礫の個体差によるものと考えられる。97～101 は接合こそしないものの、長さが 20cm 弱と共通性があることから、同じ原礫から剥ぎとられた可能性がある。ただし、99 は一部が欠損する。

形態は、96 が長さ 20cm を超える大型品であり、長さ 20cm 以下の石斧 2～6 との間に差がある。また、素材についても 97～101 が横剥片を使用しているのに対して、96 は原礫面を残しており、その形状から礫素材である可能性が考えられる。この素材差が両者の厚さや形態差に反映しているものと考えられる。（和田）

法量は以下のとおりである。

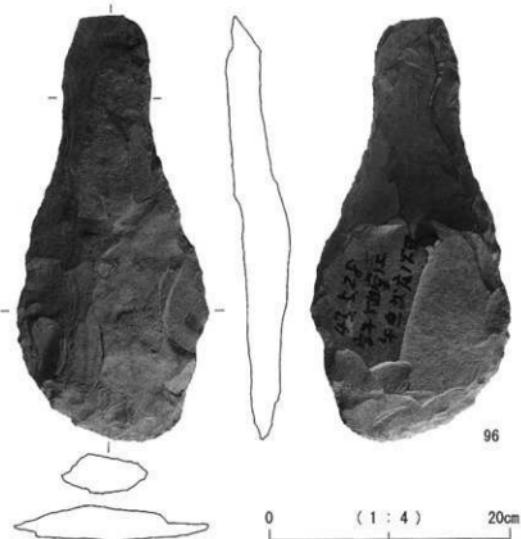
96 は長さ 34.6 cm × 幅 16.1 cm × 厚さ 3.9 cm、重さ 1859.3g を測る。97 は長さ 27.2 cm × 幅 13.5 cm × 厚さ 3.1 cm、重さ 1209.1g を測る。

98 は長さ 22.7 cm × 幅 14.1 cm × 厚さ 2.1 cm、重さ 808.6g を測る。

99 は長さ 20.2 cm × 幅 12.6 cm × 厚さ 0.9 cm、重さ 298.3g を測る。

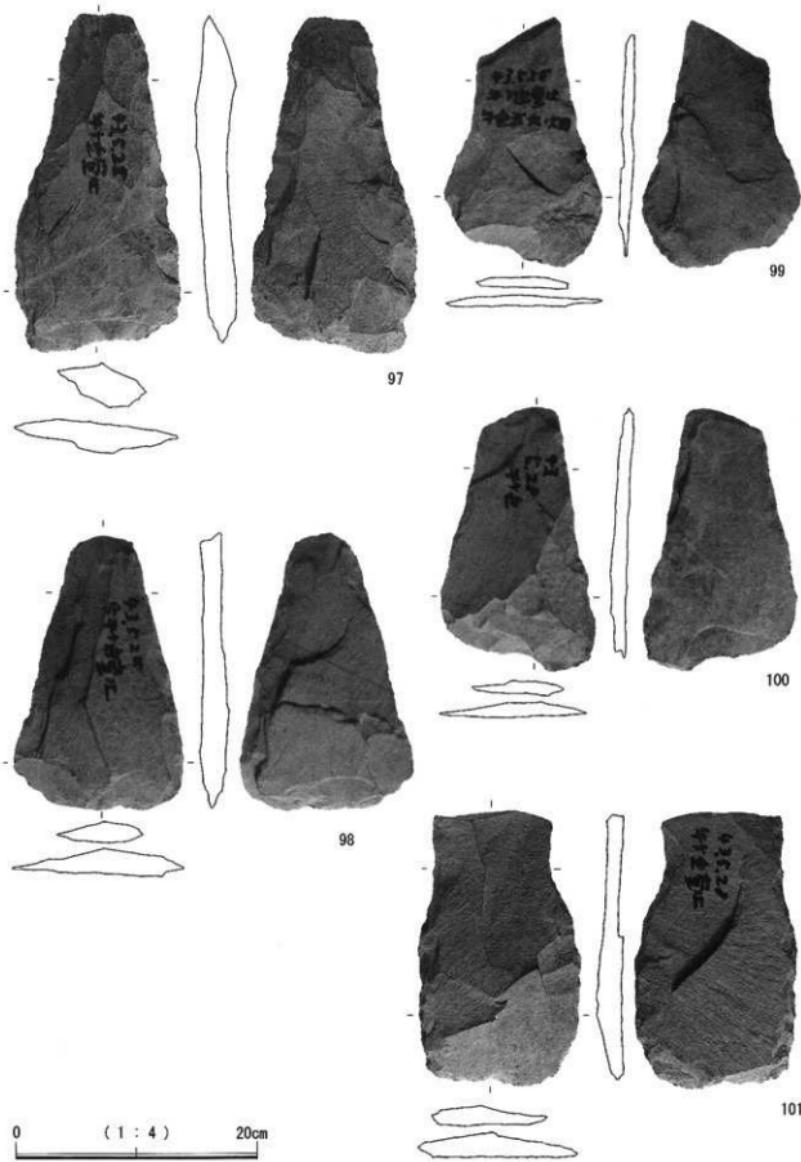
100 は長さ 21.3 cm × 幅 12.2 cm × 厚さ 1.3 cm、重さ 375.71g を測る。

101 は長さ 22.5 cm × 幅 13.0 cm × 厚さ 2.0 cm、重さ 808.72g を測る。



※1 鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課 長野真一氏・中村耕治氏・池畠耕一氏よりご教授いただいた

図V.13 堂ノ上地点 表探遺物（1）



図V.14 堂ノ上地点 表探遺物(2)

## 第4節 水頭地域の表探資料

倉庫Bにダンボール箱に入れた状態で保管されていた。収蔵にいたる経緯などは不明である。名札は虫食い状態であったが、羽口 90 の名札に「…年月日●. 47. 7. 7. (改行) …飯山 (改行) …養魚場 (改行) …善則」と記入があった。このことから野井倉の飯山集落にある製鉄伝承地である字「水頭」地域より、採取したものと考えられる。倉庫Aにあった土器 88・打製石斧 89 にも、88 の裏「飯山水頭 伊集院氏」、89 の表「1969年、3月17日」裏「野井倉字、水頭にて・湯又」の註記が見られる。

現地は、遺跡の範囲としては未登録であり、以前から鰻の養殖場が稼動している。建設前の地図を見ると大きな侵食谷の下方に貯水池と思われる池が記載してあり、谷を下ると菱田川がある。鉱滓に苔や藻などが付着していたことから、採取地点の一部はこの池もしくは沢付近と考えられる。周知の遺跡範囲外であることから、今後、現地の調査を行い、新たに遺跡とする必要が考えられる。

## 表探遺物

遺物は、土器 1点・打製石斧 1点・羽口 3点・鉱滓 3点・石材 2点がある。

土器 88 は 5cm 大の土器片である。色調は内面がぶい赤褐 (5YR5/3)、外面が橙 (5YR6/6) 色を呈する。器面は、内面が横のナデ、外面がおもに横の貝殻条痕が施される。胎土に含まれる混和材は長石・石英・金色雲母・黒色砂・赤色砂が見られる。粒度は 2mm 大以下である。形式は縄文前期の曾畠式であろうか。

打製石斧 89 は、長さ 13.5 cm × 幅 4.9 cm × 厚さ 1.6 cm、重さ 169.1 g を測る。剥片を加工しており、部分的に磨きを施している。刃部には使用に伴う剥離が見られる。

羽口はいずれも土製で、90 のみがほぼ完形である。羽口 90 と他の羽口 91・92 とは形態などが異なり、後者は器面調整の痕も身られず、やや大きい。また、いずれも内面は、径がほぼ一定で調整痕が見られないことから、何らかの芯棒を用いて成形したものと考えられる。

羽口 90 の形態は、後端部がラッパ状に開いている。法量は長さ 19.7 cm × 直径 7.0 cm、孔径 3.4 cm、重さ 984.6 g を測る。先端部から真ん中あたりまで径がやや小さくなる。外面と内面には成形時の指頭



図 V.15 水頭地域の位置

痕が多く見られる。ラッパ状の後端部には一部窪んだ箇所も見られる。外面の先端部には溶滌が付着しており色調が暗青灰 5B3/1色を呈する。他の色調は先端部から中央部付近までが緑灰 5G5/1色で、残りの外面と内面が橙 5YR6/6色を呈する。胎土中の混和材は1mm以下で、長石・黒色砂・赤色砂・石英・金色雲母などが見られる。

羽口 91 は、先端部が半分に後端部が欠損する。法量は長さ 10.7cm × 直径 7.8cm、孔径 3.3cm、重さ 503.4g を測る。外面の先端部に溶滌が付着しており色調が青黒 5B1.7/1色を呈して光沢をもつていて。溶滌の縁は 3 ~ 10mm 程度上上がる。この外側の縁は青灰 10BG 色を、それ以外の外面と内面はおもにぶい橙 7.5YR6/4色を呈する。胎土中の混和材は 1mm 以下で、石英・長石・黒色砂・赤色砂・金色雲母などが見られる。

羽口 92 は、欠損が激しく、法量が長さ 7.8cm × 直径 8.9cm、孔径 3.3cm、重さ 470.2g を測る。わずかに溶滌の付着の範囲が残っている。色調・胎土は 91 に類似する。

鉄滓はいずれも磁石<sup>※1</sup>に反応がなく鉄分がないもしくは少ないものと考えられる。

鉄滓 93 は、長さ 16.9cm × 幅 9.6cm × 厚さ 6.9cm、重さ 858.6g を測る。裏面には多量の小礫が付着しており、重量も軽いことから、流出した鉄滓の可能性が考えられる。

鉄滓 94 は、長さ 12.4cm × 幅 11.7cm × 厚さ 9.2cm、重さ 711.0g を測る。裏面は土製で、植物纖維の痕跡と 1cm 大以上の小礫が見られる。鉄滓の付着した炉壁の一部である可能性が考えられる。

鉄滓 95 は、長さ 21.5cm × 幅 11.7cm × 厚さ 10.8cm、重さ 1654.7g を測る。裏面には植物纖維の痕跡が見られる。重量も他に比べて重い。楕円形の破片とと考えられる。

#### 補足) 有明町内の製鉄跡について

有明町内における製鉄跡もしくはそれにに関するものについては、いくつかの文献に記述が見られる。以下、簡単に紹介する。

文献 1 :『有明町誌』(有明町郷土史編さん委員会 1980) 3カ所の記述があり、①野井倉 牧之内の「カナクン谷はその鐵治の跡だ」という、②野井倉 鼓山の「木炭粉と鉄滓が一つの層をなしている」、「鍛冶屋の送風管なども発見された」、③野神 針山の「この付近に「金糞段」と称するところは、鉄滓が多く出土している」とある。

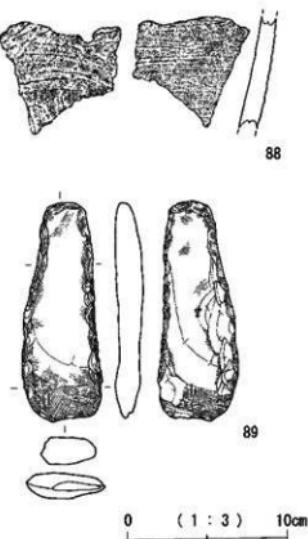
文献 2 :『有明町の文化財第 6 集—伝説—』(有明町文化財審議委員会 1982) 1カ所の記述あり、①野井倉 牧之内に「かなくそ谷の湧水」、②野井倉 牧之内は「牧之内宿落と牧場」、「小松には「かじ屋」があつて製鉄道路として「かなくそ谷が残っており、なお、川をへだて紋代郷の根拠地であった蓬原城に対していたと伝えられる。」とある。なお、現在の牧之内と小松は、金糞谷と呼ばれた谷を挟んで隣接している。

文献 3 :『有明町の文化財第 11 集—祭りと講—』(有明町文化財審議委員会 1989) 1カ所の記述あり、①野神 曲<sup>※2</sup>の「てっさい講(鉄滓講)」が昔昔は不明である。「鉄滓の出土する地が町内に五箇所あるが、曲集落もその内の一つである。」とある。

文献 4 :『有明町の文化財第 13 集—有明町の地名—』(有明町文化財審議委員会 1992) 3カ所の記述があり、①野井倉 - 金糞谷(かなくそだん)、②野神 - 金糞段(かなくそだん)、③山重 - 細谷工(せつのかみ)、ただし③は「堰」に関するもの可能性も指摘されている。

発掘調査などで羽口・鉄滓の出土例 ①仕明遺跡(66)の確認で羽口 1 点、②仕明遺跡の 1 ~ 3 時に鉄滓 2 点以上、桶原遺跡(116)で 5 点、いせんぼ遺跡(16)の表探資料に鉄滓 10 点が含まれている。それ以外でも、菱田流域の仮屋頭遺跡(18)で多量の鉄滓が採集として採取されており、製鉄跡と考えられている(牛ノ浜ほか 1985)。

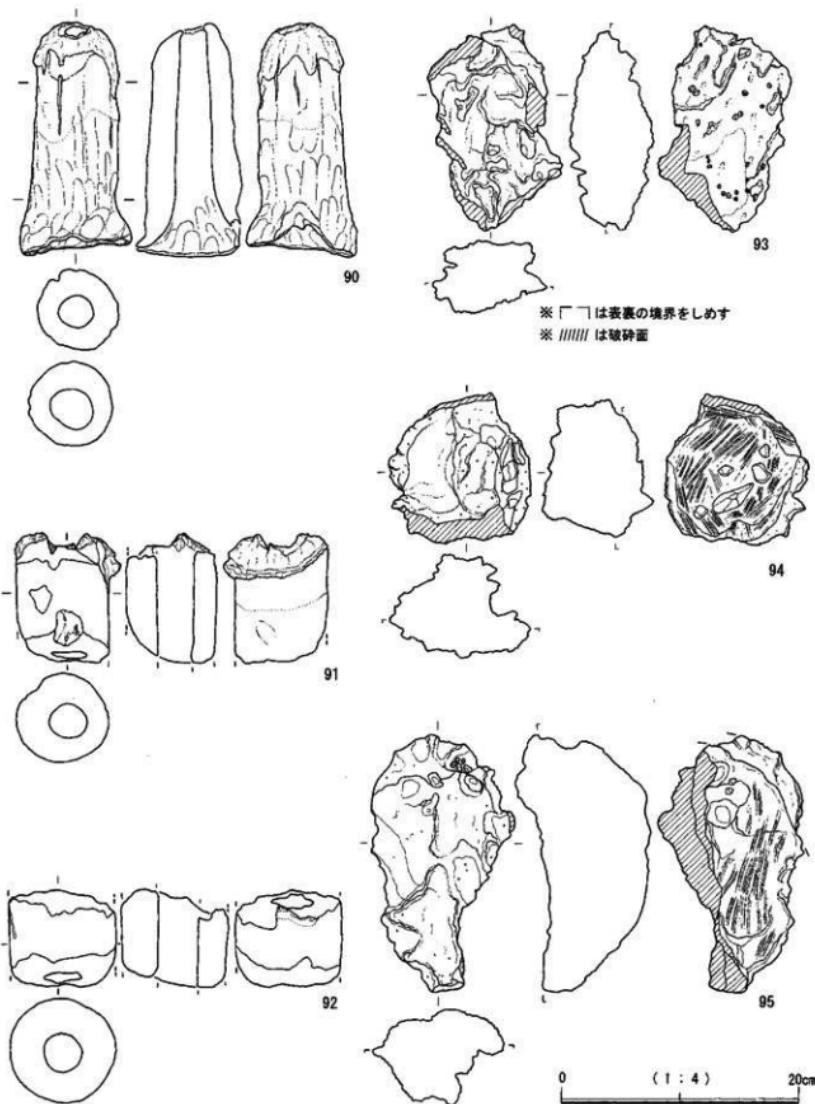
まとめにかえて 以上のように、町内に製鉄跡に関する可能性のある地點は複数ある。その中でも可能性が高いものは、菱田流域の仮屋頭遺跡(18)・「野井倉 牧之内の金糞谷」・「野井倉 鼓山の水頭」、「田原川上流の野神 針山の金糞段」などが挙げられる。いずれも時期は不明である。しかし、「野井倉 牧之内の金糞谷」に関係して「紋代郷の根拠地であった蓬原城に対していたと伝えられる」と伝承があり、中世にまで遡る可能性がある。



図V.16 水頭地域 表探遺物 (1)

\*1 教材用磁石を使用

\*2 大字は野神であるが、地域は山重である



図V.17 水頭地域 表探遺物(2)

## 第5節 その他の資料

今年度に寄贈のあった土器2点について紹介する。

## 1. 土器V.102

蓬原校区の中川尚樹氏より土器の底部片を寄贈頂いている。出土地は蓬原小学校裏手の坂道の土手であるとのことである(図V.18)。地点は周知の遺跡外であり、シラス台地と河岸段丘の境の斜面部にあたる。

土器102は、胴部外面に山形の貝殻条痕文を施し、底部と底面の境にキザミを施している。出土地点は、従来遺跡外とされることの多いシラス台地堆積面と河岸段丘面との境であるが、今後注意が必要である。時期は縄文時代早期ないし前期頃であろうか。型式は不明である。

## 2. 土器V.103

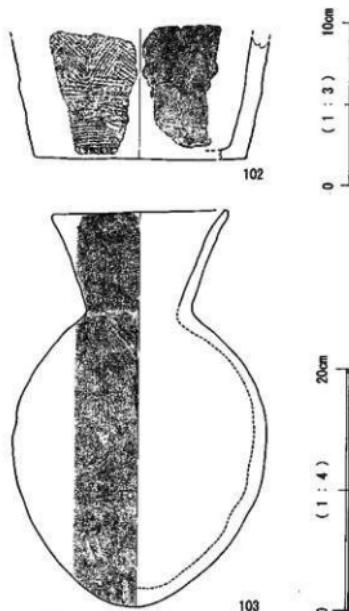
伊崎田校区の鍋集落 德重時丸氏より土器1点を寄贈して頂いている。土器は以前に友人の重水悟氏<sup>1)</sup>から預かったものであり、蓬原校区の有明健康ランド蓬ノ郷南側に広がる水田付近(図V.20)で砂取りを行った際に発見したものではないかと言うことであった。出土状況などは不明であるが、徳重氏は完形の土器が数個体出土していたと聞かれている。推定される出土地点は周知の遺跡の範囲外にあたる。

土器103は、口縁が一部欠損する以外は破損が見られず、ほぼ完形の壺である。内外面の器面調整にはハケメが多く見られる。器面には鉄分・マンガンが多く付着し、やや赤色化している。胴部下半には大きな円形剥離が見られる。形式は弥生時代中期の中津野式と呼ばれるものと考えられる。

出土地と考えられる範囲は、蓬ノ郷には湧水を水源とした普現堂池と呼ばれる池が古くからあり、



図V.18 土器102の出土地点



図V.19 2005年度の寄贈遺物

小字にも「中牟田」・「稗田」・「池田」などの名称が見られる。また、明治39年頃までは菱田川が大きく蛇行しており、付近は河川流域にあたる。土器103は、鉄分・マンガンの付着状況から恒常に水分を含んだ土壤に埋まっていたと考えられ、話と符合する。

これらのことから完形の土器が複数出土していることを合わせると、関西の低湿地遺跡などで見られる水辺の祭祀遺構の可能性が考えられる。有明町内の低地では遺跡が確認されていないが、今後、発見される可能性が高いと考えられる。

#### 表V.05 土器の観察表

推定番号	器種	基盤	部化	色調		調査・文様		胎土中の混和材 (mm)					備考
				内面	外面	内面	外面	鉄 度	石英 石	云母 云	重晶 重	黑色 色	
V. 19	底 102	底 5Y4/1	底 75YR5/4	にぶい褐	にぶい褐 輪部：横のナデ 底部：横のナデ	輪部：横のナデ 底部：横のナデ	輪部：横のナデ 底部：横のナデ	1	○	○	△	○	△
				にぶい褐 5YR5/4	にぶい褐 75YR5/4	口縁部：横のナデ	I (縁部：横のナデ 底～底部上半：輪のハケメ 底部下半：ナデ?)	3	△	○	△	○	△
	103	完形											外蓋が鉄分・マンガン の付着により赤色化



図V.20 土器103 推定出土位置



図V.21 明治39年頃の周辺地形

## あとがきにかえて



丸岡A遺跡の参加者一同



報告書作成の参加者一同

有明町最後の埋蔵文化財発掘調査報告書となりました。作成は合併や閉町業務の中での作業となり、十分な内容とは言えません。しかし、私達の住む有明にも、すばらしい文化・歴史・文化財が存在することを少しでも知つてもらおうと考えて作業を進めました。本書を始めこれまでの有明町での調査成果が、今後志布志市において活かされることを心より祈っております。

最後となりますが、有明町で作業を始めてから今日まで多くの方々に協力を頂きました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

(黒川 晃・中水 忍・東 徹志)

# 図版



図版1 丸岡A遺跡 空中写真



空中写真

※国土画像 国土交通省より  
昭和 49 年撮影



調査地遠望

図版2 丸岡A遺跡 遺構（1）



豊穴状土坑及び柱穴1～3 完掘状況



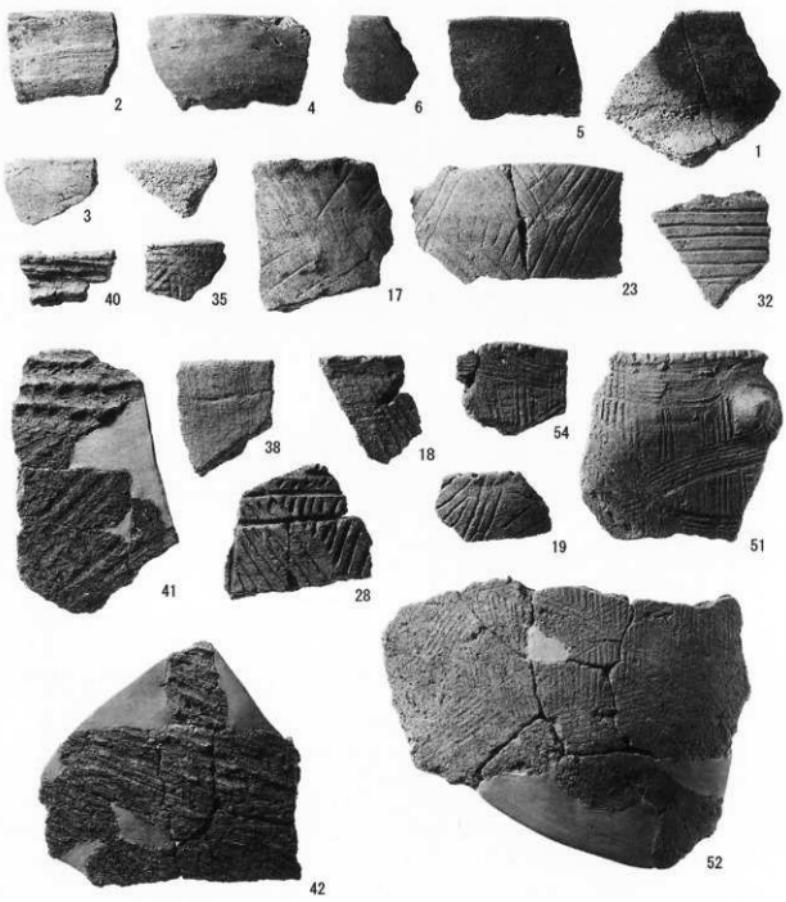
集石遺構1

図版3 丸岡A遺跡 遺構 (2)



①竪穴状遺構の底面検出状況 ②竪穴状遺構の土層断面 ③竪穴状遺構の付近調査区断面 ④竪穴状遺構の横調査区断面

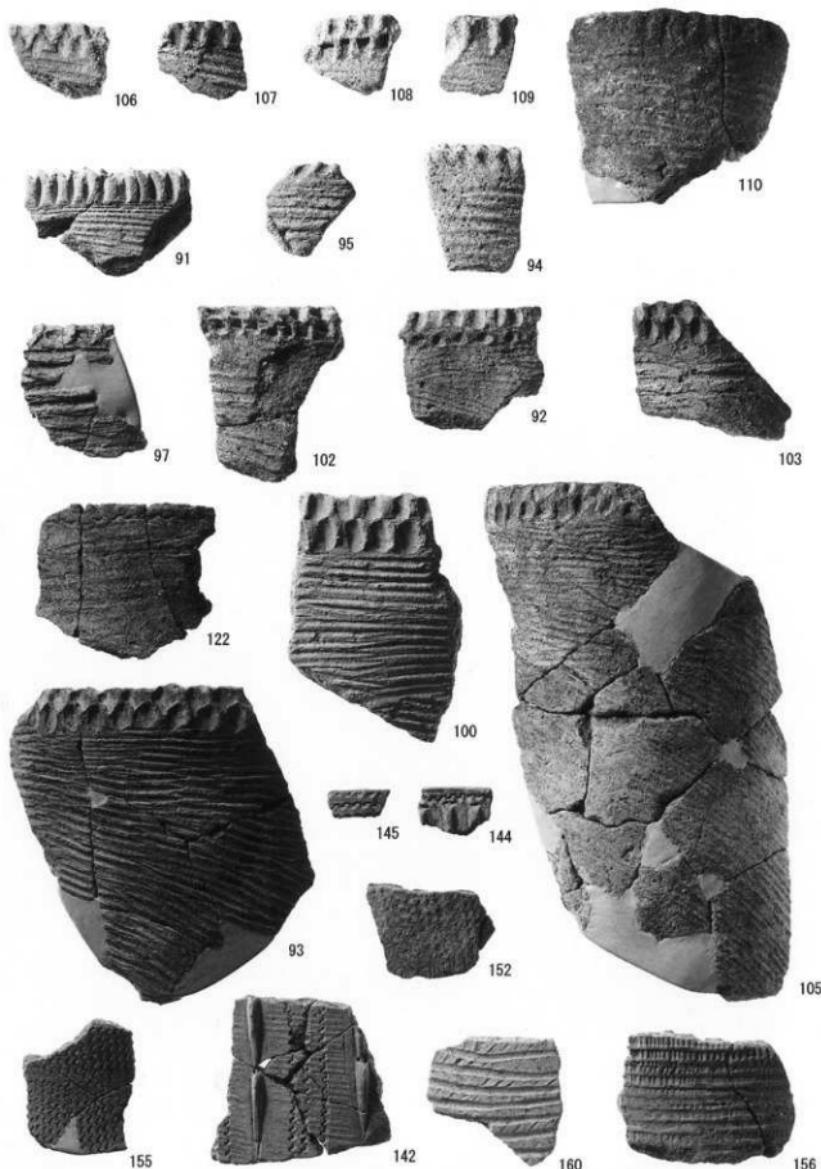
図版4 丸岡A遺跡 土器 (1)



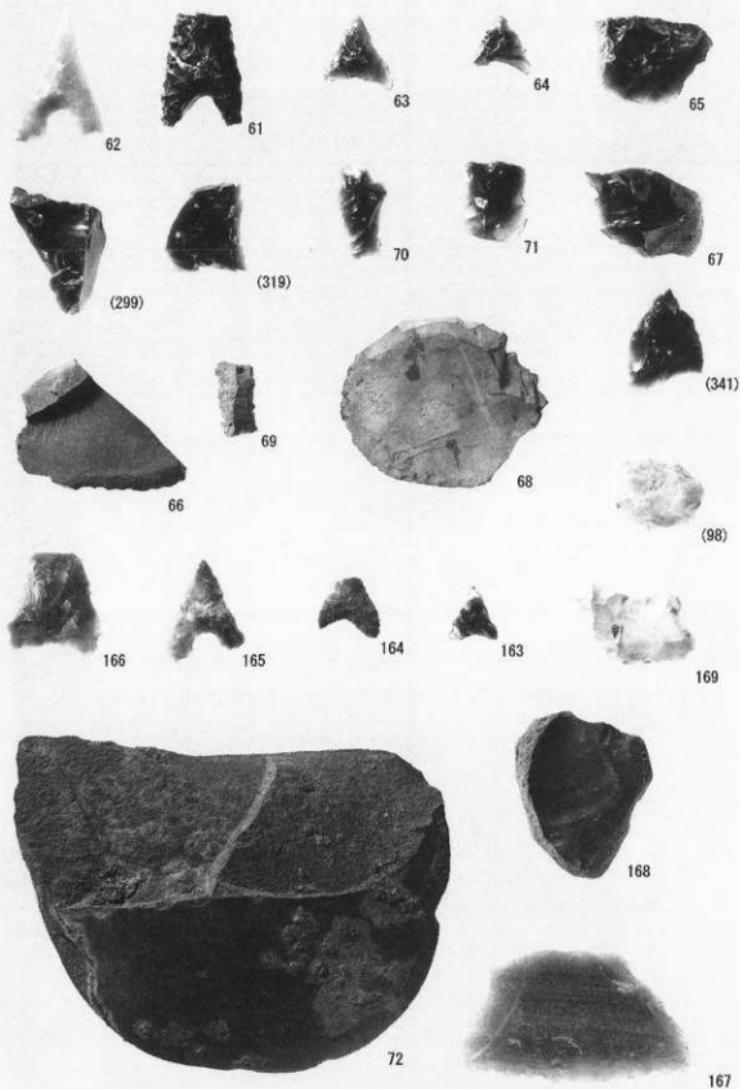
III・IV層 出土土器



図版5 丸岡A遺跡 土器（2）

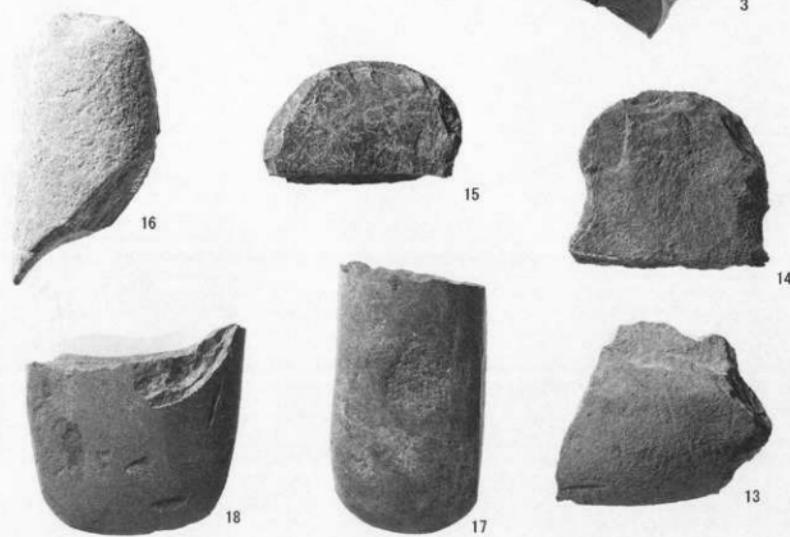
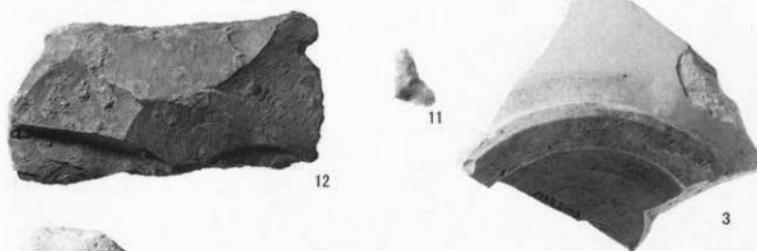
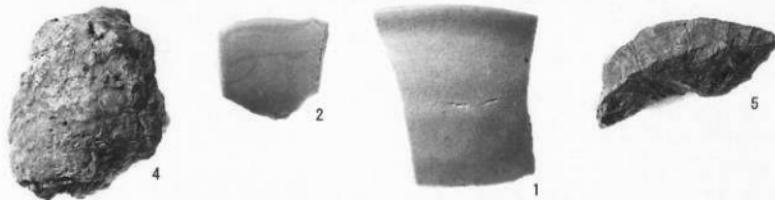


図版6 丸岡A遺跡 石器



※上半はⅢ・Ⅳ層、下半はⅥ層出土  
※(数字)は遺物取り上げ番号

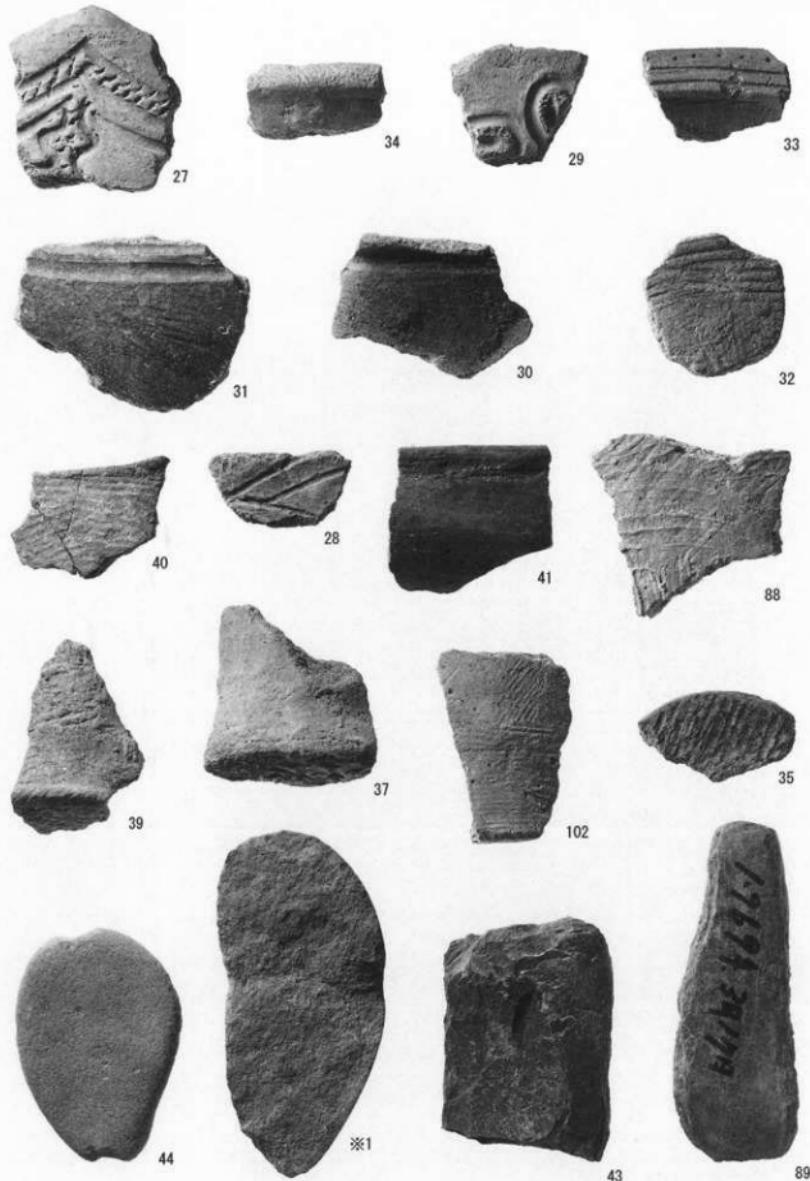
図版7 仕明遺跡・長田遺跡・楠原遺跡の追録



図版8 高牧城跡遺跡



図版9 いせんぼ遺跡ほか



※1 横堀遺跡出土の縄文時代早期打欠石錐

図版 10 いせんぼ遺跡・堂ノ上地点・水頭地域ほか



103	73
75	74
82	72
48	45
52	60
63	55
50	51
42	62
99	95
100	94
96	101
97	93
98	90

---

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

有明町内遺跡

発行日 2005年12月28日

発 行 鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地

TEL 099-474-1111

印刷所 斯文堂株式会社

〒891-0122 鹿児島市南栄2-12-6

TEL 099-268-8211

---



